

中學  
課程  
日本地理  
全

108  
14

東京圖書館			
冊	四	架	函
冊	號	架	類
			門



地理に致されざる様相見受誠世よあまされたる地理書と  
其途を異ふまゝの所を教服し外無き産こと行文の簡易  
して流暢かると頁数の長短宜しき適したると實地教授  
上に便宜を與ふること甚だ多のべくと愚察仕候  
帝會の教多の學者と教育家とより成立せざるのなれを  
如きは用意の所謂朝飯前の事と存及べし校閱し難言  
お付まゝの亦宛足らざるべきを歎安評貴意の適否  
否也

十二月十日

棚橋一郎

# 中等学科教授法研究会

## 緒言

一本書ハ、文部省令尋常中學校學科程度ニ準據シテ、尋常中學校及  
ビ之ト程度ヲ同フスル諸學校ニ於ケル、日本地理科教授用書ニ  
充テシガ爲ニ、編纂セルモノナリ。  
一本書ハ、全篇ヲ四章ニ分テ、第一章序説ハ、地球ノ表面ニ關スル事  
項ヲ畧説シ、第二章日本地理ハ、主トシテ自然地理ニ屬スルモノ  
ヲ説キ、第三章地方各誌ハ、一畿八道及ビ臺灣島ノ處誌ニシテ、第  
四章ハ人文地理ヲ説ケリ。  
一第三章地方各誌ハ、先ツ道別ニヨリテ之ヲ總説シ、次ニ府縣別ニ  
ヨリ、府縣廳ノ所在地ヲ中心トシテ之ヲ細説シ、道別ト府縣別ト  
ヲ相並ビテ亂レザランコトヲ期セリ。故ニ一府縣ノ管轄區域ノ、

數道ニ跨レルモノハ、之ヲ各道ノ部ニツキ、其ノ土地ノ都會ヲ中心トシテ、別々ニ記述セリ、是レ即チ生徒ノ記憶ニ便利ナランコトヲ謀リシナリ。

一人口物産等ノ統計ニ關スルモノハ、概チ百位以下ノ數ヲ省畧セリ、是レ其ノ大要ニ通セシメンコトヲ目的トシタレバナリ、故ニ其ノ統計調査ノ年月ノ如キハ、一々之ヲ記入セズ。

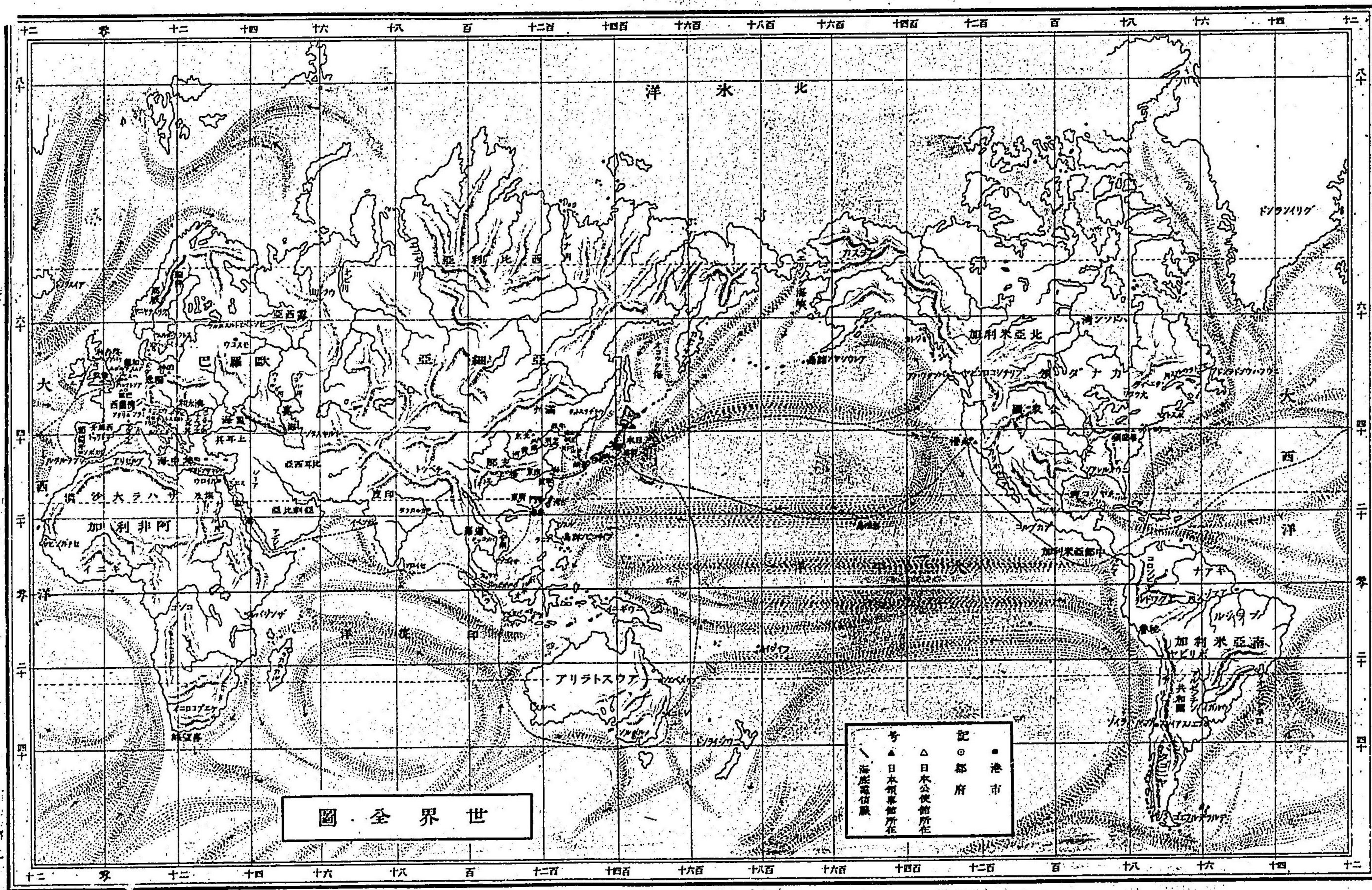
一山川ノ大小ハ、其ノ下ニ數字ヲ以テ示セリ、假令ハ、富士山(一二四六七)ハ、其ノ高サ一萬二千四百六十七尺ノ畧ニシテ、利根川(七三二)ハ、其ノ長七十三里ノ畧ナルガ如シ。

一氣候ノ溫度ヲ表スルニハ、凡テ攝氏ニ從ヒタリ、故ニ若シ之ヲ華氏ノ計數ニ換算スルノ必要アルトキハ、左ノ式ニヨルベシ。

攝氏× $\frac{9}{5}$  + 32 = 華氏

### 中等學科教授法研究會にて教科書編纂の趣旨

教科書は、教授の最要具なり、之を編纂するには、須く先づ、生徒の心意を研究して、其の程度に於ける、教育の理法に従ふべきは、勿論なりと雖、又實歴に徵驗して、空理空想に馳することを避けざるべからず、而して、教授する所の學と術とをして、並行して相戻らざらしめんことは、素より難事と爲す、然れども、教育者の責任は、實に、是に存す。彼の巨艦を行るものを見るに、其體や、實に宏大なり、其裝置や、實に複雑なり、而して、艦長、之を指揮するに方りては、進退自由にして、全艦の活動、唯一人の意志のまゝなり、是れ他なし、其の理と其の術と、相一致するによるのみ、教育者の事、豈、之に類せざらん夫れ、生徒の心意現象の複雑なるは、巨艦の裝置に異らずと雖、之を研究して、一定の理法を求め、之を操縦するに、其術を以てせば、何ぞ完全なる發達を期すること能はざるの理あらん、而して、教科書は、實に、其術を施すの要具なり、生徒の心意の發達に對して、最も適切なることを期せざるべからず、而して、今世に行はるゝ中等教科書の類を見るに、近來、學科程度の變更等ありつる故に、其材料の撰擇、程度の斟酌等、之に適當なるもの極めて鮮し、是に於て、我が研究會、自ら揣らすして、其の編纂に着手せり、編纂の主眼



とする所、大略、左の如し。

- (一) 中等教育は、思想期に到達せる生徒の教育なり、故に、其教科書は、生徒も亦自ら研究するの餘地なかるべからず、故に、仔細の事項は、之を記載せず。
- (二) 教授する所の學と術とは、其大要に於て、異同あるべからずと雖、其細目に至りては、教授者各、異見あり、故に、其教科書は、唯大綱のみを排列して、其他は、教師の口授に任す。

蓋し、在來の教科書は、其説述周密に過ぎて、生徒の思考を練磨するの餘地無く、隨て、其智識は、自ら記誦の末に趨るの弊あり、又、一方には、教師教授の妙用を施すの餘裕なくして、自ら枯燥無味の教授に陥るの弊あり。

然りと雖、研究会の編纂せる所のもの、素より疵瑕無しと爲さず、唯之を以て、目下の急を補はんと欲するのみ、尙、大方教育家の批評を仰ぎて、漸次改訂を施し、終に完全の域に至らんことを希ふのみ。

明治二十九年十二月

中等學科教授法研究会

一本書ニ用ヒタル、哩、漚、米、噸等ノ數ハ左ノ如シ。

哩ハ凡十四丁四十五間 漚ハ凡十六町九分八厘

米ハ凡三尺三寸 噸ハ凡三厘三毛

噸ハ凡千六百八十斤

一本書ノ編纂ニ方リ、幾多ノ教育家及々専門家諸氏ガ、叮嚀ナル批評ト校訂トノ勞ヲ取ラレシハ、深ク謝スル所ナリ。然レドモ、編者ノ識足ラズシテ、尙及バザル所多カルベキヲ信ズ。是等ハ、更ニ博識ノ批正ヲ待テテ、漸次ニ訂正ヲ加ヘントス。

明治二十九年十二月

編者識

中學  
教  
程  
日  
本  
地  
理  
目  
次

第一章 序說

第一節 地理學

第二節 地球の形狀及び其の大きさ

第三節 經度、緯度

第四節 五帶

第五節 水陸の區別

第六節 水陸の形狀

第二章 日本地理

第一節 位置

第二節 境域

第三節 廣袤

第四節 區劃

一 一  
二 二  
三 三  
四 四  
五 五  
六 六  
七 六  
八 七  
九 八  
十 九

第五節	海岸	十丁
第六節	山脈	十三丁
第七節	火山脈	十六丁
第八節	平原	十九丁
第九節	河流	二十丁
第十節	湖沼	二十二丁
第十一節	鑛泉	二十三丁
第十二節	氣候	二十四丁
第十三節	風	二十五丁
第十四節	雨雪	二十六丁
第十五節	海流	二十八丁
第十六節	植物	二十九丁
第十七節	動物	三十丁

第三章	地方各誌	三十一丁
第一節	畿內	三十一丁
第一總說	第二處誌	
第二節	東海道	四十一丁
第一總說	第二處誌	
第三節	東山道	六十一丁
第一總說	第二處誌	
第四節	北陸道	八十一丁
第一總說	第二處誌	
第五節	山陰道	九十二丁
第一總說	第二處誌	
第六節	山陽道	百一丁
第一總說	第二處誌	

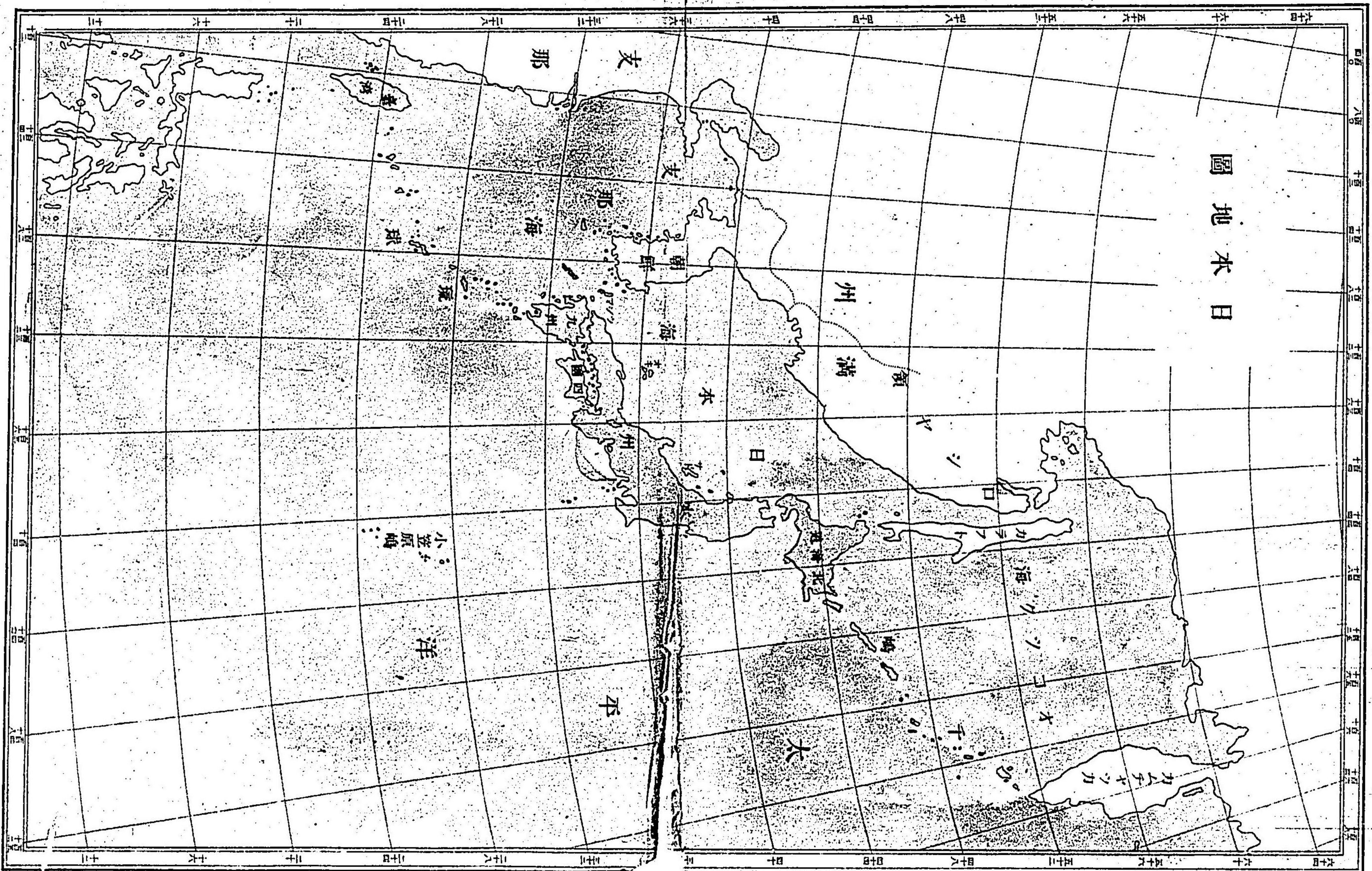


第七節 北海道	百一十丁
第一總說 第二處誌	
第八節 西海道	百二十丁
第一總說 第二處誌	
第九節 北海道	百三十五丁
第一總說 第二處誌	
第十節 臺灣	百四十四丁
第一總說 第二處誌	
第四章 人文地理	
第一節 人口	百五十一丁
第二節 教育	百五十二丁
第三節 宗教	百五十四丁
第四節 氣質	百五十五丁

第五節 風俗	百五十六丁
第六節 農業	百五十七丁
第七節 鑛業	百五十九丁
第八節 工業	百六十一丁
第九節 林產	百六十三丁
第十節 牧畜	全
第十一節 水產	全
第十二節 商業	百六十五丁
第十三節 交通	百六十八丁
第十四節 政治外交	百七十一丁
第十五節 軍備	百七十二丁

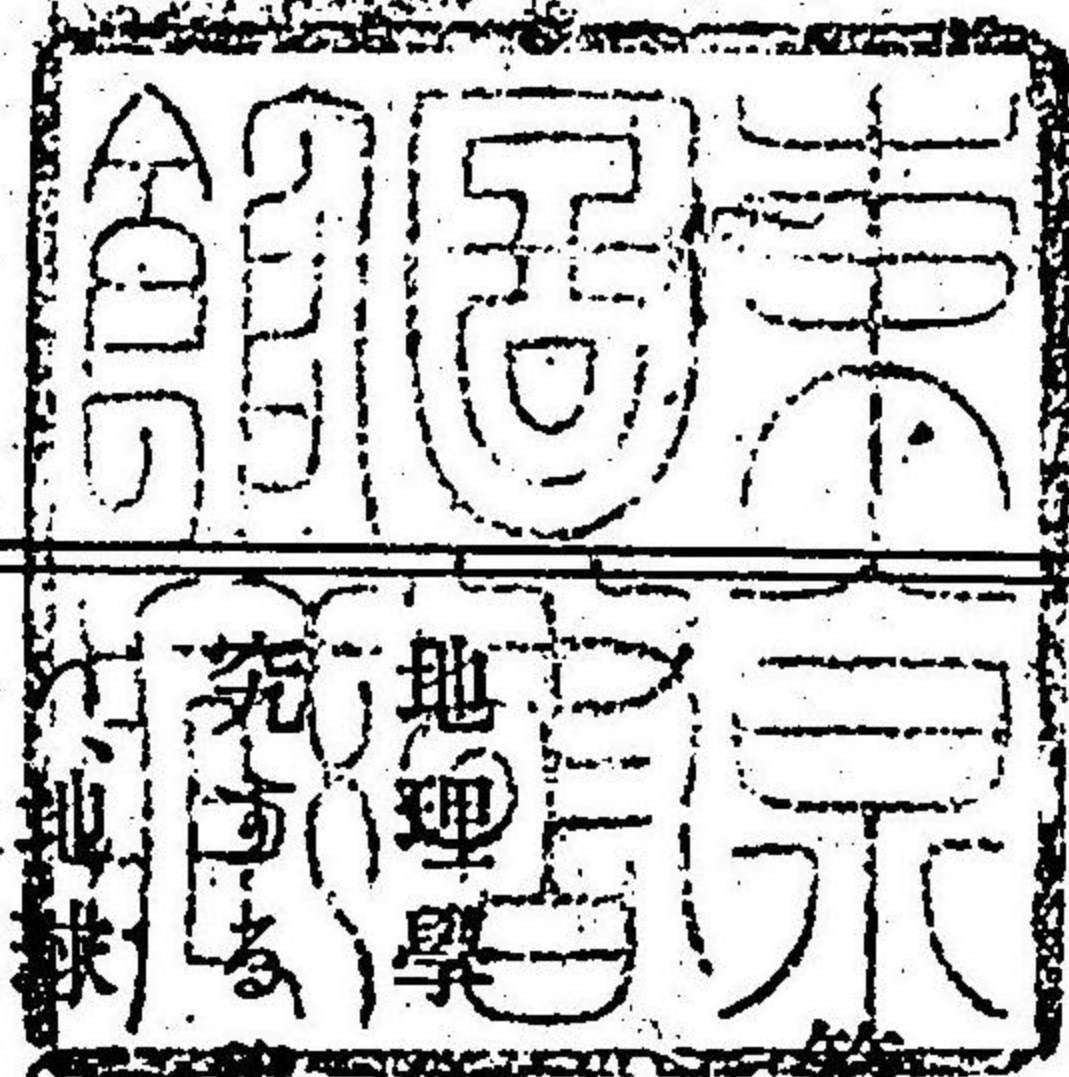
中學日本地理目次 終

日本地圖



中學 日本地理

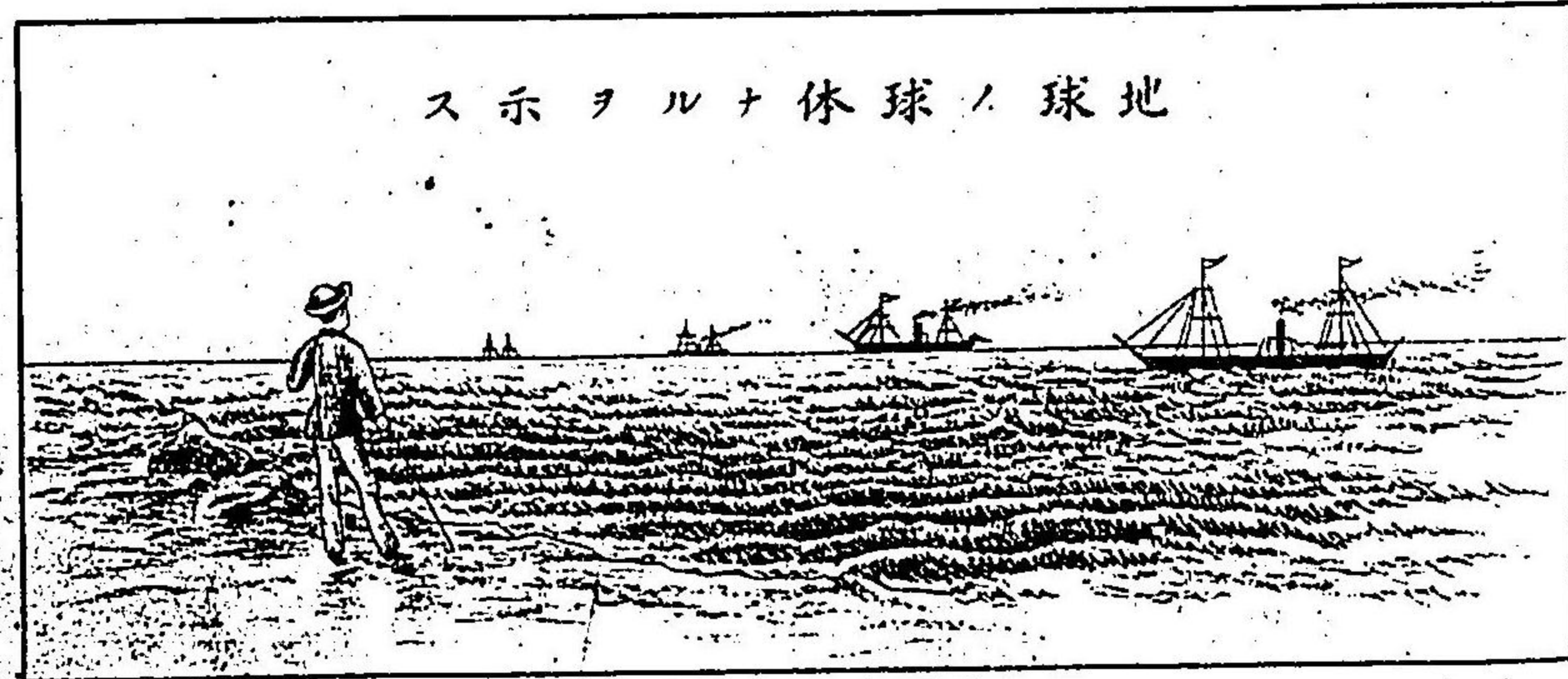
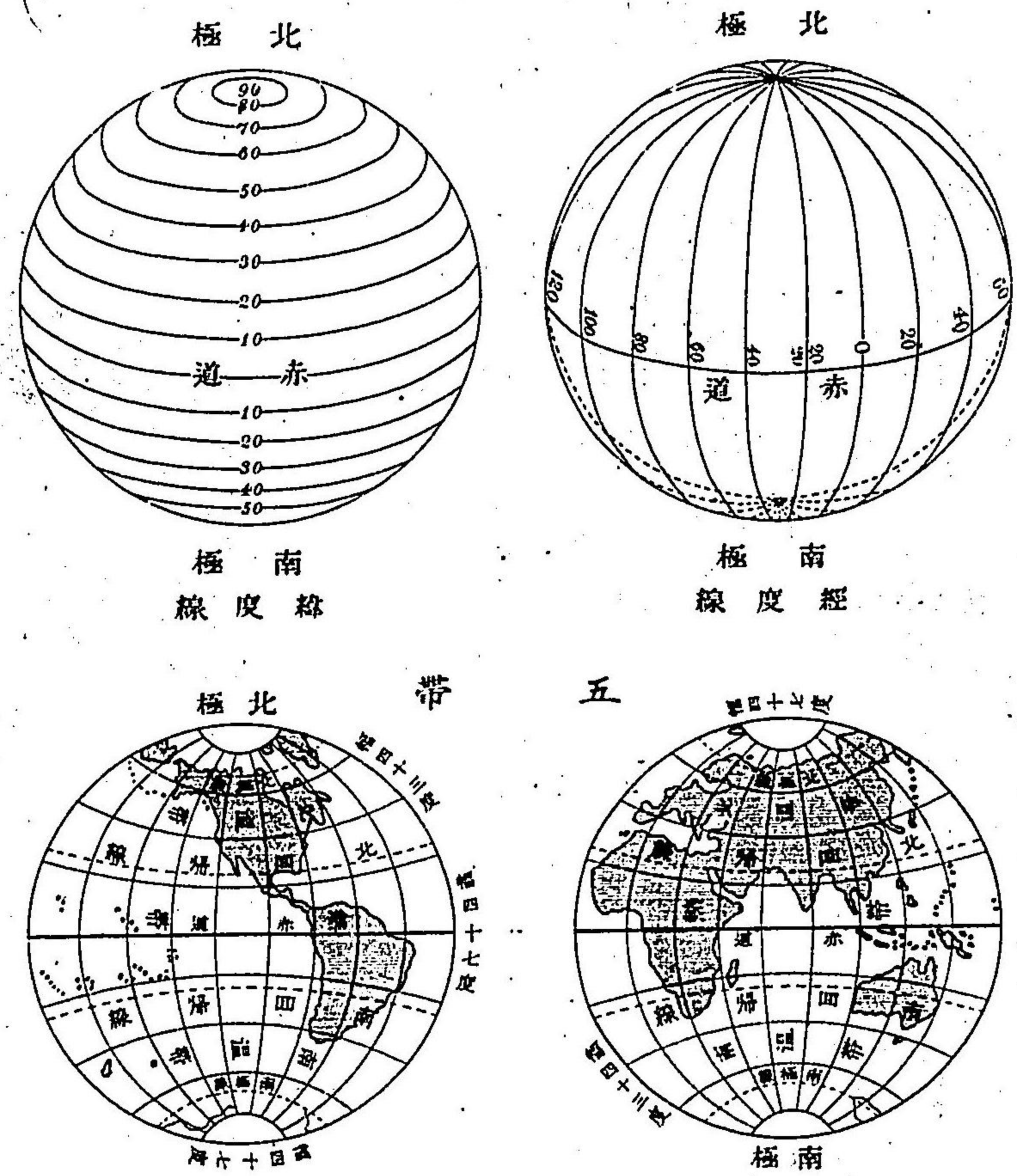
中等學科教授法研究會編



第一章 序說

第一節 地理學

地理學とは、吾人の住居する地球の表面に於ける諸般の状態を、論究する學なり。通常此の學を分ちて、三科となす。(第一)天文地理、地球の形狀、其の大きさ、運動、四季、晝夜の變化、及び地球の表面に於ける各地の位置等を論ずるものとす。(第二)地文地理、海陸自然の區別、氣候、風雨、及び動植、鑛物の播布等を論ずるものとす。(第三)人文地理、各國の位置、境界、人種、政體、教育、宗教、風俗、及び産物、貿易等を論ずるものとす。



第二節 地球の形状及び其の大きさ

吾人、今、廣濶なる地に出で、四方を觀望せば、此の地球の表面、平  
 なるが如しと雖、其の實、地球の如き圓體あるを以て、其の表面  
 の彎曲せり。然れども、その形、甚だ大にして、傾斜の割合小なるを  
 以て、唯平面の如く見ゆるのみ。今、その圓體ある形を認めんと欲  
 せば、海岸に立ちて、船の遠く去るを見るべし。始め、船體の下部  
 より、次第に没して、終に、唯檣頭のみ見ゆるに至る。又、月蝕の時、  
 月面に現はる、地球の影、必ず圓形なり。  
 是等の例によりて、地球の圓體なることを知るあり。然れども、地  
 球の眞の圓體にあらず、南北に於て、稍、匾平なるを以て、東西の直徑  
 は、七千九百二十五哩二分の一にして、南北の直徑は、七千八百九十  
 九哩あり。其の表面の面積は、大約一億九千七百万方哩あり。

### 第三節 經度 緯度

地球上、各處の位置を定めんが爲め、其の表面に、縱横の線を書き、その縱なるを經線と稱し、横なるを緯線と稱す。經線は、南北の兩極に達する線にして、三百六十あり。緯線は、東西に地球を一周する線にして、其の數百七十九あり。

經線の長さ、皆相等しと雖、緯線は、其の中央の赤道と稱する線、最も大にして、之より兩極に近づくに従ひ、漸く短し。經線緯線、共に其の兩線の間を、度と稱し、度を六十分して分と云ひ、分を六十分して秒と云ふ。此の度、分、秒の長さ、緯度は於ては、各處相等しと雖、經度はありては、兩極に近づくに従ひ、漸く短く、遂に零と爲る。

經度を算するは、英國グリニツ天文臺に當る線を零度とし、之より東西に算して、東經幾度、西經幾度と稱し、各百八十度に至りて止

地 形 圖



(1) 水原ヲ有スル高山  
(2) 低山  
(3) 山  
(4) 鐵道  
(5) 支道  
(6) 街道  
(7) 村落  
(8) 市街  
(9) 市街  
(10) 陸道  
(11) 陸道  
(12) 波止場  
(13) 三發洲  
(14) 河口  
(15) 下流  
(16) 半島  
(17) 山岳  
(18) 火山  
(19) 火山  
(20) 山腹  
(21) 小灣  
(22) 湖  
(23) 高原  
(24) 高原

(25) 山岳  
(26) 山岳  
(27) 山岳  
(28) 山岳  
(29) 山岳  
(30) 山岳  
(31) 山岳  
(32) 瀑布  
(33) 瀑布  
(34) 海濱  
(35) 沙丘  
(36) 注海峽

(37) 低濱  
(38) 群島  
(39) 群島  
(40) 森林  
(41) 森林  
(42) 港  
(43) 海峽  
(44) 峭岸  
(45) 峭岸  
(46) 低島  
(47) 陸舌  
(48) 燈台

一 又、緯度を算するより、赤道を零度とし、之より南北に算して、南緯幾度、北緯幾度と稱し、各九十度に至りて止む。

第四節 五帶

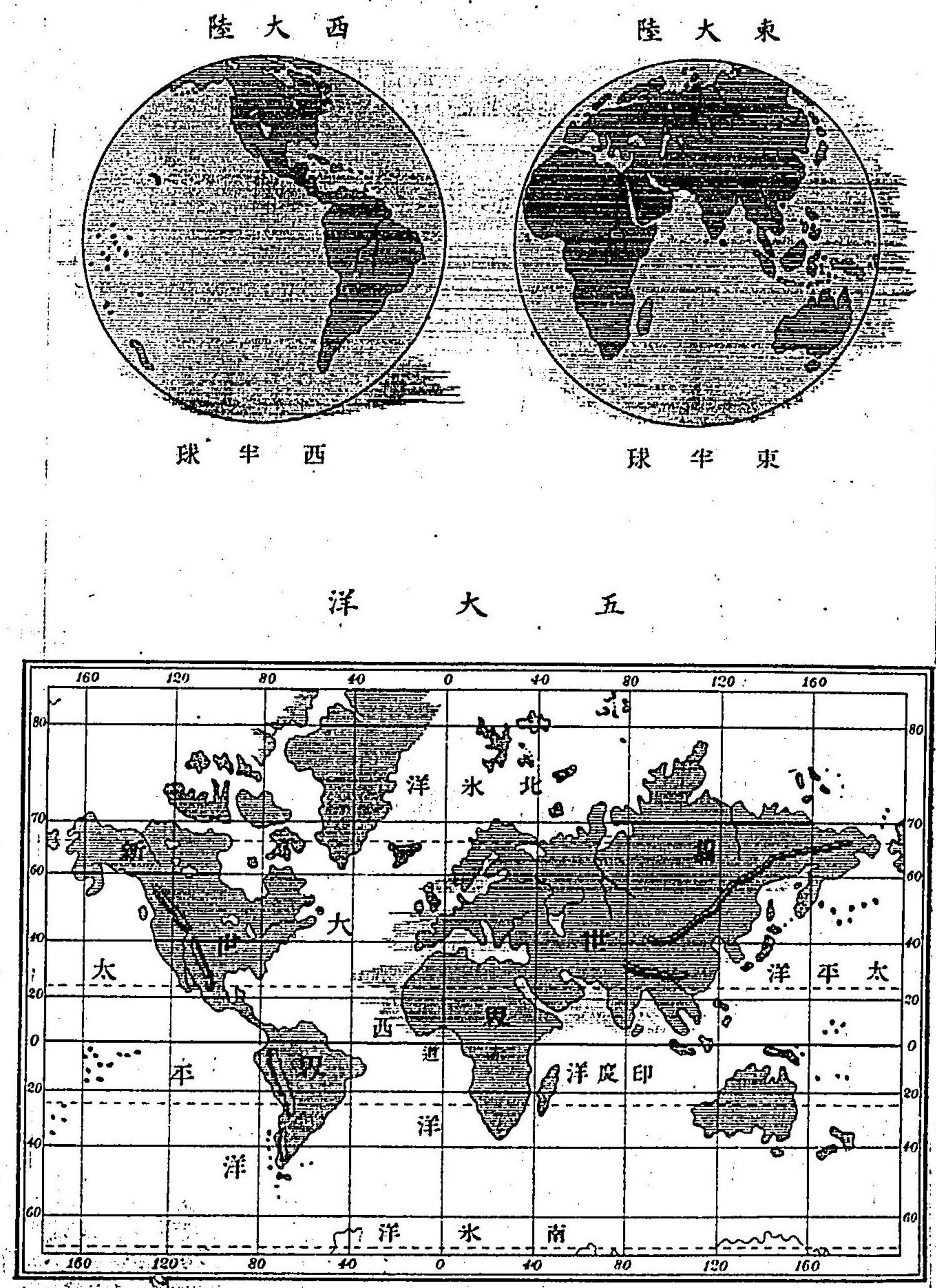
赤道より、南北共に二十三度半の處に、各一線を畫き、之を回歸線と稱す。南回歸線ハ、又冬至線と稱し、北回歸線ハ、又夏至線と稱す。此の二至線の間の地ハ、大陽常ニ其の頭上ニあるを以て、温度最も高く、此の部分を熱帶と稱す。  
又赤道より、南北共に六十六度半、即ち、兩極より二十三度半の處に、各一線を畫き、南極線北極線と稱す。此の兩極線と兩回歸線との間の地ハ、氣候温暖なり、故に、此の部分を、溫帶と稱す。兩極線より、兩極に至る間の地ハ、温度最も低し、此の部分を寒帶と稱す。溫帶と寒帶とは、共に、南北の二帶あり、之に中央の熱帶を合せて、五帶と稱す。

### 第五節 水陸の區別

地球の表面は、水と陸とより成り、水は、殆ど、總面積の四分の三、即ち、一億四千四百萬方哩を占め、陸は、其の四分の一、即ち、五千三百萬方哩を占む。

(一)陸の區別、陸は、概ね、二大彙を爲せり、其の大なるを、東大陸と稱し、其の小なるを、西大陸と稱す、東大陸は、亞細亞、歐羅巴、亞非利加の三大洲より成り、西大陸は、南亞米利加、北亞米利加の二大洲より成る、尙、之に、阿西亞、尼亞洲を加へて、六大洲と云ふ、其の中、最も大なるは、亞細亞にして、最も小なるは、阿西亞、尼亞なり。

(二)水の區別、水には、海水、陸水の別あり、海水を別ちて五と爲す、今、面積の大小によりて、順次に、其の名を擧ぐれば、太平洋、大西洋、印度洋、北氷洋、南氷洋、即ち是なり。



第六節 水陸の形状

水陸共に、其の大小形状によりて、皆異りたる名稱あり、即ち、陸には、大陸、半島、岬、地峽、山谷、平原、沙漠等の名あり、又、水には、大洋、海、海峽、灣、河川、湖沼等の名あり、圖につきて、其の名稱を研究すべし。

第二章 日本地理

第一節 位置

我が大日本帝國は、大太平洋の西北隅に位して、亞細亞洲の東岸に羅列せる、島嶼國なり、其の群島は、東北より斜に西南に延きて、北緯二十一度五十三分(臺灣南岬)より、同五十度五十六分(千島亞賴度島)に達し、東經百十九度十九分(臺灣澎湖島)より、同百五十六度三十二分(千島占守島)に至り。

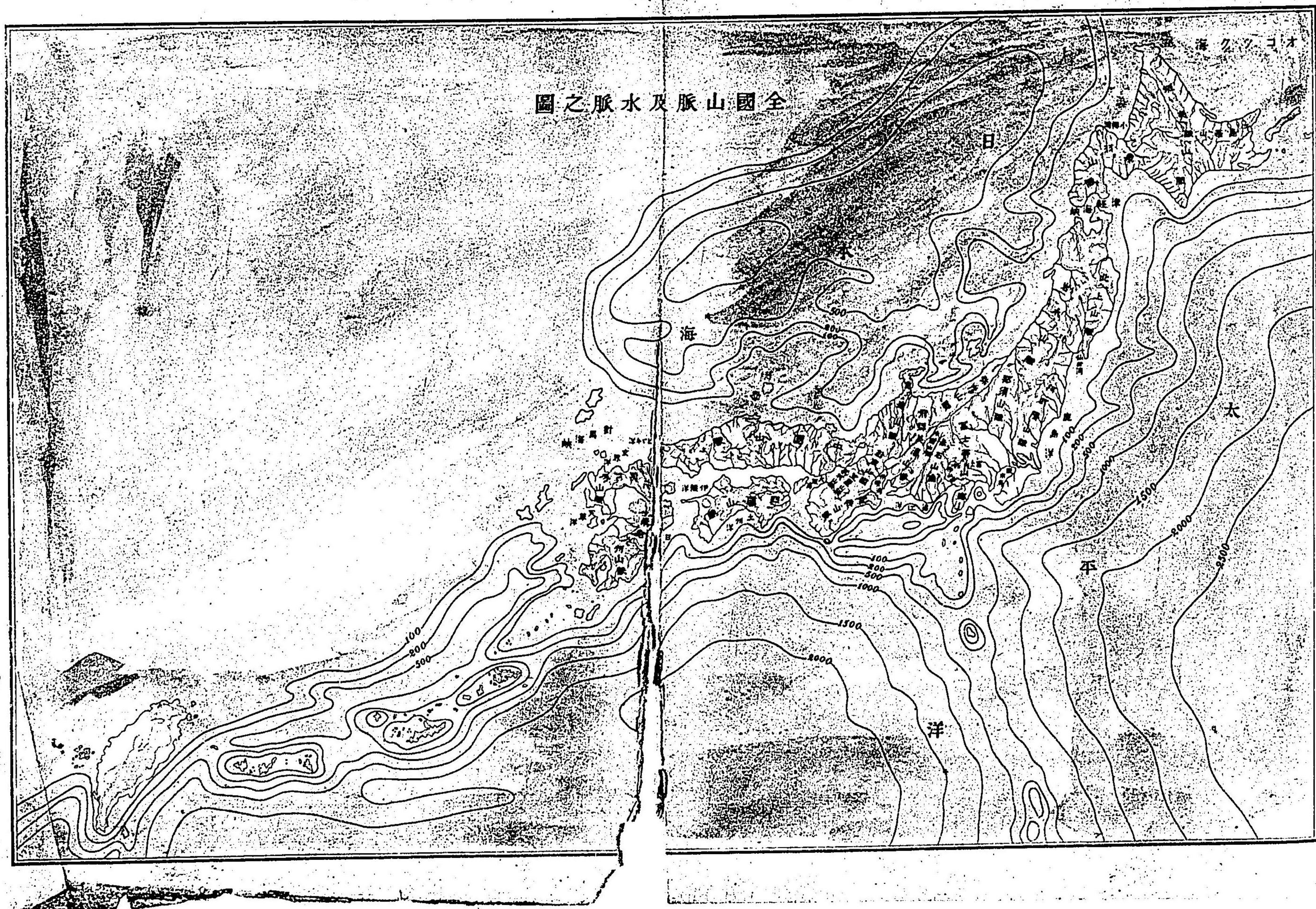


### 第二節 境域

我が國は、四面皆海洋にして、北はチヌーク海あり、西は日本海あり、西南に支那海あり、東南は、總て太平洋に面す。故に、隣國と直に地を接する處無しと雖、其の相距ること近きは、北方に於て、宗谷海峽を隔つる樺太島及び、久留里海峽を隔て、堪察加半島あり、又西方の對馬ハ、朝鮮海峽を隔て、朝鮮半島と相望み、西南臺灣島は、臺灣海峽を挾みて、支那本部に對し、南は、フィリピン群島と相望めり。

### 第三節 廣表

我が國は、五個の大島と無數の島嶼とより成れり。五大嶋ハ、本州、蝦夷、九州、四國、及び、臺灣にして、屬島の重なるものは、千島(三十二島)、琉球(五十五島)、佐渡、隱岐、淡路、壹岐、對馬、小笠原(二十島)及び、澎湖島、紅頭



全圖山脈及水脈之圖

嶼等なり。  
 五大島の中、本州は最も大にして、群島の中央に位し、長さ五百里、幅  
 廣き處、百里に近し、之に次ぐは、蝦夷島にして、廣袤各、八十里あり、次  
 ぎは、九州及び臺灣にして、兩島の幅員ハ、大約、蝦夷島の半に當れり、  
 最も小なるは、四國にして、其の幅員、九州の半に及ばず、今、五大島及  
 び、千島、琉球の面積を、左に掲ぐ、

本州(佐渡、隱岐、淡路、小笠原島共)  
 蝦夷島  
 九州(壹岐、對馬共)  
 臺灣  
 四國  
 千島(三十二島)  
 琉球(五十五島)

一四、六九〇方里  
 五、〇六二方里  
 二、六七一方里  
 二、五一四方里  
 一、二八〇方里  
 一、〇三三方里  
 一、五七方里

全國の總面積は、大約二萬七千三百方里あり、之を諸外國に比すれば、大約支那は、二十六倍、朝鮮は、二分の一、英國は、その屬地を合せて五十七倍、露西亞は、五十三倍、佛獨の兩國は、各一倍餘、北米合衆國は、二十倍に當れり。

#### 第四節 區劃

全國を大別して、畿内八道とす。八道とは、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海、北海にして、尙、此の外に、臺灣あり。畿内八道を小分して、八十五國となす。又、國に、郡、區、市、町、村等の分ちあり。今、左に、國別の名を掲ぐ。

畿内(五國)

山城、大和、河内、和泉、攝津

東海道(十五國)

伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸

東山道(十三國)

近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後、

北陸道(七國)

若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、

山陰道(八國)

丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、

山陽道(八國)

播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、

南海道(六國)

紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、

西海道(十二國)

筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、琉球、

北海道(十一國)

渡島、後志、石狩、天塩、北見、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千島、

臺灣(三部)

臺北、臺中、臺南、

第五節 海岸

日本群島ハ其の數頗る多く、海岸線の全長ハ、大約七千五百里あり、殊に、太平洋岸の屈曲は甚だ多く、其の長さは、日本海岸に比すれば、二倍餘なり。此の如く、我が國の海岸線は、延長せるを以て、航海舟楫の便利、極めて多し。今、五大島の海灣岬角等につきて、最も著しきものを左に掲ぐ。

(一)蝦夷島の海岸 蝦夷島の海岸には、北に宗谷岬あり、宗谷海峽を隔て、樺太島に對す。南に襟裳岬あり、東方知床岬と納沙布岬との間に、根室灣あり。渡島半島は、火山灣を抱きて、其の南に函館灣あり。灣の南は、津輕海峽にして、本州と相對す。

(二)本州の海岸は、北端に青森灣ありて、斗南半島と津輕山嘴とに圍まれ、陸中の海岸には、牡鹿半島の西に、仙臺灣あり。房総半島突出して、東京灣を成し、伊豆半島の東には、相模灣、西には、駿河灣あり。之より西に遠州灘を経て、北に伊勢海の灣入あり。知多半島を以て、其

の東の衣浦と割れり。紀伊と四國との間は、紀伊水道にして、其の内を大坂灣と云ふ。是より以西は、瀬戸内海にして、沿岸の出入多し。雖、皆狭小なり。其の中、稍大あるは、唯、兒島灣あるのみ。又、日本海に面する海岸は、屈曲甚た少きを以て、男鹿半島、能登半島、富山灣、若狹灣、島根半島等の外は、著しきもの無し。

(三)九州の海岸 九州の海岸は、西部に於て、屈曲最も多く、肥前の國境は海中に錯出して、有明洋(筑紫灣)を圍み、松浦半島、島原半島、彼杵半島あり。又、唐津、伊萬里、大村の諸灣あり。南に、薩摩、大隅の二國斗出して、甕島灣を抱けり。豊後半島は、東北にありて、大分灣を成し、佐賀の關は、速吸海峽を隔て、四國と相對し、門司港は、早瀬海峽を隔てて、中國と相對す。又、其の西に福岡灣あり。

(四)四國の海岸 四國の海岸は、北に梶取岬と箱崎とありて、燧洋を擁し、南に、室戸岬、蹉跎岬ありて、土佐灣を圍めり。佐田岬は、西に斗

出して九州に向ひ、其の南に宇和島灣あり。

(五)臺灣の海岸 臺灣の海岸は、屈曲甚た鮮く、北部富貴角の東に、基隆灣あり。其の西に淡水灣あり。又、島の東北端には、北斗岬、三貂角等あり。南端には、南岬斗出せり。南岬の西の入海を南灣と云ふ。此外、東海岸に、蘇澳灣、西南海岸に、打狗灣等あり。

### 第六節 山脈

我が國の山脈は、樺太山系、支那山系の二大山系より成れり。樺太山系は、大略、南北の方向を取るものにして、北東の樺太島より、南に走り、北海道を経て、本州に入り、南に進みて、中央部に至る。又、支那山系は、支那大陸より起り、概ね、西南より東北の方向を取りて進み、九州の西部より、中國、四國を過ぎ、東北に走り、本州の中央部に達し、樺太山系と相會合す。此の兩大山系の會合點は、飛騨、甲斐、信濃地方にし

て、即ち、我が國第一の高地を爲せり。今、茲に主要なる山脈を掲ぐ。

蝦夷山脈、北上山脈、阿武隈山脈、

樺太山系

關東山脈、美濃飛驒山脈、寶達山脈、

鈴鹿山脈、木曾山脈、笠置山脈、

葛城山脈、

支那山系

九州山脈、四國山脈、中國山脈、

紀伊山脈、赤石山脈、臺灣山脈、

蝦夷山脈は、樺太島より來りて、天塩、北見の境を、南に走り、石狩の境に至り、千島帯火山脈と交叉し、十勝、日高の境を走りて、襟裳岬に至る。

北上山脈は、陸奥の馬淵川の南岸に起り、南に走り、牡鹿半島に終る。阿武隈山脈は、北上山脈の南部にして、磐城より常陸に入り、土浦の近傍に盡く。

關東山脈は、武蔵相模、甲斐の境上に亘れり。

美濃飛驒山脈は、越中越後の間より起り、美濃飛驒の東部に連れり。

寶達山脈は、能登半島より起り、加賀、越中の境を経て、美濃越前の境に出で、鈴鹿山脈に連れり。

鈴鹿山脈は、伊勢近江の間に亘りて、大和の東境を劃れり。

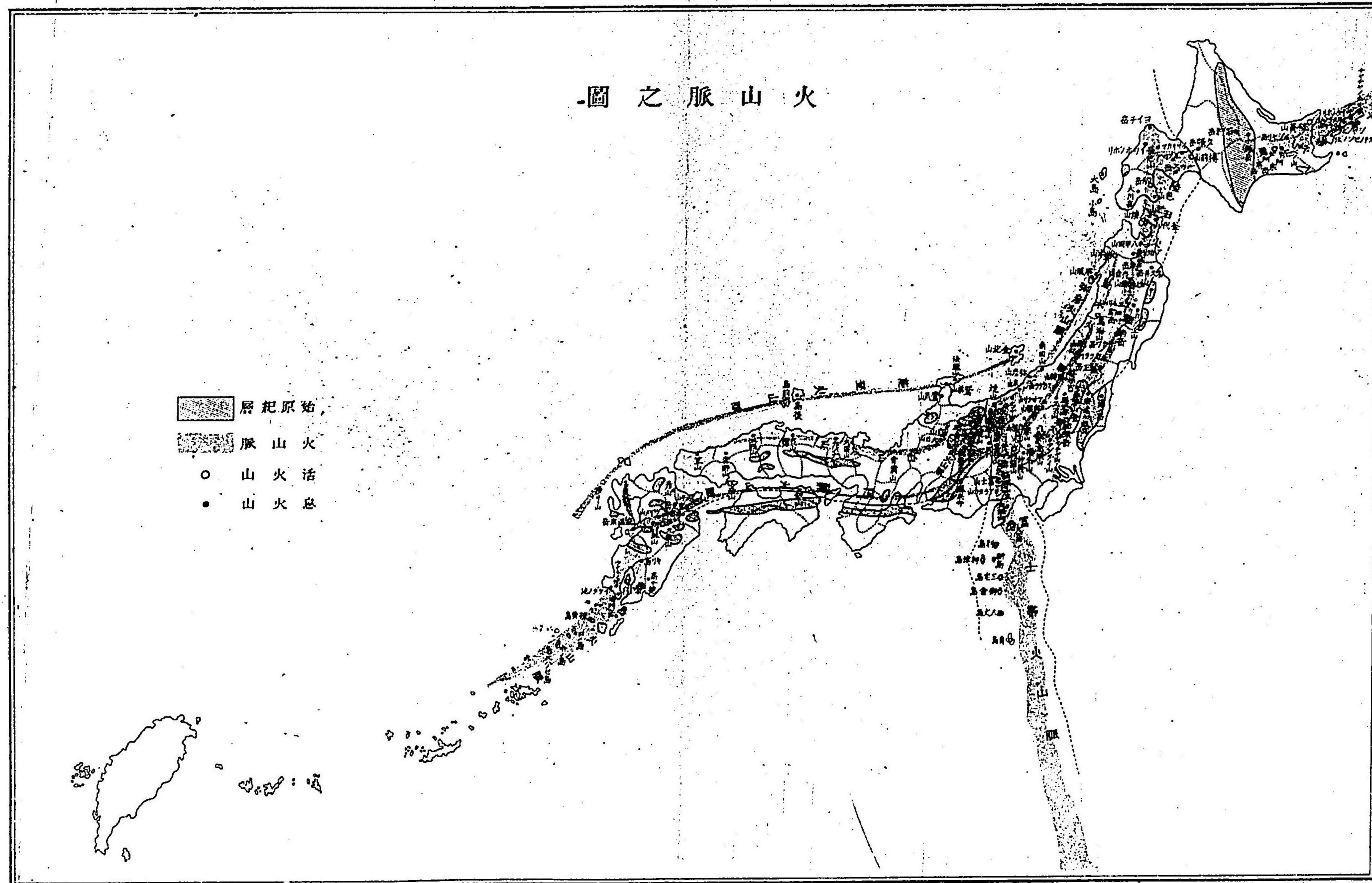
木曾山脈は、信濃の中央より、西南に亘れり。

笠置山脈は、山城の東南部より起り、大和に入りて、吉野川の沿岸に終る。

葛城山脈は、山城の西南部より起り、大和、河内の境を経て、紀伊に入る。

九州山脈は、南北の二派に分る。南派は、肥後の西南より起り、日向の國境を過ぎ、豊後の東部に入りて、佐賀の關に至る。北派は、肥前の北部より、筑前豊前を経て、中國山脈と相通せり。

火山脈之圖



四國山脈は、伊豫の西岸より、土佐の國境を走り、阿波の中央を過ぎ、て海岸に至り、紀伊山脈と相通せり。  
 中國山脈は、長門より起り、山陰、山陽、兩道の境を走り、山城の北境に至り、近江に達す。  
 紀伊山脈は、紀伊の西部より東西に向ひ、大和の南境を繞りて、伊勢の海に没し、再び、三河に現はれて、赤石山脈となる。  
 赤石山脈は、三河の渥美半島より起り、遠江の北部を経て、甲斐の西境に連り、其の末は、信濃に入りり。  
 臺灣山脈は、臺灣島の中央部より、南に走るものを、玉山山脈と云ふ。  
 北部の山脈は、數多の秀峯、錯雜して起伏せり。

第七 火山脈

我が國の山脈中、其の過半は、火山脈にして、火山の數は、百七十餘座

の多さに及びり、而して、之を千島帯、富士帯、霧島帯の三大帯に區別せり。千島帯火山脈は、堪察加半島より、千島諸島を経て、蝦夷島に至る。富士帯火山脈は、小笠原諸島より、八丈嶋及び伊豆諸島を経て、本州に入り、霧島帯火山脈は、西南ヨリ、ペン群島より、臺灣、琉球を経て、九州に入るものとす。而して、數多の火山脈は、概ね、本州中央部に於て、相會合し、茲に大火山地を成せり。今、左に、主要の火山脈を掲ぐ、

千島帯 千島火山脈、 奥羽火山脈、 那須火山脈、  
岩木火山脈、 彌彦火山脈、

富士帯火山脈

霧島帯 霧島火山脈、 阿蘇火山脈、 白山火山脈、  
能登火山脈、 御岳火山脈、

千島火山脈の、堪察加半島より來り、千島列島を過ぎて、蝦夷島に至り、蝦夷山脈と交叉し、遂に、西部に蔓延せり。



奥羽火山脈は、蝦夷島の後志、膽振より起り、陸奥の北端に渡り、青森灣を過ぎて、陸羽の境上を走り、岩代に入りて、那須火山脈に接す。那須火山脈は、奥羽火山脈の南部に接して、下野の北部より、上野を経て、信濃に入り、富士帯火山脈に連れり。岩木火山脈は、一に、出羽火山脈と稱す。陸奥の岩木山より起り、南に走りて、越後、岩代の境より、上野の西境に出で、信濃に入り、富士帯火山脈に連れり。彌彦火山脈は、羽後の男鹿半島より、海を渡りて、越後の海岸を走り、富士帯火山脈に接す。富士帯火山脈は、遠く南洋諸島に起り、小笠原島より、伊豆半島に連り、駿河、甲斐を経て、信濃に入り、數多の火山脈と會し、其の末は、越後に至り、彌彦火山脈に連る。霧島火山脈は、臺灣より、琉球諸島を経て、薩摩の南端に至り、大隅、日

向の境に入り、北西に折れて、肥前に亘れり。阿蘇火山脈は、肥後より起りて、豊前、豊後の間を走り、國東半島より、四國に渡り、其の北岸を過ぎて、紀伊に入り、遂に、三河の寶來寺山に連れり。白山火山脈は、長門の北部より、山陰道の海岸を、東に走りて、越前、美濃の境より、加賀、飛騨の境に至る。能登火山脈は、佐渡より起り、能登半島を過ぎ、日本海を通じて、隠岐に至り、其の南端は、肥前の五島に連れり。御岳火山脈は、越中より、飛騨、信濃の境に亘れり。

第八節 平原

我が國は、土地狹長にして、且、山岳到る處に起伏せるを以て、廣大なる平原に乏しく、其の平原と稱するは、唯、山脈の間に介在せる低地、

若くは海濱に向ひたる斜面の土地のみ、今其の主要なるものを、左に掲ぐれば、宜しく、地圖につきて、研究すべし。

石狩平原、天鹽平原、十勝平原、陸奥平原、兩羽平原、  
會津平原、越後平原、關東平原、尾濃平原、畿内平原、  
筑紫平原、吉野川平原、臺灣西部平原、

以上の中、關東平原、最も大にして、方三十里乃至四十里あり、之に次ぐは、越後平原にして、長さ四十里あり、次ぎは、尾濃平原、陸奥平原、石狩平原等にして、何れも地質佳良なれば、穀類蔬菜の産出に富めり、又、臺灣西部平原は、頗る廣濶にして、穀菜果實等に適せり。

### 第九節 河流

河流の形狀は、自ら地勢によりて、定るものなり、然るに、我が國の地勢は、狹長にして、山脈は脊骨を爲せり、而して、河流は、概ね、其の中央

より分疏し、兩面に流れて、太平洋及び日本海に注けり、故に、長大なるもの、甚だ鮮し、又、其の河流は、山岳高地の間より下るを以て、急灘の處多くして、舟運に乏しく、大雨の時は、氾濫の害を蒙る處鮮からず。

我が國の河流中、石狩河、信濃河、利根河を、三大河と稱し、球摩川、最上川、富士川を三急流と稱す、今、左に、長大なる河流を掲ぐれば、宜しく、地圖につきて、其の位置方向等を研究すべし。

石狩川、(一六七里)	信濃川、(一〇〇里)	北上川、(七九里)
利根川、(七一里)	阿武隈川、(七〇里)	天鹽川、(七〇里)
木曾川、(六六里)	最上川、(六二里)	天龍川、(六〇里)
射水川、(五八里)	阿賀川、(五七里)	神通川、(五二里)
江、川、(五〇里)	十勝川、(五〇里)	紀伊、川、(四七里)
川内川、(四六里)	大井川、(四六里)	吉野川、(四二里)

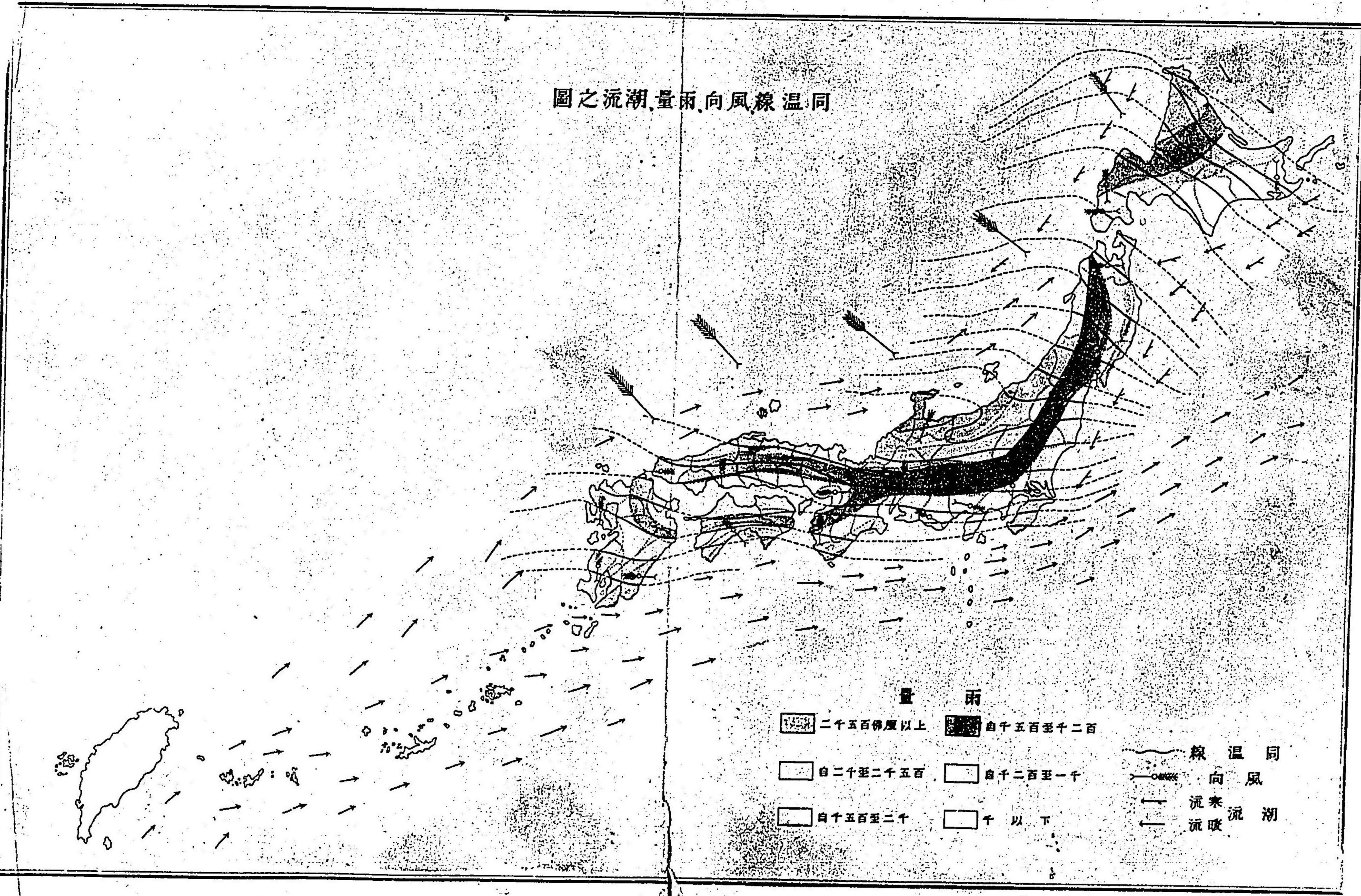
筑後川(三五里) 淡水溪(三〇里)

第十節 湖沼

我が國の湖沼は、其の生成によりて、概ね四種に區別することを得べし。(第一)海底隆起して、内海或は灣水の、一部分を圍みたるもの。(第二)地面の陷落して、凹處に水を湛へたるもの。(第三)火山の舊噴火口に、水を溜めしもの。(第四)近海の一部、漸次堆沙の爲に圍饒せられたるもの。即ち是なり。此の四種中、第三種の湖沼最も多く、休火山の山頂若くは山腹にあり、今、湖沼の最も大なるものを、左に掲ぐ。

- 琵琶湖(周圍七三里) 中海湖(周圍一六里) 尖道湖(周圍二三里)
- 霞浦(全 三六里) 八郎潟(全 一五里) 印幡沼(全 一二里)
- 猿間湖(全 一八里) 楓蓮湖(全 一五里) 十和田湖(全 一〇里)
- 猪苗代湖(全 一六里) 小河原沼(全 一三里) 洞爺湖(全 一〇里)

圖之流湖、量雨、向風、線温同



支笏湖(全一五里)

第十一節 鑛泉

鑛泉ハ、鑛物を含有する泉にして、温泉と冷泉との二種あり。我が國は、火山多きを以て、温泉は甚た多く、殆ど全國到る所にあり。鑛泉の中、其の性質によりて區別すれば、硫黄泉最も多く、鹽類泉、鹽泉、之に次ぎ、炭酸泉と鐵泉とは、較、鮮し。

伊香保(上野)、草津(同上)、關山(越後)、諏訪(信濃)、熱海(伊豆)、蘆、湯箱根、本宮(紀伊)、道後(伊豫)、山鹿(肥後)等の温泉ハ、硫黄泉にして、鹽原(下野)、塔、澤、宮、下(箱根)、有馬(攝津)等の温泉ハ、鹽類泉、鹽泉なり。又、柄崎(肥前)、別府(豊後)等の温泉ハ、炭酸泉にして、湯本(箱根)、龍神(紀伊)等の温泉ハ、鐵泉なり。此の外、臺灣にも亦温泉あり。而して、温泉の種類と、其の土地の氣候等によりて、病を治するに、特種の効能あり。此の如く、鑛泉の多きは、衛

生上、誠に幸福のことなり。

第十二節 氣候

氣候の寒暖は、一般に、五帶の區別によりて定めりと雖、又地勢、風向、海流、雨雪量等によりて、大に差異あり。故に、同緯度の土地と雖、寒暖常に同じきことを得ず。

我が國の南北の長さ、大約、一千百餘里に亘りて、北は、殆ど寒帯に近く、南は、熱帯に屬するを以て、全國各地の氣候に、大差あるは、勿論なり。且、近海には、暖流と寒流とありて、大に、氣候に影響を爲せり。而して、其の温度は、緯度の割合に比すれば、寒冷なりと雖、亞細亞大陸に比すれば、寒暖共に中和にして、能く人身に適し、禽獸草木の類に至るまで、大に繁殖せり。今、左に、各地の温度を示す。

年中平均温度

一

月

八

月

臺灣南端	基隆	那霸	長崎	廣島	和歌山	東京	金澤	函館	宗谷
二四、〇	二二、〇	二二、六	一五、九	一四、六	一五、二	一三、八	一三、一	八、四	五、七
一九、〇	一四、四	一六、二	五、六	三、五	四、四	二、六	二、一	零下三、〇	零下六、八
二七、〇	二九、〇	二七、三	二七、〇	二六、九	二七、	二五、六	二五、六	二一、一	一八、九

第十三節 風

我が國に起る風は、西北の亞細亞大陸と、東南の太平洋との原因せ

るもの多く、氣候の寒暖も亦之に因りて影響すること多し。即ち夏時は亞細亞大陸の土地非常に熱せられ、空氣稀薄となりて、上昇するを以て、太平洋より此の地に向ひて吹く風を生ず。是れ、夏時に、東南風多き所以なり。又、冬時は亞細亞大陸非常に寒冷にして、空氣稠密と爲るを以て、此の地より、太平洋に向ひて吹く風を生ず。是れ、冬時には、西北風多き所以なり。

又、九月中旬前後に方りて、颶風起ること多し。此の風は、フィリッピン群島、若くは、臺灣近海より起りて、東北に進み、九州、四國を過ぎ、斜に、本州を通過して、遂に、北海道に及ぶを常とせり。

#### 第十四節 雨雪

我が國は、四周に海あるを以て、水蒸氣多く、隨ひて、雨雪も亦多し。殊に、夏時は、太平洋より、多量の水蒸氣を送り、冬時は、日本海より、水蒸

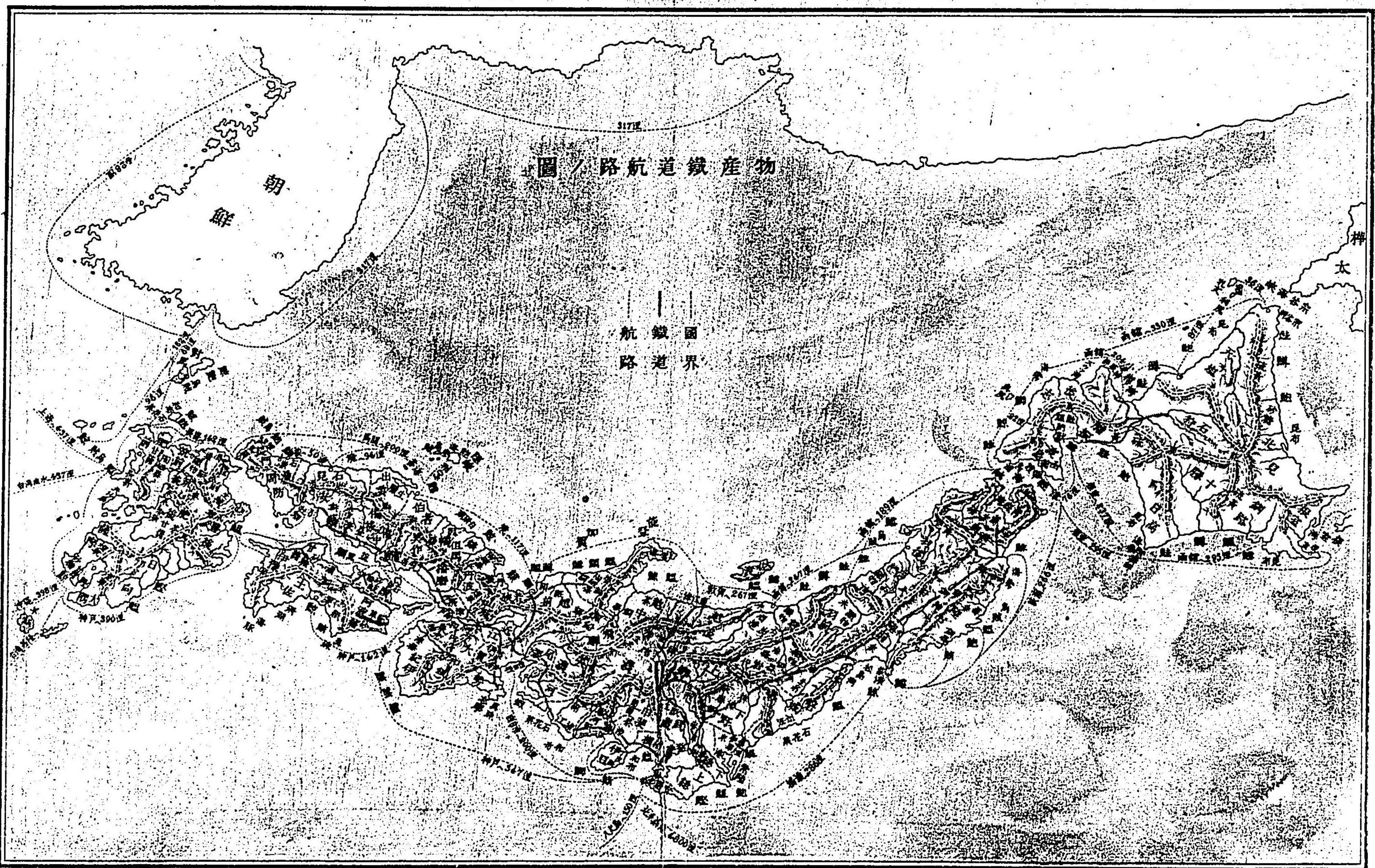
氣を送るを以て、夏時は、太平洋に面せる地方に雨多く、冬時は、日本海に向へる部分に雨雪多し。然れども、尙、其の土地の山脈、風向等によりて、多少の變化あり。

全國を通じて、雨量の多きは、六月梅雨の時季にして、九月頃には、暴雨多しとす。又、各地方の雨量を比較すれば、北陸地方は、最も多くして、二千六百耗、次ぎは、四國、及び、九州の東部にして、二千耗、乃至二千四百耗なり。而して、臺灣の西北部は、雨量甚た多く、二千三百耗、乃至三千耗に及ぶと云ふ。

之に反して、雨量少きは、山陽道、及び、四國の北岸地方にして、千四百耗より、千六百耗に過ぎず。更に少きは、東北地方、及び、北海道の東部にして、僅に、千二百耗、乃至八百耗とす。尙、委しくは、雨量圖につきて、研究すべし。

第十五節 海流

我が國の近海には、暖流と寒流との二海流あり。暖流は、臺灣の南より北東に進み、九州の南に於て、本支二流となる。本流は、九州、四國、及び本州の東南岸に沿ひて流れ、鹿島洋より陸地を離れて、東方に向へり。之を黒潮と云ふ。又、其の支流は、九州の西岸より、對馬海峽を過ぎて、日本海に入り、本州の西北岸を流る。之を對馬海流と云ふ。暖流の温度は、常に、周圍の海水より高きこと、概ね、四五度なり。又、寒流は、チコーツク海の北東隅より、堪察加半島の西を進み、千島列島を経て、蝦夷島の東南に至り、本州の東岸を南流して、鹿島洋に至り、黒潮と合して止む。之を親潮又は千島海流と云ふ。其の温度は、黒潮より低きこと、大約五度乃至八度とす。又、別に、一寒流あり、樺太島の東岸より、宗谷海峽を過ぎて、日本海に入る。之を樺大海流と云ふ。此の他、來滿海流は、亞細亞大陸に沿ひて、北より南に流れ、朝鮮海峽を過ぎ



て、東海に入る。

是等の海流中、我が國の温度に、最も影響を及すは、對馬海流と親潮との二流なり。對馬海流は、日本海沿岸地方の嚴寒を調和し、親潮は北海道の東部及び、本州東岸地方の暑氣を低減す。而して、黒潮の本流は、陸地の温度に影響を與ふること尠し。

### 第十六節 植物

日本群島は、熱帯に屬する臺灣より起りて、殆ど寒帯に近き千島列島に終るを以て、寒、暖、熱、三帶の植物を併有せり。且、土質肥沃にして、降雨多量なるを以て、植物の種類夥しく、名草奇木も亦鮮からず。臺灣、琉球及び、小笠原諸島に産する植物は、熱帯樹類にして、其の主たるものは、榕樹、羊齒、烏木、蘇鐵、竹、柏、樟樹、露兜樹、欖榔樹、椰子、檳榔樹、龍眼肉、芭蕉實、芒實等なり。





又海産類には、鯨、海豹、海獺、膾、豚獸等あり。魚介の類は、最も多くして、全國到る處に産せり。其の中、最も普通あるは、鯔、鱸、鯛、鯉、鯉、鮪、鮓、鮓、蛤、沙、蝦等にして、南方には、河豚、鳥介、鱧、海龜、珊瑚、眞珠貝、鱧の類多く、北方には、鱒、鮭、鯉、大口魚の類多し。又、河湖よりは、鯉、鮒、鰻の類を産す。此の他、鳥類には、鶯、鷹の類より、雁、鴨、鶯、鳶、鴉、雉、鳩、鶴の類あり。尙、小鳥の種類、甚だ多し。

### 第三章 地方各誌

#### 第一節 畿内

##### 第一 總説

(一)位置 廣袤人口 畿内は、本州の中央部に位して、東は、東海道の境に、北は、東山、山陰兩道に連り、西は山陽道に接し、大阪灣に臨み、南は、南海道の紀伊國に隣れり。東西の長さ處二十五里、南北三十五里、面

積、大約四百四十五方里にして、人口二百五十四万一千〇五十八人あり、即ち、一方里につき、五千七百〇三人の割合にして、其の稠密なること、各道に比して、第一とす。

(二)區劃 畿内五國を西市三十郡と爲し、之を二府二縣に分轄せり。

山城國 一市 京都府

大和國 十郡 添上、山邊、生駒、磯城、宇陀、高市、南葛城、奈良縣

河内國 三郡 南河内、中河内、北河内、大阪府

和泉國 二郡 泉北、泉南、大阪府

二市 大阪、兵庫縣  
神戸、

攝津國

河邊、武庫、  
七郡 東成、西成、三島、大阪府  
豐能、有馬、

(三)地勢 畿内の東南北は、概ね高地なり、殊に、大和の南部は、群山相重なりて、唯、十津川の近傍に平地あるのみ、然れども、和泉、河内、攝津の三國は、謂はゆる、畿内平原にして、大阪灣に臨める地と、淀川、大和川の灌域とを併せて、一大平原を爲せり。

(四)海岸 畿内は、三方皆、山脈相圍めるを以て、其の海岸、唯、西方に、大阪灣有るのみ、大阪灣は、一に茅渚、海と稱し、和泉、攝津の間に灣入りて、内に、神戸、兵庫、大阪堺の四港あり、兵庫港の西に、和田岬あり、之より西方の海岸は、白沙青松相映じて、須磨の勝地を成せり。

(五)山岳 畿内の山岳中、著名のものを擧ぐれば、鞍馬山、大悲山は、山城の北に峙ち、愛宕山(三三八〇)は、その西方、丹波の境に聳え、其の南

に、高雄山、嵐山あり。比叡山(二七二〇)は近江の境に跨り、鷲峰山、笠置山は國の東南部にあり。笠置山は、後醍醐天皇行宮の舊蹟にして、其の名殊に著る。

大和には、高山頗る多く、東部伊賀の境に、國見山(三五六〇)あり。高見山(四三二〇)大臺原山(五九〇〇)は、伊勢の境に峙てり。國の南部には、金峯山、大峯山(六二一〇)彌山(六七二〇)釋迦岳(六四〇〇)大日岳(六一七〇)等の諸山相連れり。金峰山は、又吉野山と稱せり。

河内には、大和の境に、金剛山(三九七〇)信貴山、生駒山等相連れり。金剛山の西麓には、楠氏の千早城の舊趾あり。又和泉の山岳は、紀伊の境にある藏王峠、葛城山、犬鳴山等名あり。

攝津には、北方丹波の境に、妙見山(三〇〇〇)箕面山等有り。西部には、武庫(三〇六〇)摩耶、鐵拐等の諸山相連れり。

(六)河流 畿内の河流は、概ね、大阪灣に注けり。即ち、淀河は、畿内第一

の大河にして、上流を宇治川と云ひ、近江の琵琶湖より發し、桂川、木津川を合せ、南流して攝津に至り、大阪灣に注ぐ。其の幅廣く水深きを以て、舟運の便利多し。

吉野川は、源を大臺原山より發し、西流して紀伊に至り、紀伊川と爲る。十津川は、吉野山より出で、南流して紀伊に入る。大和川は、大和の北部より發し、河内を経て、大阪灣に注ぐ。淀川に次ぎて、舟楫の便あり。

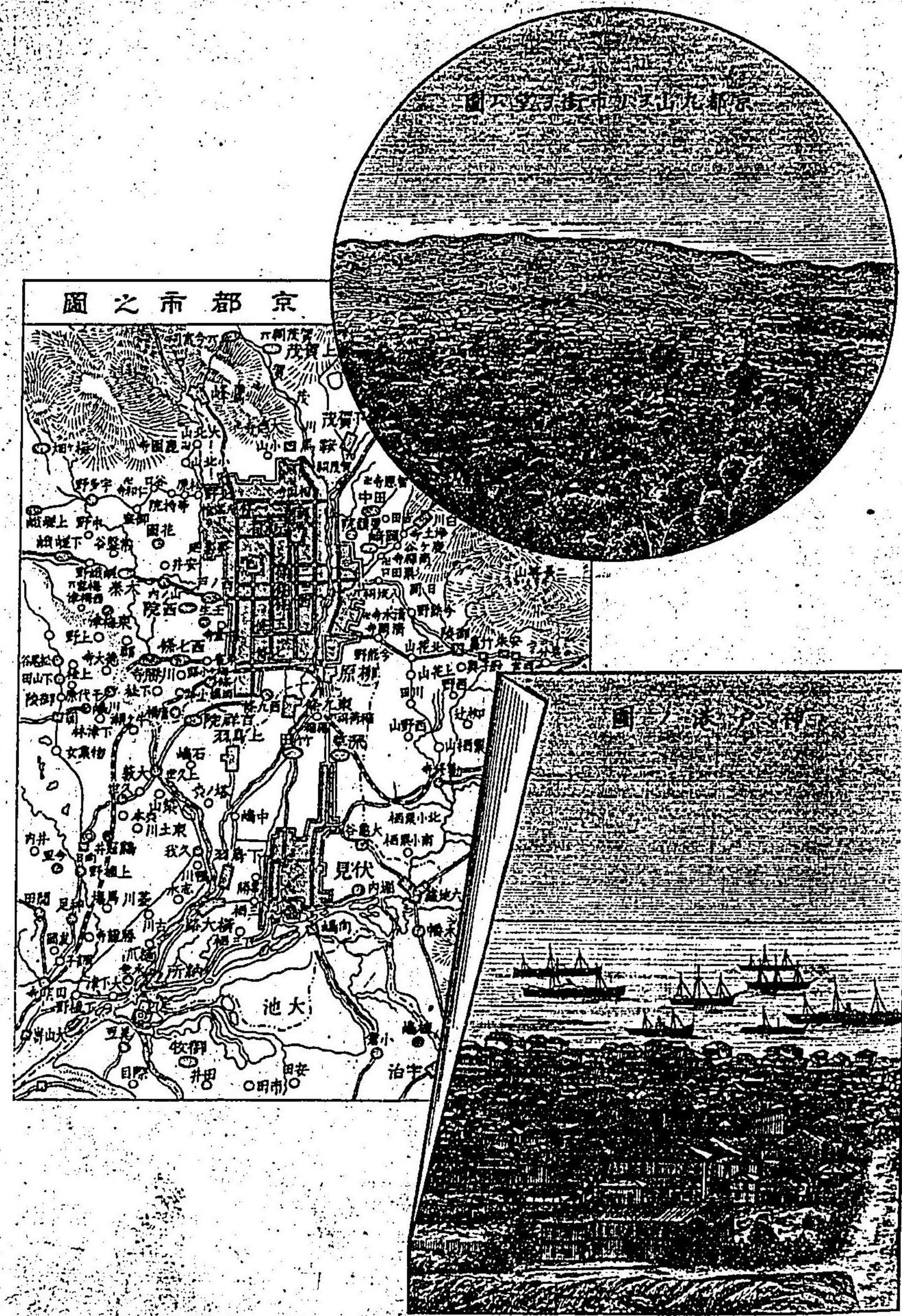
此の他、攝津の武庫川、池田川等、稍大あり。

(七)氣候 畿内の氣候は、概ね、温暖なれども、山地は、寒氣強くして、晴雨常なし。殊に、京都近傍は、冬時、叡山嵐の爲めに、寒氣を増し、又、夏時は、却て、冷風稀なり。大阪地方は、暑氣稍強けれども、寒氣は酷しからず。雨量は、瀬戸内海の寡雨地方に屬すれども、梅雨及び夏雨は、稍多量なり。

(八)物産 畿内の産物は、京都の西陣織、友禪染、刺繡物、清水焼、其の他の陶器、宇治の茶、大和の飛白、奈良晒、吉野紙、吉野葛、堺の鐵器及び段通、池田、伊丹の酒、神戸の摺附木、大阪の紡績絲、瓦斯織、細工物、硫酸等を最とす。其の他、米、麥は、攝津、河内に多く、木綿は、河内、和泉に産し、木材は、大和より出づるもの著名なり。

## 第二 處誌

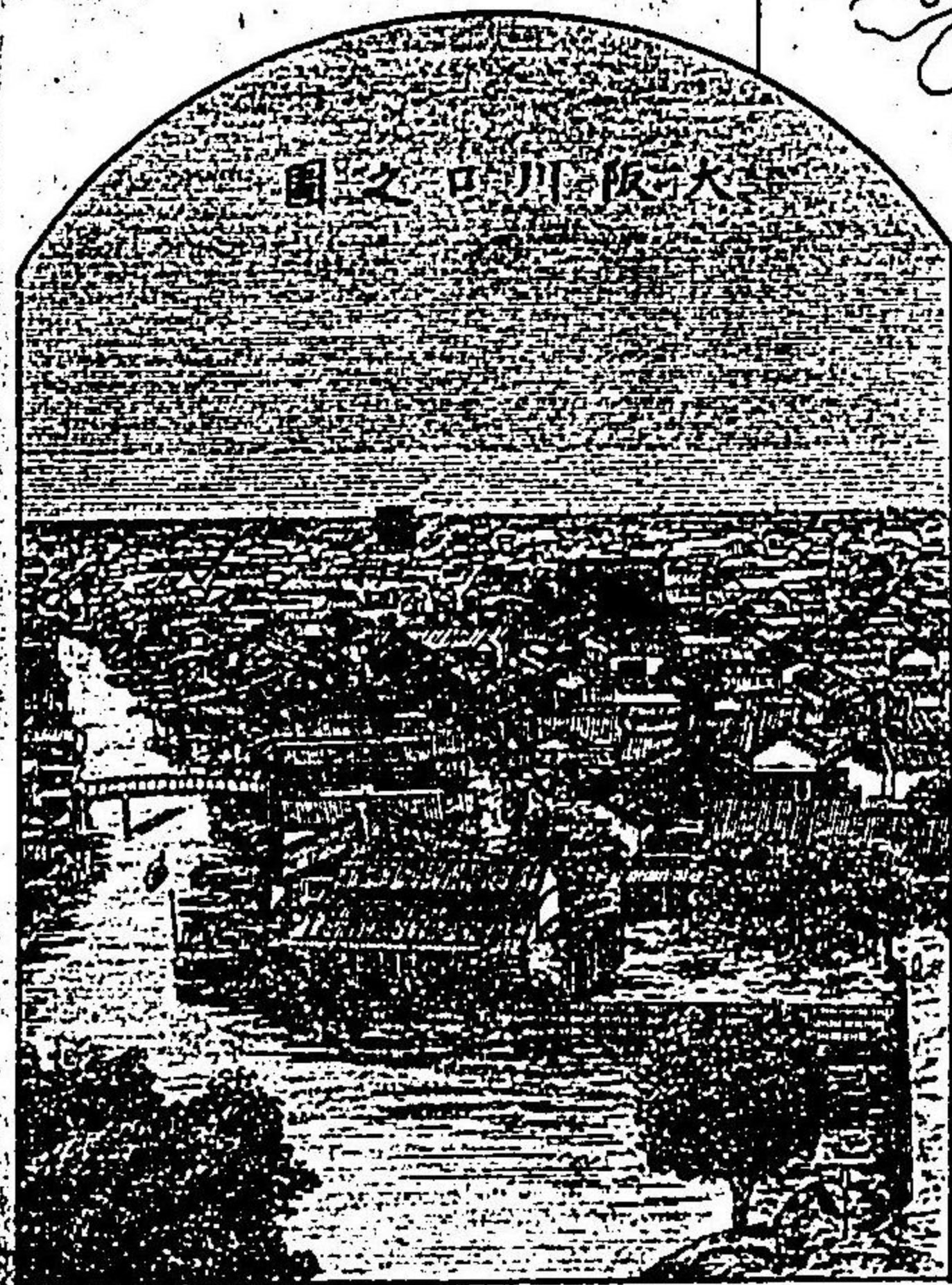
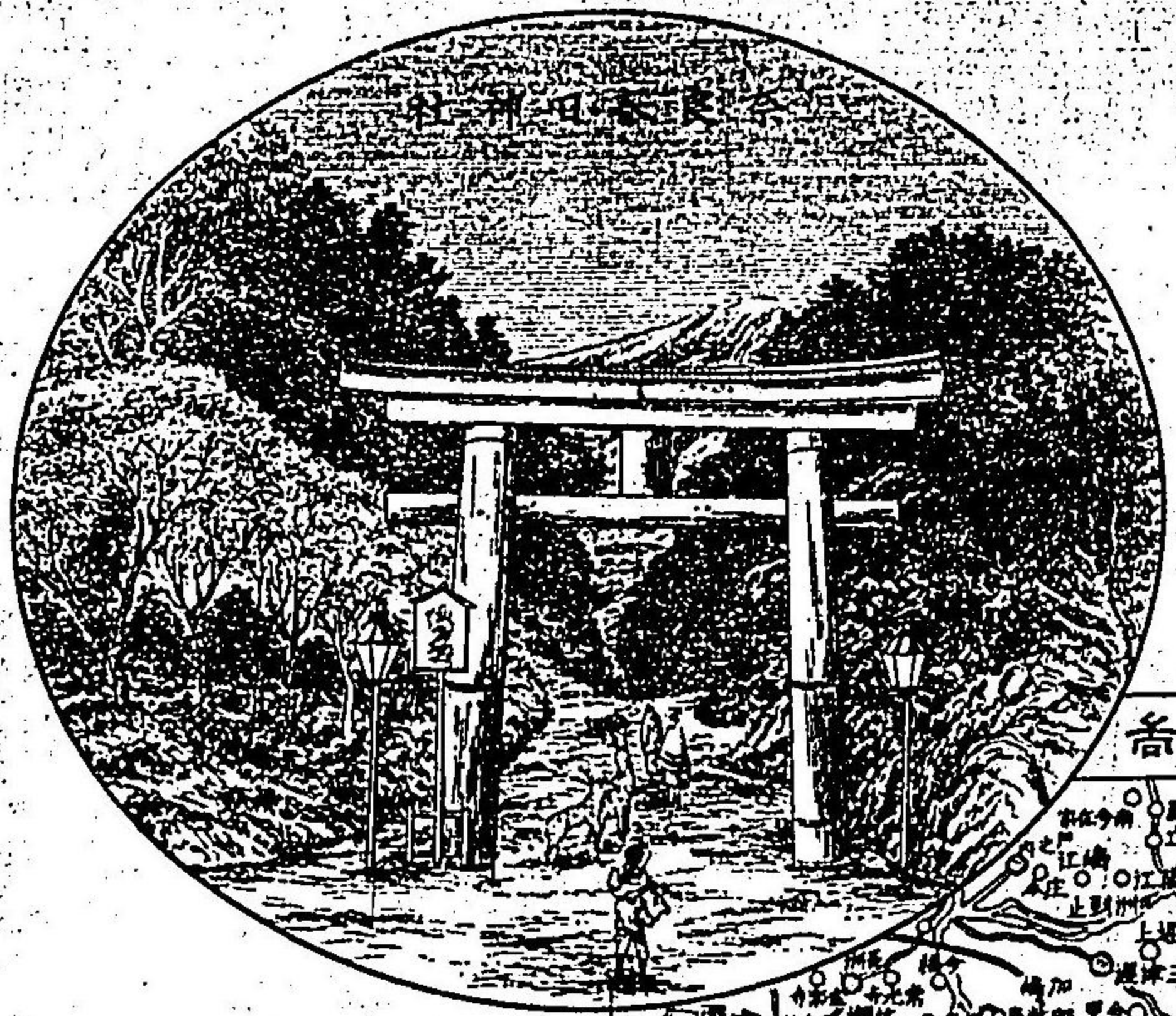
(一)京都市及び其の近傍 京都は、三府の一にして、平安城と稱し、山城の中央に位せり。其の南方一面の外は、皆、山を以て圍まる。市街は井然として、七條の大衢を通じ、加茂川、其の間を流れて、西を洛中と云ひ、東を洛外と云ふ。東西一里餘、南北殆ど二里、人口三十一万七千餘あり。京都府廳此處にありて、山城一國及び丹波の五郡を管轄す。第三高等學校も、亦、此處にあり。



此の地は、往昔桓武天皇より、明治元年に至るまで、一千七十六年間、  
帝都の在りし所なり。舊皇居は、市の北部にあり。二條の離宮は、西方  
にあり。山水秀麗にして、風致に富み、且、千餘年前の名祠巨剎等、依然  
として存するもの多く、雅客の勝を探り、舊を尋ねるもの、常に絶え  
ず。其の著名なるものは、金閣寺、銀閣寺、智恩院、清水寺、三十三間堂、東  
西本願寺、加茂、北野、平野の各神社、及び、嵐山の櫻花、高雄の紅葉等、枚  
舉に暇あらず。

交通は、頗る便利にして、陸には、汽車ありて、東京、大阪との線路に當  
り、水には、淀川の水運あり、且、近年、近江の琵琶湖より水道を疏して、  
運輸の便に供し、又、其の水力を利用して、諸工業の原動力とせり。  
京都の南二里餘にして、伏見、淀の名邑あり。伏見は、人口一万七千餘  
京阪及び奈良に通ずる要路に當りて、稍繁盛の地なり。之より西南  
に至れば、八幡、山崎の名邑あり。八幡は、男山神社のある所なり。

(二)大阪市及び其の近傍 大阪市は、三府の一にして、攝津國にあり。淀川の河口に跨りて、大阪灣に臨めり。東西一里、南北殆ど二里、人口四十八万八千餘、東京に次ける大都會なり。大阪府廳此の處にありて、河内、和泉の二國、及び、攝津の一市五郡を管轄す。市街を、東西南北の四區に分ち、溝渠を縱横に通じて、運送の便あり。又、川口には、諸國の船舶、常に輻湊し、鐵道は、東京と神戸とに通ずる外、堺、奈良等に達せり。此の如く、水陸の交通、極めて便利なるに、銀行會社等も悉く備りたれば、實に、關西に於ける商業の中樞なり。且、近年、諸種の工業、盛に興りて、其の製作品、甚た多し。市街の東に大阪城あり、舊と豊臣氏の建築せし名城なりしが、今は、唯、牙城存するのみ。第四師團を此の處に置けり。其の北に砲兵工廠、造幣局等あり。又、市街の南に天王寺、難波あり。天王寺に、四天王寺の巨剎あり。難波には、紡績會社、及び、其の他の工場あり。



大 阪 市 之 各 名 所

大阪の西に池田の名邑あり。精酒の醸造を以て著る。

堺市は和泉國に在り。大阪と鐵道を通じ、半時間にして達すべし。人口四万六千餘。往時は外國の互市場たりし所なり。鐵器及び段通等の織物を産し、商業の地たり。其の東西に岸和田の名邑あり。

(三)神戸市及び其の近傍 神戸市は五港の一にして、攝津國の西部に在り。大阪灣に臨む。人口十五万八千餘。兵庫縣廳を此の處に置き、播磨、但馬、淡路の三國及び丹波の二郡、攝津の一市二郡を管轄せり。港内水深く、内外の船舶常々輻湊し、我が國第二の互市場たり。兵庫は舊と神戸と別區なりしが、今は合して一市となれり。其の間に湊川あり。川の東に湊川神社ありて、楠公を祀れり。又兵庫に福原の舊趾あり。

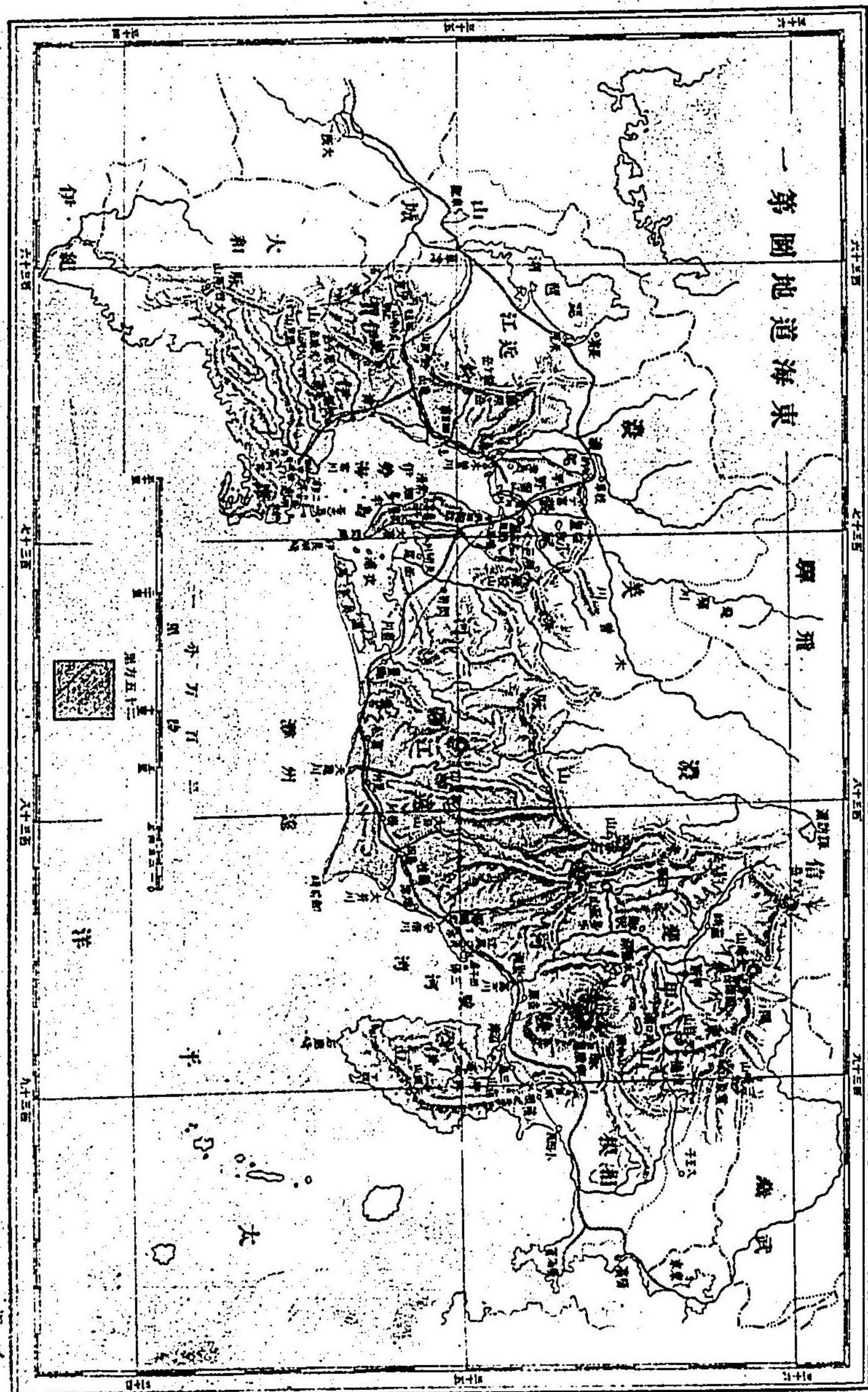
神戸市の東に生田、森の古戰場あり。又西宮、伊丹、尼ヶ崎の名邑あり。伊丹は釀酒を以て名あり。又神戸の西方二里許に、一ノ谷の古戰場



あり。北は、一帯、摩耶、武庫等の連山にして、布引瀑、有馬の温泉等、此の間にある。

(四)奈良町及び其の近傍 奈良町は大和の北部にあり。人口二万六千餘、奈良縣廳ありて、大和一圓を管轄す。此の地は、元明天皇より、桓武天皇に至るまで、七代、八十四年間、帝都たりしを以て、名所舊蹟、頗る多し。町の東に、春日神社、三笠山等あり。其の北の東大寺に、大佛を安置す。高さ五十餘尺あり。又、その側なる正倉院には、千餘年前の珍器異什を藏せり。

奈良町の西に、郡山あり。亦、名邑たり。大和の東部なる伊賀の境に、月ヶ瀬あり。梅花を以て名有り。又、國の中央なる吉野山は、南朝四十餘年間の舊跡にして、櫻花の名所なり。其の北方に、藤原鎌足を祀れる多武峰あり。多武峰の西方に、畝傍山あり。神武天皇の御陵、及び、橿原宮の舊跡を存す。法隆寺は、其の北方に當れり。又、四條畷は、河内にあ



り、四條噺神社のある所なり。

## 第二節 東海道

### 第一 總説

(一)位置廣袤人口 東海道は、本州の中央部に位して、太平洋に面する一帯の地なり。西は畿内及び紀伊國に接し、北は、東山道に界す。其の形は、東西に長く、南北に狭く、長さ百二十里、幅三十二里餘あり。面積二千六百六十三方里、人口九百五十萬七千八百四十六人あり。即ち、一方里に三千五百七十一人の割合にして、其の稠密なること、畿内に次ぐ。

(二)區劃 東海道十五國を、七市百〇八郡に分ち、一府八縣を置きて、之を管轄す。

伊賀國二郡阿山、名賀、……

伊勢國

一市津

桑名、員辨、三重、鈴鹿、河藝、安濃、一志、飯南、多氣、度會

三重縣

志摩國

一郡志摩

一市名古屋

尾張國

九郡

愛知、東春日井、西春日井、丹羽、葉栗、中島、海東、海西、知多

愛知縣

三河國

十郡 碧海、幡豆、額田、西加茂、東加茂、北設樂、南設樂、寶飯、渥美、八名

遠江國六郡 榛原、小笠、周智、磐田、濱名、引佐

駿河國

一市静岡

五郡 駿東、富士、庵原、安倍、志太

静岡縣

一市甲府

甲斐國

九郡

東山梨、西山梨、東八代、西八代、南巨摩、中巨摩、北巨摩、南都留、北都留

山梨縣

伊豆國

二郡 加茂、田方

三浦、鎌倉、高座、中、足柄上、足柄下、愛甲、津久井

静岡縣

相模國

八郡 三浦、鎌倉、高座、中、足柄上、足柄下、愛甲、津久井

神奈川縣

東京

東京府

二市 橫濱

武藏國

廿郡

橘樹、久良岐、都筑、西多摩、南多摩、北多摩、荏原、東多摩、北豐島、南足立、南葛飾、南埼玉、北埼玉、北足立、入間、比企、大里、兒玉、秩父、北葛飾

神奈川縣

東京府

埼玉縣

安房國一郡 安房

上總國五郡 市原、長生、山武、君津、夷隅

千葉縣



して、殆ど平野を見ず。

(四)海岸 本道中、伊賀、甲斐、二國の外は、悉く太平洋に臨めるを以て、その海岸線甚だ長く、良港に富めり。中にも、武藏の横濱は、五港の一にして、相摸の横須賀は、第一鎮守府の軍港なり。伊勢に四日市の良港あり。伊豆の下田、相摸の浦賀、駿河の清水も、亦良港なり。其の他、鳥羽、熱田、武豊、木更津、銚子等の諸港あり。

本道の沿海は、種々の名稱を以て、區別せられたり。即ち、常陸の沖を鹿島灘と云ひ、上總の海岸を九十九里濱と云ひ、安房の沿海は、房州沖と稱し、武藏の内海を東京灣と稱す。また、相摸に沿へるを相摸灘と稱し、伊豆に沿ひたるを豆州沖と稱し、豆南諸島、其の間に并立せり。その他、駿河の駿河灣、遠江の遠州灘、三河の袖浦あり。其の西は、即ち、伊勢海にして、灣入頗る大なり。

又岬は、常陸に、犬吠崎あり。上總に、大東崎あり。安房に、野島崎、富津岬

あり相摸に、観音崎、劔岬あり。観音崎には、數個の砲臺を設け、富津と相對して、東京灣の口を扼す。その他伊豆の石廊崎、遠江の御前岬、三河の伊良湖崎、尾張の師崎、志摩の安乘崎、大王崎等あり。

(五)山岳 本道には、種々の山脈ありて相連れり。即ち、西部、畿内の境にあるを、鈴鹿山脈と云ひ、美濃、近江の境より來りて、鈴鹿山(一、二、三)○靈山(三、二、三、四)大臺、原山(五、九、〇)等の名山あり。又、中部、三河、遠江等より、信濃に連るものを、赤石山脈と稱し、鳳來寺山、秋葉山(五、四、〇)○黒法師山(七、〇、九、〇)大無間山(九、三、四、〇)等、最も著はる。次に、武藏の西部より、相摸、甲斐の兩國に蟠延せるは、關東山脈にして、武甲山(四、三、二、三)雲取山(六、六、六、九)天目山(三、五、〇)○金峯山(八、四、二、〇)等あり。又、南方の豆南諸島より來り、伊豆、駿河を経て、信濃に入るものは、富士帶火山脈なり。富士山(一、二、四、六、七)は、皆に此の脈の主峯なるのみならず、實に、本邦第一の高山にして、四時、概ね、白雪を戴き、其の形、倒扇

の如く、遠望頗る雄大にして、十三州より望むことを得ると云ふ。愛鷹山、箱根山、天城山等も、亦、此の山脈中に著名なり。此の他、常陸にあるは、阿武隈山脈にして、其中、筑波山(二、八、九、七)最も著はる。又、房總には、鹿野山、清澄山等名あり。

(六)河流 河流の大なるものは、利根川、天龍川、大井川、富士川、木曾川等なり。之を本道の五大河と云ふ。利根川(七、三)は、我が國三大河の一にして、阪東太郎の稱あり。その源を、上野の文珠山に發し、下總に至り、分れて二派となる。其の本流は、鬼怒川を合せて、霞浦を通じ、舟楫の便、頗る宜しく、下流には、流船常に往來せり。又、支流は、武藏、下總の間を流れて、東京灣に入る。江戸川と稱するものは、是なり。天龍川(五、六)は、其の源を、信濃の諏訪湖より發し、遠江を過ぎて、二派に分れ、遂に、遠州灘に入る。此の河に架する鐵橋は、本道第一の長橋にして、長さ八百餘間あり。大井川(四、六)は、其の源を、白根山に發して、駿河灣に注

ぐ、運輸の便なく、却て、水害を蒙ることあり。富士川(三二)は、甲斐の釜無笛吹、蘆川の合したるものにして、駿河を貫流し、田子の浦に入る。我が國三急流の一あり。木曾川(四六)は、信濃の木曾山中より發し、美濃平原を潤して、伊勢の海に注けり。

其の他、伊賀に、名張川あり、伊勢に、雲出川あり、三河に、矢矧川(二八)太平川、豊川あり、駿河に、安倍川(二〇)あり、相模に、馬入川、酒匂川あり、武蔵に、荒川(四五)多摩川あり、荒川の下流は、墨田川にして、東京の市街を貫流せり、又、常陸に、那珂川、久慈川等あり。

常陸の霞浦は、本邦第二の大湖(周圍三十五里)にして、涼船常に往來せり、之に次ぐは、北浦(一五)にして、霞浦の北にあり、次ぎは、下總の印幡沼(一二)とす、其の他、手賀沼、沼沼、及び、富士八湖と稱する火山湖あり、八湖は、蘆湖、川口湖、山中湖、精進湖、本栖湖、富士沼、西湖、及び、四尾連湖、即ち、是れあり。

(七)氣候 本道は、土地狹長なるを以て、各地の氣候一樣ならずと雖、南方は、概ね温暖あり、濱松、沼津、銚子等は、東京近傍に比して、一年の平均温度の高きこと二度なり、津市、名古屋市等の温度は、その中間にあり。

風向は、夏期に東南風多く、冬季に西北風強し、又、隨て、夏期は濕潤にして、冬季は乾燥なり。

雨量は、他道に比較すれば、稍多しと雖、北部は少く、南部は多し、殊に、甲斐近傍は、少量あり、又、一年の中、一月より三月までと、十一月より十二月までとの間は、一般に降雨寡し。

(八)物産 本道は、氣候温暖にして、雨量適度あるが故に、平地には、穀物能く成熟せり、即ち、尾張、武蔵、相模、上總、下總、常陸、及び、伊勢は、米の産地にして、麥は、武蔵、尾張、下總に多し、粟は、神奈川縣に多く、甘藷は、千葉、及び、川越近傍に多し、大豆は、平原地方一般に栽培せられ、玉蜀





の数は、十萬餘ありて、一年の産額、凡、百四五十萬圓あり、其の多きこと、本邦第一とす、之に次ぐは、三重、神奈川、静岡、愛知の諸縣あり、その他、伊豆、駿河の鱈、伊勢の鰻、尾張、三河の海參、駿河の鯛、東京の海苔、伊勢、志摩の石花菜等、産額甚た多し。

礦物中、金は、甲斐、駿河、伊豆に、少量を出し、石炭は、常陸に産し、石油は、遠江より少量を出す、又、石材は、甲斐の水晶、天畑硯、伊豆の伊豆石、相模の小松石、常陸の寒水石、三河の御影石、名倉砥等あり。材木は、伊豆の天城山に産するものを以て、本道第一とし、之に次ぐを、駿河、遠江となす、薪と炭とは、伊豆と下総とより多く出せり。

## 第二 處誌

(一) 東京市及び其の近傍 東京市は、我が帝國の首府あり、武藏國の南部に在りて、東京灣の西北岸に臨み、關東平原の中央に位せり、東

京府廳、此所にありて、武藏の一市五郡と、小笠原諸島、伊豆諸島を管轄せり。

市街は、東西三里、南北四里餘、人口百二十四万二千餘あり、全市を分ちて、麴町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤坂、四ッ谷、牛込、小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川の十五區となす。市街は、頗る繁盛にして、大衢には、鐵道馬車あり、其の他も、亦、車馬の往來日夜絶えず、行人常に絡繹す。此の中、京橋、日本橋は、商業最も繁盛にして、京橋の銀座通は、總て、練瓦石の建築なり。日本橋は、各地方に達する里程の中心に當りて、商家軒を駢べ、市店櫛比せり。

宮城は、市の中央にありて、廻らすに溝渠を以てし、諸官省、國會議事堂等、概ね、その周邊にあり、其の他、大學校、高等學校、各種専門學校、兵營病院、銀行、會社、製造場、神社、佛閣、公園、博物館等、所々に散在す。又、電信、電話あり、電燈、瓦斯燈は、街路を照らして、夜間の往來に便せり。瀛

車鐵道ハ、東京を中心として、各地方に發するもの多し。中山道鐵道ハ、上野より發し、碓氷峠を超て、直江津に連り、奥羽鐵道は、中山道の大宮驛より、青森に通じ、甲武鐵道は、飯田町より、八王子に達し、東海道鐵道は、新橋より、神戸に通じ、武總鐵道は、本所より、下總佐倉に達せり。故に、交通最も便利にして、四方より出入する人、及び、貨物の運搬、極めて多し。實に、開明の景象を現はせるものと謂ふ可し。

東京は、舊と江戸と稱し、二百七十年間、徳川氏の覇府を構えたる所あるを以て、百貨、次第に此の地に會して、自ら、商業の中心たりしなり。明治元年、乘輿を此所に遷し給ひて、東京と改められしより以來、益、繁盛を極むるに至れり。

市内の遊覽所は、九段阪、上野、淺草、芝、愛宕、深川等の公園、及び、隅田川、龜井戸等なり。九段阪公園には、靖國神社を祭り、上野公園には、東照宮を祀る。淺草公園に、觀世音、芝公園に、増上寺、深川公園に、八幡宮あ

り、何れも、著名の神社佛閣たり、隅田川には、大橋、吾妻橋、厩橋、兩國橋、新大橋、永代橋の六大橋を架け、その上流の東岸には、櫻花頗る多し。所謂向島、是なり。龜井戸は、天滿天神を祀り、其の臥龍梅の名高し。又、市外には、王子、小金井の櫻花、皆人の遊覽する所なり。

東京の西南に、品川驛あり、東北に、千住驛あり、又、八王子は、西にありて、人口、二万三千餘、甲州街道に當りて、商業頗る盛なり。

(二)浦和町及び其の近傍 浦和町は、埼玉縣廳の所在地にして、武蔵の九郡を管轄す。

浦和の北に、大宮、熊谷等の諸驛あり、大宮は、奥羽、中山道、兩鐵道の分歧する所あり、其の西に川越あり、人口、二万餘、織物を産出す、熊谷には、熊谷直實の舊蹟あり。

(三)千葉町及び其の近傍 千葉町は、下總の南隅にありて、東京灣の東岸に臨めり、千葉縣廳此所にありて、安房、上總の二國と、下總の六

郡を管轄す、人口、二万五千餘あり。

千葉町の東北に、佐倉町あり、第一師團の第二旅團を置きり、我が國地理學の鼻祖ある伊能忠敬は、此の地の人なり、佐倉の東に成田あり、不動尊を以て著はる、又、下總の東端に銚子港あり、人口、一万六千、利根川口に臨みて、船舶輻湊せり、其の他、下總には、行徳、古河、結城、佐原等の諸邑あり。

安房の北條、館山、上總の木更津は、又、國の名邑にして、館山には、軍艦常に淀泊せり。

(四)水戸市及び其の近傍 水戸市は、常陸の中央にありて、人口、二万九千餘、茨城縣廳ありて、常陸一國、及び、下總の三郡を管轄す、市街は、那珂川の南にありて、那珂港に近く、運輸の便あり、此の地は、徳川氏の舊城地にして、弘道館、借樂園等、尙存せり。

(五)横濱市及び其の近傍 横濱市は、東京を西南に距ること八里許、



東京灣の西岸に位し、我が國五港の一にして、第一の互市場なり。本  
 牧岬、その東南を擁して、港内水深く、内外の船艦、常に輻湊せり。人口、  
 十五万餘あり、市街清潔にして、外人の居留するもの多く、貿易最も  
 繁盛あり。神奈川縣廳此所にありて、相模一國及び武蔵の一市六郡  
 を支配せり。

横濱の南、相模の三浦半島に、横須賀あり、海軍鎮守府のある所にし  
 て、造船所あり、港内水深くして、船艦の碇泊、最も安全あり。その南に、  
 浦賀の良港あり、米艦の始めて寄港せし處あり。横須賀の西北に、鎌  
 倉あり、昔、源頼朝、覇府を置きし所にして、鶴岡八幡宮、建長寺、長谷の  
 大佛等、最も著る。其の西に江ノ島あり、遙に豆駿の諸山を臨みて、風  
 光頗る佳麗なり。

小田原は、相模第一の都會にして、人口、一万四千餘あり。昔、北條氏の  
 割據せし地にて、今、尚、早雲寺を存す。小田原の東に、大磯の海水浴場

あり。その西には箱根の温泉あり、浴客常に多し。山頂に蘆湖あり、水清冽にして掬すべく、風光佳麗あり。湖畔に離宮を設けらる。其の南に箱根峠あり、昔は海道第一の難所なりと云ふ。

(六)甲府市及び其の近傍 甲府市は甲斐の中央にある都會にして、山梨縣廳あり、甲斐一國を管轄す。人口三萬四千あり。市街端正にして、生絲織物及び葡萄酒の醸造盛なり。國內山多く、地勢東西に分る。その東部を郡内と云ふ、海氣織の産地あり。

甲府の東に勝沼あり、葡萄酒の産地たり。馬入川の上流桂川に、猿橋と稱する奇工の橋あり。又國の西南なる身延山に、久遠寺あり、法華宗の巨刹なり。

(七)静岡市及び其の近傍 静岡は舊と駿府、又府中と稱し、徳川家康の退隱せし地なり。此の地は東京と名古屋との中間に位して、東海道の要地を占む。人口三萬七千餘、静岡縣廳此所にありて、駿河、遠江、

伊豆の三國を管轄せり。

岡の南海に濱して、久能山あり、徳川家康の廟を存せり。其の東の清水港に、甲斐の産物を輸出する所にして、東京、横濱と、汽船相通ず。港の東南に、三保崎あり、遠く海中に斗出して、翠松その上に繁茂し、山水頗る明媚なり。三保の松原と稱するは、即ち是なり。又、港の北に、清見瀉にして、東方、田子浦と共に、名勝の地たり。静岡の東に方りて、其の國境に近き所に、沼津あり、繁華の都會たり。

濱松は、遠江第一の都會にして、海道の要路に當り、人口、一万六千あり。その西の濱名灣は、小汽船來往し、風景稍佳なり。濱松の東方、天龍川の口に、掛塚港あり。

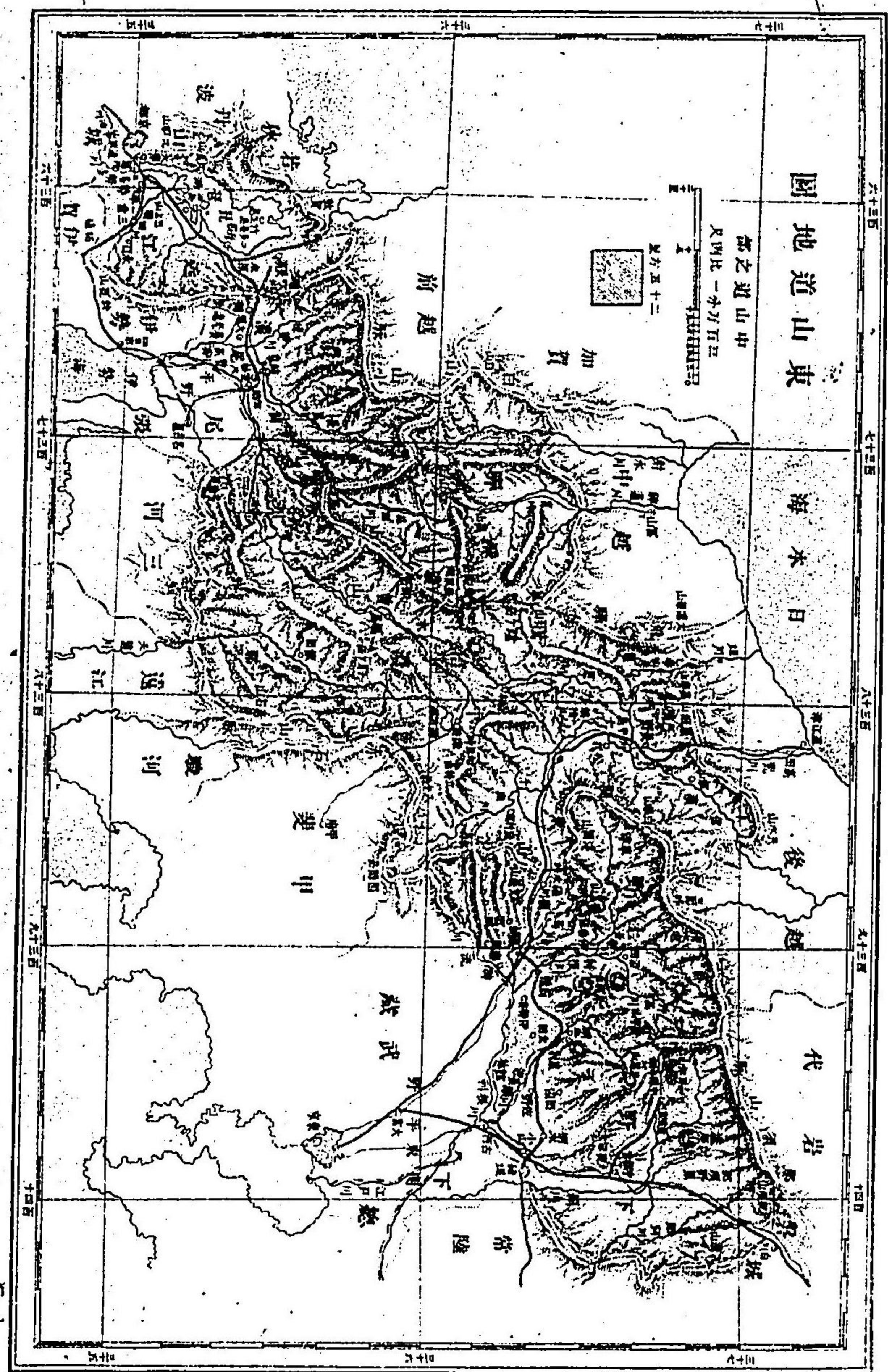
又、伊豆の東海岸には、熱海の温泉あり、氣候温和に、風光秀絶にして、浴客常に多し。下田は、伊豆半島の南端にありて、遠州灘を通過する船舶の碇泊場なり。その他、韭山、修禪寺等の諸邑あり。

(八)名古屋市及び其の近傍 名古屋市は、尾張の中央に位して、木曾川の灌域にあり、三府に亞ける大都會にして、人口、二十萬六千餘、愛知縣廳ありて、尾張、三河の二國を管轄す。

此の地は、東海道の要衝に當りて、鐵道、南北に通じ、支線は、知多半島に至り、關西鐵道は、伊勢に通せり。又、水路には、熱田、半田、武豐の諸港を控ゆるを以て、水陸共に、運輸の便を供へ、市街繁華にして、商業盛なり。

名古屋城は、市の北に在り、徳川氏の舊城にして、慶長十五年、徳川義直の建築に係り、その天守閣上に、金の鯨を置く、故に、金城の名あり。今は、第三師團を置けり。

名古屋の東北に、瀬戸村あり、陶器の製造を以て名あり。又、名古屋と市街を接して、熱田あり、人口、二萬餘、伊勢に渡る要津にして、汽船常に出入せり。町の東に、熱田神社あり、草薙の寶劍を祀る。



熱田以南の地は、即ち、知多半島にして、東岸に、半田、武豊の兩港あり。西岸には、陶器を産する常滑あり、熱田の東數里に、鳴海、有松あり、海道の通路にして、染物を産す。有松の南に、桶狭間の古戰場あり。三河の岡崎へ、人口、一万七千餘、徳川氏創業の地なり。その東に、豊橋あり、舊と吉田と云ふ、人口、一万五千、第三師團の第二旅團を置けり。〔九〕津市及び其の近傍、津市は、伊勢の中央に當れる海岸にありて、市街繁昌なり、人口三萬餘、三重縣廳ありて、伊賀、伊勢、志摩の三國及び、紀伊の二郡を管轄す。此の地は、藤堂氏の舊城地にして、東に、贊岐港あり、伊勢海を交通する汽船の碇泊所なり。津市の北、八里許にして、四日市港あり、相模の横須賀、尾張の熱田と、汽船相往來し、五港に次ける良港なり、人口、二萬餘あり、其の北に、桑名港あり、熱田に渡る要津なり。津の南に、松阪町あり、人口、一萬三千餘あり、其の南に、宇治、山田の兩

町あり、今は合して、宇治山田町といふ。人口二萬八千あり。宇治には、内宮ありて、天照大神を祭り、山田には、外宮ありて、豊受大神を祀る。全國各地より、兩宮に賽するもの、頗る多く、市街殷富あり。市街の東一里許に、二見浦の勝地あり。山田の東南に、鳥羽港あり。此の港は、志摩の北端にして、港内水深く、答志島、菅島等、その前に横はり、風濤を防ぐに宜しく、碇泊に便なり。又、津市を西に距ること、十二里にして、伊賀に上野町あり。人口、一萬四千、國中の都會たり。

### 第三 東山道

#### 第一 總説

(一)位置廣袤人口 東山道は、本州の北部より、中央部に連れる、一帯の地方にして、中山道及び、奥羽の二部に大別す。中山道は、本道の南



半部、即ち東海北陸兩道の間に介在し、其の西部は畿内に接して、近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、六國を含み、奥羽は、本道の北半部、即ち太平洋と日本海との間に延長せる部分にして、北端は津輕海峽を隔て、蝦夷島と相對し、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の七國より成れり、而して、中山道の面積は、二千六百〇三方里にして、奥羽の面積は、四千二百四十七方里あり、故に、本道の總面積は、六千八百五十方里ありて、殆ど、全國の四分の一を占む、東西の長さ所、二百八十餘里、南北廣き處、五十三里、人口、八百八十一萬五千三百六十八あり、即ち、一方里の住民、僅に、千二百八十六人にして、北海道を除きては、人煙最も稀少なる地方なり。

(二)區劃、本道十三國を、八市百四十六郡に分ちて、之を管轄するに、十一縣を置けり。

近江十二郡

滋賀、栗太、野洲、甲賀、蒲生、神崎、愛知、犬上、

滋賀縣

阪田、東淺井、伊香、高嶋、

一 市 岐阜

美濃國

廿二郡

厚見、各務、方縣、羽栗、中島、海西、下石津、多藝、上石津、不破、安八、大野、池田、本巢、席田、山縣、岐阜縣、武儀、郡上、加茂、可兒、土岐、惠那、

飛驒國三郡

大野、益田、吉城、

信濃國十六郡

南佐久、北佐久、小縣、諏訪、上伊那、西筑摩、東筑摩、下伊那、南安曇、北安曇、更級、埴科、上高井、下高井、上水内、下水内、

一 市 前橋

上野國

十一郡

勢多、群馬、多野、北甘樂、碓氷、吾妻、利根、山田、群馬縣、新田、邑樂、佐波、

下野國八郡

河内、上都賀、芳賀、下都賀、鹽谷、那須、安蘇、

栃木縣

足利

磐城國十郡

東白川、西白川、石川、田村、石城、雙葉、相馬、伊具、亘理、刈田、宮城縣

岩代國十郡

信夫、伊達、安積、安達、岩瀨、南會津、北會津、耶摩、河沼、大沼、福島縣

市仙臺

陸前國

十四郡

紫田、名取、宮城、黒川、加美、志田、玉造、遠田、粟原、登米、桃生、牡鹿、本吉、氣仙、宮城縣

市盛岡

陸中國

十二郡

岩手、紫波、稗貫、和賀、膽澤、江刺、西磐井、東磐井、上閉伊、下閉伊、九戸、鹿角、岩手縣

陸奥國

九郡

市弘前、東津輕、西津輕、中津輕、北津輕、南津輕、上北、下北、三戸、二戸、岩手縣

市山形、米澤

羽前國

十郡

南村山、東村山、西村山、北村山、最上、東田川、西田川、西置玉、東置玉、南置玉、山形縣

市秋田

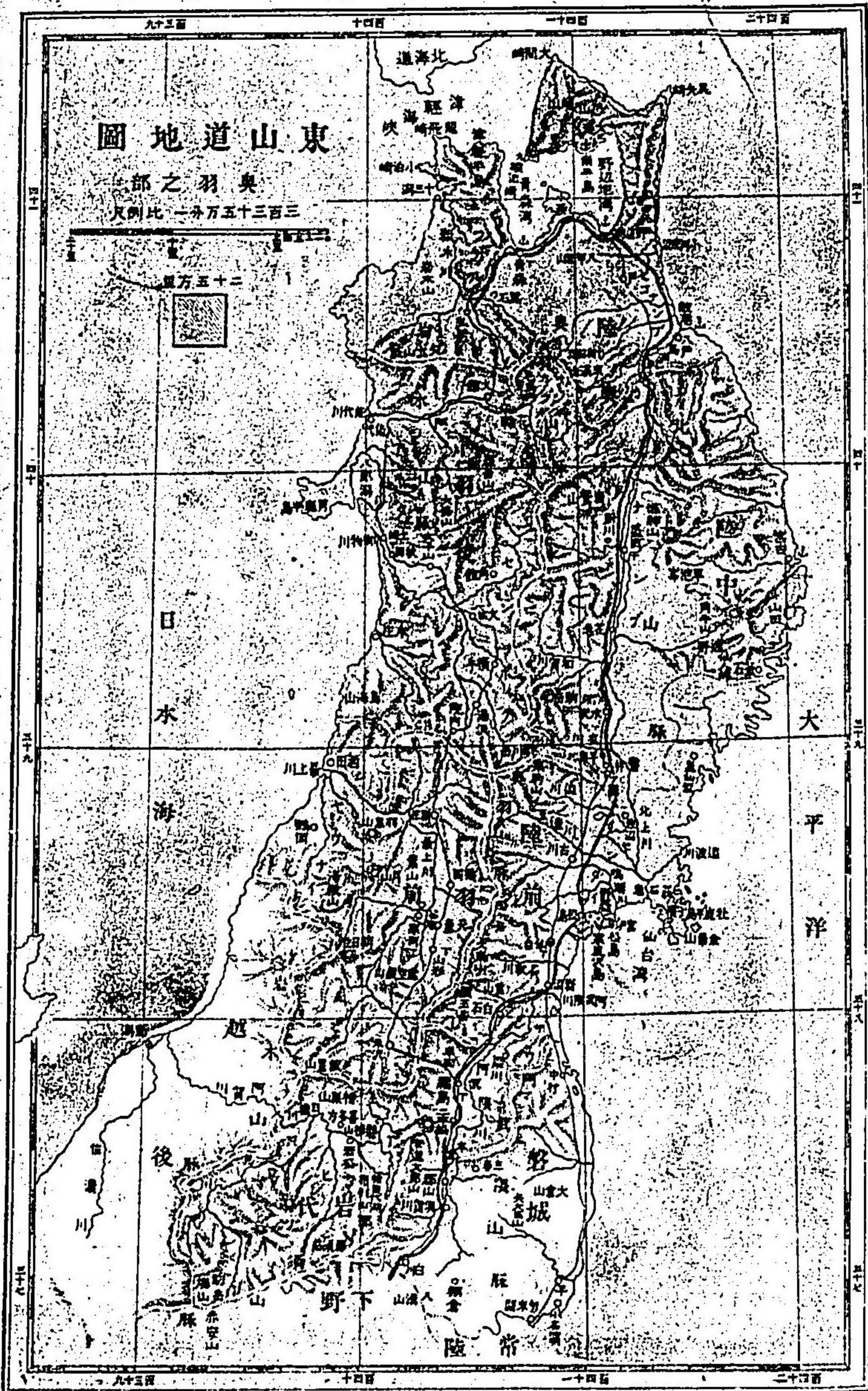
羽後國

九郡

南秋田、北秋田、山本、河邊、由利、仙北、平鹿、雄勝、飽海、秋田縣

(三)地勢

本道は、諸道中、最も高峻なる地にして、其の中、中山道の信



濃は、諸山脈相集合し、本道第一の高地とす。之に次ぐは、飛驒の國なり。奥羽の中部も、亦高峻なれども、中山道に比せれば、較低し。而して、低地も、亦所々に在りて、奥羽の庄内平地、山形平地、米澤平地、會津平地、盛岡平地、仙臺平地、中山道の兩野、美濃近江の平地等あり。兩野の平地は、東海道に續きて、謂ゆる、關東平原をなせり。

(四)山岳、本道の北部には、阿武隈北上の二山脈、及び、奥羽、那須、岩木の三火山脈あり。何れも南に進みて、信濃に亘れり。

阿武隈山脈は、阿武隈川の口より、關東平原に至る間の山脈なり。此の脈中の火山は、磐城、磐代の間に、靈山あり。磐城に、笠木山、赤井嶽等あり。北上山脈は、陸奥の東方より、松島灣に至りて、早池峯六、二七〇、仙人峠二、九三〇、及び、六角牛山四、三五〇等の高山。此の脈中に在り。奥羽火山脈は、斗南半島の恐山より起り、奥羽の中央を南走して、岩代に至り、那須火山脈となり、更に、西南に進みて、淺間山に連る。此の

脈中、重なる山岳は、陸奥の八甲田山(六、一一〇)十和田山、羽後陸中の境なる森吉山、陸中の七時雨山、岩手山(六、八〇〇)駒岳、陸前の藏王岳、磐城の刈田岳、岩代の磐梯山(六、〇七二)吾妻山(六、三八〇)安達太郎山、下野の那須岳(六、三一〇)男體山(八、二二〇)白根山、上野の赤城、榛名、妙義山等あり。岩木火山脈は、岩木山(五、一六〇)に起り、奥羽の西部に添ひ、南に走りて、羽後の森吉山の鳥海山(六、八八五)羽前の月山(六、七八〇)となり、北陸道に入りて、飯豊山、御神樂山を起し、上野の境に白根山あり、其の末は淺間山に會す。

飛驒、信濃地方の山脈は、諸方より會集して、地形頗る錯雜せり。今、その中に就て、重なる者を述べんに、北の方、越後、越中、の間より來りて、信濃の西境より、飛驒、美濃地方に連亘する者を、飛驒山脈といふ。鍾岳(九、五〇〇)有明山(八、〇七〇)鎗岳(一一、七〇〇)穗高山(一一、六〇〇)等の高山あり。飛驒山脈の南方に連りて、飛驒、信濃の境に亘れる者を、

御岳火山脈となす御岳山(一〇八〇〇)乗鞍岳(一〇〇四五)硫黄岳(六七七六)等の高峯連立せり。御岳火山脈の東に木曾川を隔て、相對するを木曾山脈となす。穗那山(七九二〇)駒岳(七八二〇)等は、其の中の高峰なり。木曾山脈の東に天龍川を隔て、相對するは赤石山脈にして、南方遠江より來り、此の脈中、赤石山(一〇二一〇)を最高とす。南の方、甲斐より來りて、信濃の中央に連れるものは、富士帶の大火山脈にして、白根山(七〇七〇)八岳(九六六九)立科山(八五四七)高妻山(七九八六)等の高峯群時せり。此の脈は、本邦諸火山脈の結節に當りて、その勢頗る猛烈なり。右の外、尙美濃、飛驒の西境より、近江、美濃界に亘れる寶達山脈あり。荒島岳、伊吹山等、其の中に名高し。

(五)河流及び湖水 中山道は、沿海なきを以て、その河流は、南北に流れて、他道に入り、又、奥羽は、山脈中央に横ゆるが故に、その河流は、東西に分れて、海に注けり。今、其の重なるものを擧ぐれば、長良川は、

源を美濃の北境に發し、南流して木曾川に合す。鮎を産すること多し。夏夜の鵜飼は、此の地の一奇觀なり。楫斐川の源を美濃の西北境より發し、尾張に至りて、木曾川に注ぐ。灌溉に宜しく、且運輸の便あり。木曾川は、源を小木曾村に發し、駒岳と御岳との間を流れ、飛驒より來れる飛驒川及び以上の二川を合せ、南に流れて、伊勢海に入る。其の下流は、舟楫の利あれども、又、時に氾濫の害を免れず。千曲川の源は、信濃の東南隅にあり、北流して、川中島に至り、犀川を合せて、東北に進み、越後に入る。即ち、信濃川の長流なり。又、岩代の諸水は、阿賀川となりて、越後に入り、下野の諸川は、鬼怒川となり、其の下流を利根川に合せり。

奥羽には、北上、阿武隈、最上、御代、能代の五大川あり。北上川(七九)は、陸中の北上山脈に沿ひて、南に流れ、仙臺灣に注ぎ、阿武隈川(七〇)は、阿武隈山脈の西側に沿ひ、岩代の一部を横ぎりて、荒濱に入る。最上川

の源、岩代の境より發して、米澤及び山形近傍の諸川を集め、西流して、酒田港に注ぐ。御物川は、秋田を過ぎて海に入り、能代川は、能代港より海に入る。その他、陸奥に、岩木川、八戸川あり。

近江の琵琶湖は、我が國第一の大湖にして、周圍七十三里餘あり。風光明媚にして、湖邊に、三井寺、石山寺、瀨田、唐崎、堅田、粟津、矢橋、比良山の勝景あり。近江八景と稱す。此の他、岩代の猪苗代湖(一六)羽後の八郎湯(一五)陸奥の十和田湖(一五)信濃の諏訪湖、下野の中禪寺湖等、著名なり。

(六)氣候 本道は、他道に比して、一般に寒冷なれ共、亦、所によりて、多少の差異あり。近江、美濃、上野、下野の低地は、大率、温暖にして、岐阜は、最も暖く、平均温度十四度三あり。宇都宮は、之より低くして、平均十二度なり。飛騨、信濃は、土地高きを以て、寒氣甚しく、長野の平均温度は、十一度にして、岐阜に比すれば、凡そ三度の差あり。

奥羽は、一般に寒く、其の東岸は、殊に甚し。西岸は、對馬海流の爲めに、稍、溫和なり。今、各地の温度を見るに、福島は、平均十一度九分にして、青森は、平均九度一分あり。又、中央の西部ある秋田は、十度三分、山形は、十度八分、東部なる宮古は、九度九分、石巻は、十一度三分なり。雨量は、一般に少し。殊に、信濃近傍は、最も少く、其の中稍、多量なるは、岐阜、滋賀、秋田等あり。而して、太平洋の岸は、日本海岸よりも少量なり。

(七)物産 本道の物産中、米は、近江、美濃、信濃、下野の平地に多し。奥羽は、土地瘠せ、水利不便にして、未だ開墾せざる處あれども、亦、米作盛に行はれ、其の中、最も産額の多きは、陸前、兩羽を推し、磐城、岩代、之に次ぎ、南部、津輕も、亦、少しとせず。大豆は、奥羽到る所にあり、稗は、陸中に多く、麻は、下野を以て、本邦第一とす。岩代、陸前、陸中、羽前にも、亦、産出す。煙草は、下野、信濃に多く、磐城、岩代、之に次ぐ。養蠶は、中山道到る處に行はれ、殊に、上野の養蠶製絲業は、我が國第一なり。信濃の種

紙繭甚だ多し。岩代も亦盛にして、以上の三國を本邦中、最も多く産する地とし、之に次ぐものは、磐城、近江、美濃となす。織物の産額は、上野、下野、岩代を以て第一とし、近江、美濃、之に次ぐ。即ち、中山道にては、近江の濱縮緬、絹縮、麻布、蚊帳、美濃の縮緬、羽二重、信濃の上田縞、上野の上州絹、伊勢崎織、下野桐生、足利の縮緬、綸子、緞子、及び、木綿織等あり。奥羽にては、岩代、川俣の羽二重、二本松紬、仙臺の仙臺平、精好、八端、米澤の絹、糸織、秋田の畝織、縞八丈、陸中の南部織等あり。

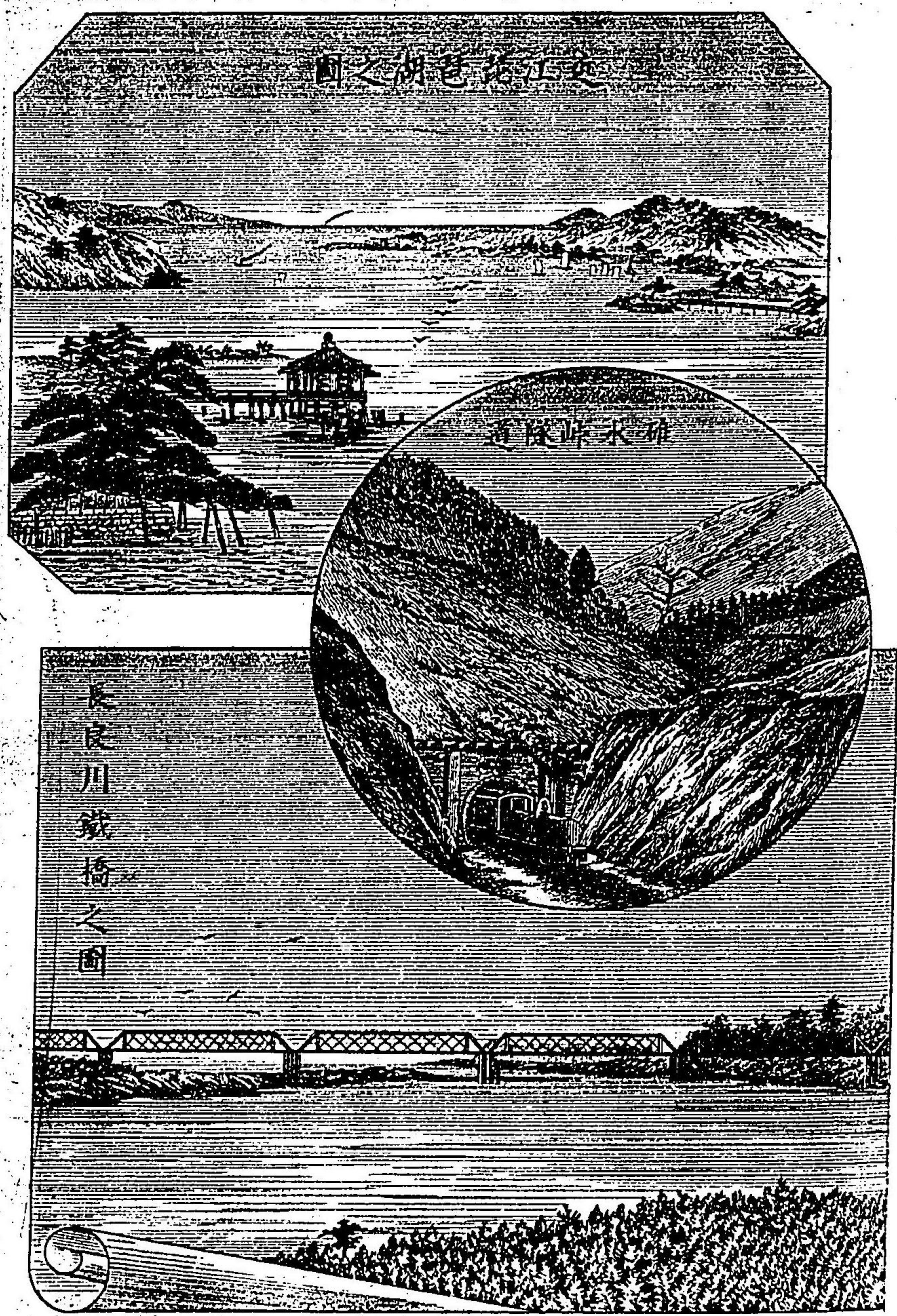
陶器の製造は、中山道にては、美濃、最も盛にして、奥羽にては、會津を最とす。磐城の相馬焼も亦、著名なれども、産額甚だ多からず。蠟燭は、會津産の名高く、漆器は、會津の會津塗、津輕の津輕塗、羽後の春慶塗等、有名なり。紙は、美濃の美濃紙、その名高く、信濃、之に次ぐ。又、陸前の埋木細工、美濃、飛騨の一位細工等、有名なり。

鑛物は、中山道にては、飛騨に銀、美濃に銀、鉛、銅を出す。又、下野、足尾の銅は、産額の多きこと、日本第一なり。

奥羽は、鑛物の産出最も多く、金は、陸中、尾去澤、最も名高く、岩代、羽後、陸奥、之に次ぐ。銀は、陸中の小阪、及び、羽後の阿仁、院内を、我が國第一とす。岩代の半田も亦、銀を出す。銅は、羽後に最も多く、陸中にも亦少からず。鐵は、陸中、釜石、及び、仙人に夥く出で、石炭は、磐城に出づ。羽後、陸奥、岩代の硫黃、及び、羽後の石油も亦、名あり。

木材は、青森、秋田、岩手に、廣大なる林区あり。下野、日光の山林も亦、良材に富み、木曾山林は、廣く飛騨、及び、美濃に亘れり。

水産物は、中山道にては、海なきを以て、唯、河流湖沼より産するのみ。長良川の鮎、琵琶湖の鯉、鮒、其の名あり。奥羽は、沿海の地多くして、漁獵無き所なし。雖、其の中、陸前、陸中、陸奥、最も盛に行はる。陸前の鮭、鱈、陸中の章魚、烏賊、陸奥の鱒、鱈、海鼠、最も名高くして、産額多し。鮑



は、至る處に多く、鮭は、陸中の北上川に多く産す。又、製鹽は、陸前の海濱に、最も盛なり。  
 奥羽は、牛馬の牧畜、盛に行はれて、他國に出すもの甚だ多く、陸中南部の馬、最も著名なり。陸奥、磐城、信濃より産する馬も、亦、少からず。

第二 處誌

(一) 大津町及び其の近傍 近江の大津は、京都を東に距ること三里琵琶湖に臨みて、勢田川の出口にあり、鐵道は、此の地を東西に通じ、且つ、湖水には、舟楫の便あるを以て、水陸の運送自由の地なり。人口三萬三千餘、滋賀縣廳ありて、近江一國を管理す。第四師團の衛戍あり、第九聯隊を置けり。  
 彦根は、大津を距ること、凡そ十八里にして、琵琶湖の東岸にあり、井伊氏の舊城地にして、人口二萬餘あり、其の北に長濱あり、縮緬の産



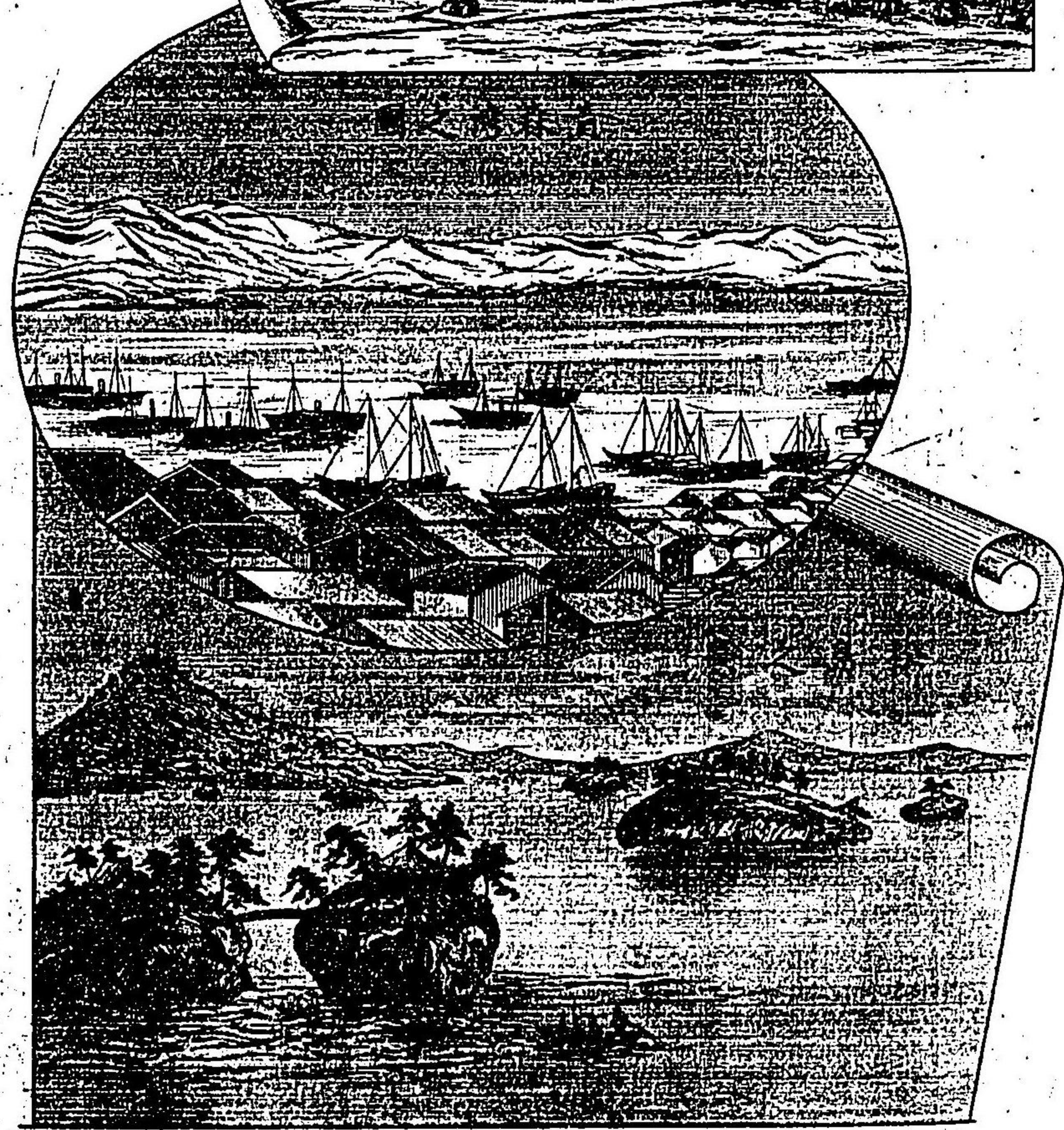
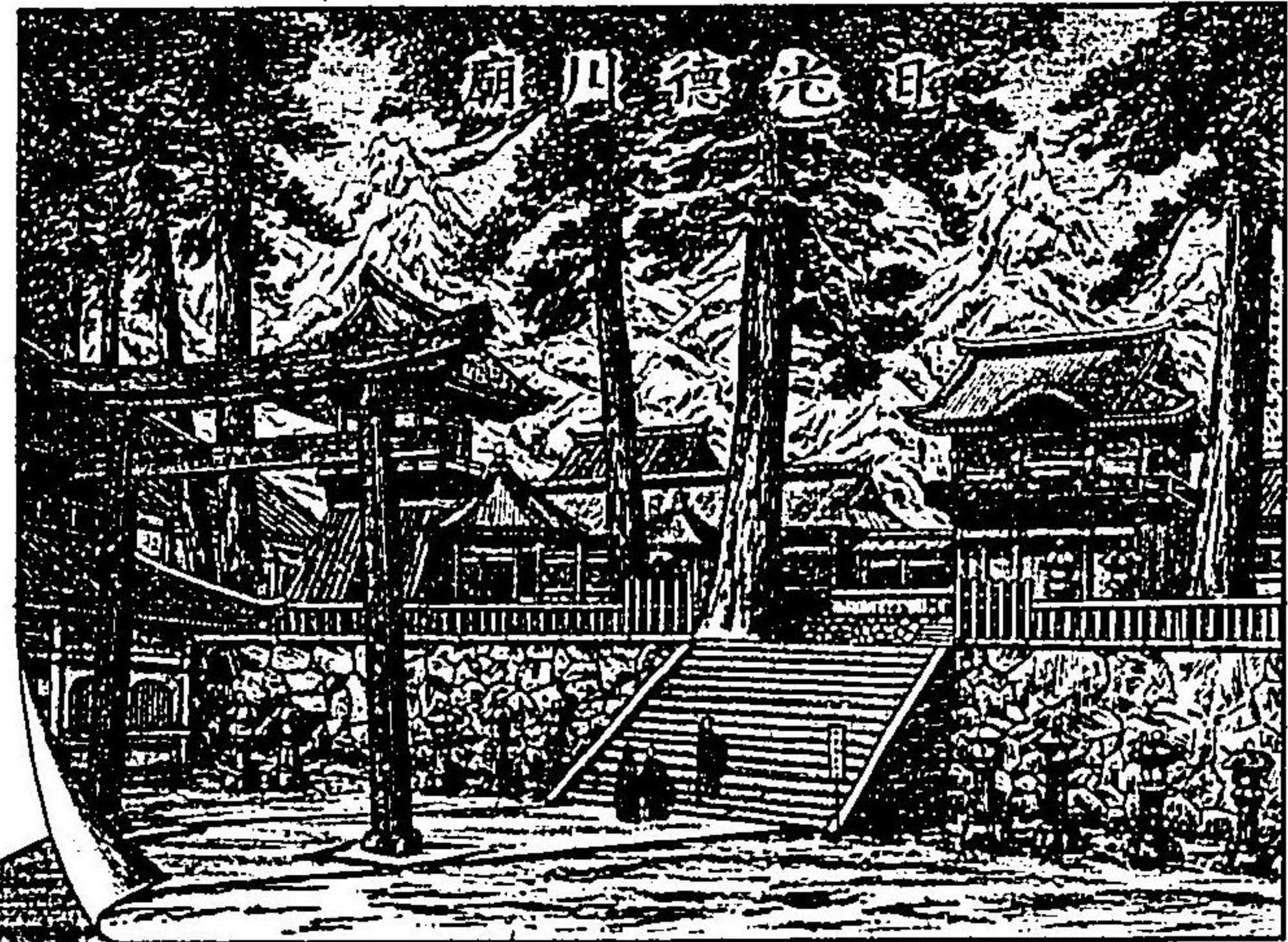
地にして、大津と汽船の往來あり。米原は、北陸、東海、兩鐵道の岐る處にあり。

(二)岐阜市及び其の近傍 岐阜市は、美濃の南部に位し、長良川に添へり。岐阜縣廳ありて、美濃飛驒二國を管轄せり。人口三萬二千、市街繁華にして、東に稻葉山あり。

岐阜の西方、凡そ五里にして、大垣の市街あり。人口二萬餘ありて、稍繁華あり。其の西に、關原の古戰場あり。又、美濃の西南隅には、有名な養老瀧あり。

飛驒國は、岐阜市の北方に方りて、國の中央に、高山町あり。人口一萬四千、山間にありて、風景に富めり。紡績に従事するもの多し。其の南に、水松を産するを以て知られたる位山あり。

(三)長野町及び其の近傍 長野は、信濃の北部にありて、千曲川、その東を流る。長野縣廳を置きて、信濃一國を管轄す。人口三萬二千餘あり。



り。武蔵より越後に通ずる鐵道此の地を過ぐるを以て、市況繁昌な  
 り。又、有名なる善光寺の大伽藍ありて、賽客頗る多し。  
 長野の南に、川中島の古戰場あり、その南の姨捨山は、觀月の勝地た  
 り。上田は、長野の南方にありて、人口、二萬餘あり、蠶絲の業甚た盛な  
 り。松本町は、國の中央にあり、長野に次げる都會にして、人口、二萬八  
 千あり。養蠶の業盛にして、市街殷富なり。飯田町は、南部の都會にし  
 て、天龍川に添へり。又、諏訪湖畔に、上諏訪、下諏訪の兩町あり。  
 〔四〕前橋及び其の近傍 前橋は、上野の南部に位して、利根川の東岸  
 にあり。群馬縣廳ありて、上野一國を管轄す。人口、三萬六千餘あり、製  
 絲業頗る盛にして、市況甚た殷富なり。富岡製絲場は、市の南方にあ  
 りて、その名高し。  
 前橋の西南三里にして、高崎あり。人口、三萬餘、第一師團衛戍あり、前  
 橋と相待ちて繁華の市街たり。その他、桐生、伊勢崎等、皆織物を以て

名あり。國中、妙義の石門、伊香保、草津、磯部等の諸温泉、世に著はる。

(五)宇都宮町及び其の近傍 下野の宇都宮には、栃木縣廳を置きて、下野一國を管轄せり。此の地は、奥羽街道の要路にして、人口三万六千あり。奥羽鐵道の通路に當れり。

宇都宮の西南十六里に、足利町あり。織物を以て著る。又、其の西北數里にして、日光山あり。東照宮、其の他、徳川氏の祖廟あるところにして、社殿の結構壯麗、全國に比なし。山中に華嚴、裏見、霧降等、著名の瀑布あり。湯本温泉、中禪寺湖等、亦、此の山中にありて、避暑の遊客甚た多し。日光の南に、足尾の銅山あり。

(六)福島町及び其の近傍 福島は、岩代の東北、阿武隈川の岸にあり。福島縣廳ありて、岩代一國及び磐城の過半を管轄す。人口一萬七千餘あり。

福島の南に、二本松の名邑あり。若松ハ、猪苗代湖の西なる會津平原

の中央にあり、舊と會津と稱し、松平氏の舊城地にして、戊辰の戦争を以て有名なり。人口、二萬五千あり。

白河は、磐城の西南にあり。昔は、奥羽に入る關のありし所なり。此の他、郡山、須賀川、平等は、國中の名邑なり。

(七)仙臺市及び其の近傍 仙臺市は、陸前の南部廣瀨川の岸にありて、人口七萬六千あり。宮城縣廳を置きて、陸前の一市十三郡及び磐城の三郡を管轄す。市街繁華にして、奥羽第一の都會たり。第二高等中學校及び控訴院の設けあり。其の城は、伊達氏の築きしところにして、今の第二師團を置く。側に躑躅岡あり、櫻花を以て名あり。

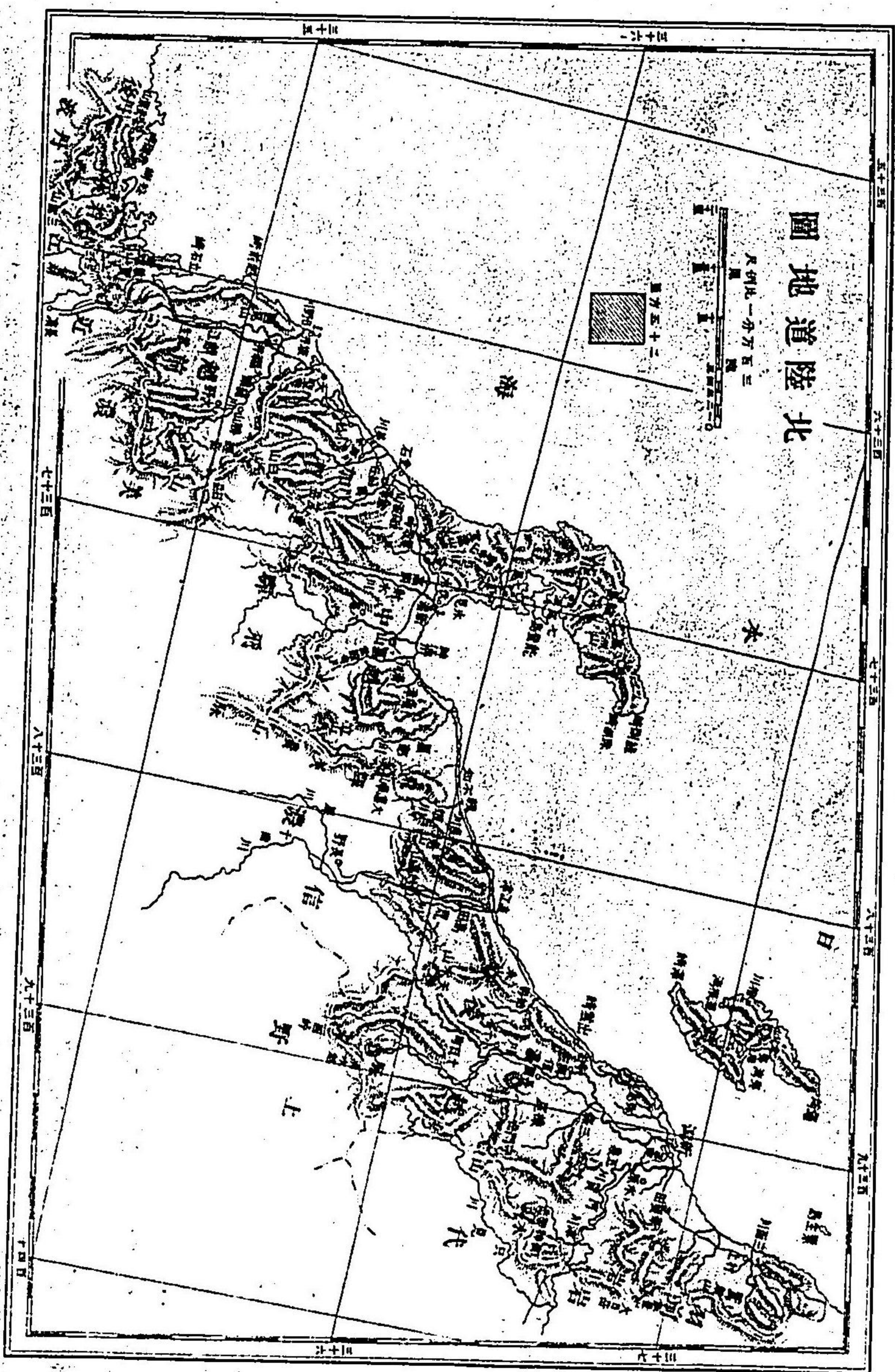
仙臺の東北に、鹽竈あり、鹽竈神社を祀れり。其の港内に松島あり、我が國三景の一にして、無數の小島、海上に碁布し、翠松その上に生じ、風景絶佳なり。又、仙臺の東北、凡そ十三里にして、北上川の口に、石巻港あり。人口、一萬七千、港内、水深くして、船舶の碇泊に宜し。その東南、牡

鹿半島の岸に、萩ノ濱あり、亦、良港なり。

(八)盛岡市及び其の近傍 盛岡は、陸中の中央部にありて、岩手縣廳を置き、陸中の十一郡及び、陸前の氣仙郡と、陸奥の二戸郡とを管轄す。此の市は、仙臺に次ける繁榮の都會にして、人口三萬二千あり。南部氏の舊城地なり。北方に、安倍貞任の討死せし厨川柵跡あり。その附近にある中尊寺の古刹も、亦、著名なり。其の他、東部の海岸には、宮古、釜石の兩港あり。釜石の大鐵坑は、此の港の西、少許にあり。

(九)青森市及び其の近傍 陸奥の青森は、本州最北の都會にして、人口二萬三千餘。青森縣廳ありて、陸奥の一市八郡を管す。第三師團の第四旅團を置けり。此の地は、東北鐵道の終點にして、東京及び、函館に通ずる汽船の碇泊所たり。

青森の西南に、弘前市あり。津輕氏の舊城地にして、人口三萬一千あり。此の地方の都會たり。又、東海岸に、八戸あり。繁盛の都邑なり。



(十)山形市及び其の近傍 羽前山形は、最上川の支流の灌域にあり、  
 山形縣廳の所在地にして、羽前一國及び、羽後の一郡を管轄す。人口、  
 三萬八千あり。  
 山形の南に、米澤市あり。上杉氏の舊城地にして、人口、二萬八千。山形  
 市とその繁榮を競へり。米澤織を産す。鶴岡は、海岸に近くして、人口、  
 一萬九千あり。交通便利なり。新莊は、國の北部にある小都會なり。  
 (十一)秋田市及び其の近傍 秋田は、羽後の西海岸、御物川の河口にあ  
 り。秋田縣廳在りて、羽後の一市八郡と、陸中の一郡とを管轄せり。舊  
 と佐竹氏の城地にして、人口、二萬七千あり。秋田畝織は、此の地より  
 産せり。市の西に、土崎港あり。  
 秋田の南方十七里に、酒田港あり。兩羽地方の要港にして、人口、二萬  
 一千。市街頗る繁華なり。國の北部、能代川の口に、能代港あり。船舶の  
 碇泊場なり。

#### 第四節 北陸道

##### 第一 總説

(一)位置廣袤人口 東山道の北に隣して、日本海に面する一帯の地方を、北陸道と云ふ。西の一端は、山陽道に接し、其の他は、悉く、東山道に包まる。地形狹長にして、長き處、百三十里、幅廣き處、凡そ二十里あり。面積、一千六百三十四方里にして、人口、三百九十四萬八千九百六十一人あり。一方里につきて、二千四百七十八人の割合かり。

(二)區劃 北陸道七國を、五市四十三郡に分ちて、四縣を置く、即ち、左の如し。

若狹國三郡 三方、遠敷、大飯……………

越前國 一市 福井…………… 福井縣

八郡 足羽、吉田、阪井、大野、南條、今立、丹生、敦賀……………

加賀國 一市 金澤

四郡 江沼能見石川河北

石川縣

能登國四郡 羽咋鹿島鳳至珠洲

二市 富山高岡

越中國

八郡

東礪波西礪波上新川中新川婦負

富山縣

下新川射水氷見

一市 新潟

越後國

十五郡

北蒲原中蒲原西蒲原南蒲原東蒲原三島古志北魚沼中魚沼南魚沼刈羽東頸新瀉縣

城中頸城西頸城岩船

佐渡國一郡 佐渡

(三)地勢 本道の南部は東山道の連山に圍まらるるを以て土地自ら高峻なれども北部は日本海に向ひて次第に傾斜せり故に海岸に

は平地少からず越後平原の如きは凡そ四十里の間に亘れり越前加賀の海岸も亦平地を有す能登は海中に斗出せる半島國にして山脈中央を貫通し海岸に奇岩峙ちて風景頗る佳あり佐渡も亦山多き島國なり

(四)海岸 本道の海岸は若狹越中能登に於て屈曲多く其の他は大なる出入を見ず其の中若狹は彎入最も著しく松崎銀崎東西相並びて小濱灣を抱く其の他小出入頗る多し越前に立石崎あり海中に斗出すること殆ど三里燈臺を設く敦賀港は此の立石崎東部の灣中にありて北陸の要港なり之より北に進みて阪井金石等の諸港あり能登半島の端に綠剛岬珠洲岬あり東南の彎入せる所を七尾入江と稱す能登半島の東にありて越中に灣入するものを越中灣と稱す灣内に伏木の良港あり又越後の海岸は頗る長くして中央に直江津港あり其の東に新潟港あり

本道の海岸は、一般に險峻にして、間々、交通に困難なる所あり。殊に、越後越中の界には、親不知と稱する有名の難所あり。

(五)山岳 本道の山脈は、その南部なる東山道の境に連亘せり。即ち、越後の境には、岩木火山脈横はり、羽前の境に、鷲巢山、飯豊山あり。岩代の境に、御神樂岳、淺草山、守門岳、駒形山、八海山(六、一〇〇)あり。信濃の境に、彌彦火山脈ありて、砂高山、燒山、黒姫山、大蓮華山(九、八七一)の如き高山あり。此の山脈は、羽後の寒風山より起り、日本海を渡りて、越後に來り、彌彦山、米山等を起せるものなり。又、越中の南部へ、東山道中、最も崢嶸なる信濃、飛驒の兩國に境せるを以て、高山相重なれり。其中、立山(九、八〇〇)最も高し。西部にも、亦、袴腰山(三、四〇〇)あり。加賀と越前之間に白山火山脈あり。此の山脈は、遠く山陰道に亘れり。白山は、脈中の高峯にして、一に御前岳(八、八〇四)と云ふ。四時、白雪絶えず、故に、此の稱あり。又、越前に大日岳、若狹に青葉山あ

り。此の他、白山火山脈と交叉して、南北に走れる一山脈あり。此の脈は、能登の寶達山より起り、越中、加賀の境に蟠りて、礪波山を起し、夫より、近江、美濃の境に亘るものなり。能登火山脈は、隱岐より來りて、能登に入り、鷹爪、高洲の諸山となり、佐渡に渡りて、金北山となれり。(六)河流 河流は、皆、南方の山脈間より發し、北流して日本海に注ぐ。故に、長流甚た少し。唯、信濃川のみは、其の源を、山脈の南なる信濃に發し、越後の中央を横ぎりて、日本海に入れり。我が國三大河の一にして、其の長さ、百里、幅廣き所、八町に及び、卅五里の間、船舶を通ずべし。支流も亦、甚た多く、八千八水河の稱あり。越後の新潟、三條、長岡は、此の灌域にあり。岩代の日橋川も、亦、此の國の北部に入りて、海に注ぐ。阿賀川(五七)と稱するものにして、運輸の便あり。射水、神通、黒部、常願寺川は、越中の四大河なり。皆、北流して海に入る。其中、神通、射水の二川、最も長流にして、共に、飛驒國より發源せり。以上諸川の灌域、



甚た廣し。此の他、加賀の手取川、越前の日野川、亦大なり。この諸川の中、越後の信濃川、越中の四大河、及び、加賀の手取川、越前の九頭龍川、(日野川)を合せて、本道の七大河と稱す。

本道の沿岸には、瀉と稱するもの多し。瀉とは、砂石の積りて、河口を遮ぎり、水を湛へて、沼となせるものなり。越後の福島瀉、越中の放生津瀉、加賀の河北瀉、柴山瀉、越前の北瀉の如き、是なり。

(七)氣候 本道は、北、日本海に面して、直に、亞細亞大陸の風を受くれども、對馬暖流のため、幾分か調和せらるゝを以て、割合に寒冽をらず。又、本道の各地につきて、之を見れば、能登の西南は温暖にして、東北は寒冷なり。特に、越後は、寒氣甚しく、積雪、人家を埋むることあり。加賀と越前の間なる牛首村の如きは、冬季に至れば、雪のため、村民舉りて、村を去ると云ふ。

一年の平均温度は、金澤、三度一分、伏木、十三度、新潟、十二度六分なり。

又、本道の氣候は、寒氣の甚しきが如く、暑氣も、亦烈しくして、その温度は、九州地方に譲らずと云ふ。

風位は、北西風多く、特に、冬季は、日本海より、水蒸氣を運び來る。此の水蒸氣は、陸地に近づくに従ひて、凝結するを以て、降雪頗る多し。之を以て、全年の雨雪量は、實に、全國中第一に位し、殊に、加賀、能登、最も多く、越中、越後、之に次ぐ。而して、降雨季は、他道と異り、夏より秋に至るまでは、降雨少くして、數旬の間、些少の雨滴をも見ざることあり。されど、十一月より一月に至るまでは、降雪頗る多量にして、全國、其の比を見ず。

(八)物産 本道は、土地概ね肥沃ならずと雖、越前、越後、加賀等には、豊饒なる耕地あり、農産の重なるものは、米にして、麥は、甚た稀なり。米の産額多きは、新潟にして、越中、加賀、能登等、之に次ぐ。茶は、能登、佐渡を除くの外、至る所に産すれども、若狹、越前、最も多し。煙草は、越前、

加賀、越中に多く、麻は、越前、加賀、越後に多し。蠶業は、越中、越後、最も盛  
 あり。織物の名あるものは、越前の奉書紬、蚊張、加賀の絹、越中の木綿、越後  
 の縮、敷寄屋、椽尾紬、太織、五泉の精好平、糸織、十日町の絹縮等なり。陶  
 器は、加賀の九谷焼、名高く、佐渡焼も、亦、名あり。紙は、福井の奉書紙、著  
 名なり。若狹の若狹塗、輪島塗、越後の漆器も、亦、世に名高し。金澤の象  
 眼細工、越中高岡の銅器、越後の三條、越前武生の鐵器、加賀の疊表も、  
 亦、名あり。金は、佐渡の金北山、最も多く産出し、殆ど、全國産額の三分の一を占  
 む。銀は、佐渡の相川、越前の面谷に産し、銅は、加賀の尾小屋、越前の草  
 倉より出づ。其の他、越中の硫黄、越後の石炭、石油、若狹の瑪瑙、基石、越  
 前の砥石等、著名の物産あり。海産物の多きは、新潟縣及び富山縣を最とす。越後の鮭、越中の鰻、鱈、



金澤山北門



新潟港之圖



敦賀港之圖

鳥賊、若狹の鯛、越前の雲丹、佐渡の鰯は、著名なるものなり。又製鹽業は、能登に盛に行はる。

## 第二 處誌

(一) 金澤市及び其の近傍 金澤は、北陸道第一の都會にして、前田氏の舊城地たり。北に、金石港を控へ、市況頗る盛にして、人口八万九千餘、石川縣廳ありて、加賀、能登の二國を管轄す。第三師團の第六旅團及び、第四高等學校を置けり。兼六園は、有名なる公園なり。又、此の地、象眼、細工、銅器の産出を以て名あり。

大聖寺町は、越前の境に接して、小繁華をなせり。陶器を以て有名なる九谷、及び、温泉を以て知られたる山代、山中は、共に、その近傍にあり。その他、小松も、亦、繁華の都會なり。

金澤より、北に進みて能登に入れば、東七尾灣に沿ひて、七尾町あり。

北海に航する船舶の碇泊所なり。其の北に輪島あり。亦船舶の寄る所にして、漆器の産地なり。

二富山市及び其の近傍 富山市は、越中の中央に位して、神通川の東岸に臨めり。前田氏の舊城地にして、人口五萬八千餘。富山縣廳ありて、越中一國を管轄せり。此の地は、古來、賣藥行商の多く出づる所なり。

高岡市は、富山に次ける都會にして、富山の西六里にあり。銅鐵器の製造盛にして、人口三萬餘あり。此の他、新港、魚津の二都會あり。伏木は、市の北方海岸にある良港なり。

三新潟市及び其の近傍 新潟は、信濃川の河口にありて、新潟縣廳を置き、越後、佐渡、二國を管轄せり。人口五萬餘。我が五港の一あり。此の港は、信濃川の泥砂、年々堆積して、河口次第に淺く、且つ、風波の難あるを以て、大船の碇泊に便ならず。

新潟の東南に五泉あり、五泉平を出す。東方阿賀川の北には、新發田あり。第二師團衛戍地あり。又、新潟を距る十七里、信濃川の岸に、長岡あり。西に高田町あり。高田町は、人口二萬餘。冬時の積雪、最も深き所なり。高田の北方に、直江津あり。國の要津にして、鐵道、東京と通じ、運輸の業に従事するもの甚だ多し。其の他、三條、與板、柏崎、出雲崎等の市港あり。又、小千谷は、越後縮の産地として、世に知らる。

佐渡の相川の國の都會にして、人口一万五千あり。又、夷、小木の兩港あり。島中に、順德天皇の御陵あり。金坑は、古來最も有名なり。

四福井市及び其の近傍 福井市は、越前の北部に位し、人口四萬三千ありて、繁華の都會なり。福井縣廳此所にありて、若狹、越前の二國を管轄す。此の地は、往時、北の莊と稱し、柴田勝家の居城ありしが、後ち、松平氏の封せられし處なり。市街は、足羽川に跨り、九十九橋を以て之を連ぬ。西部に、藤島神社あり、新田義貞を祀る。

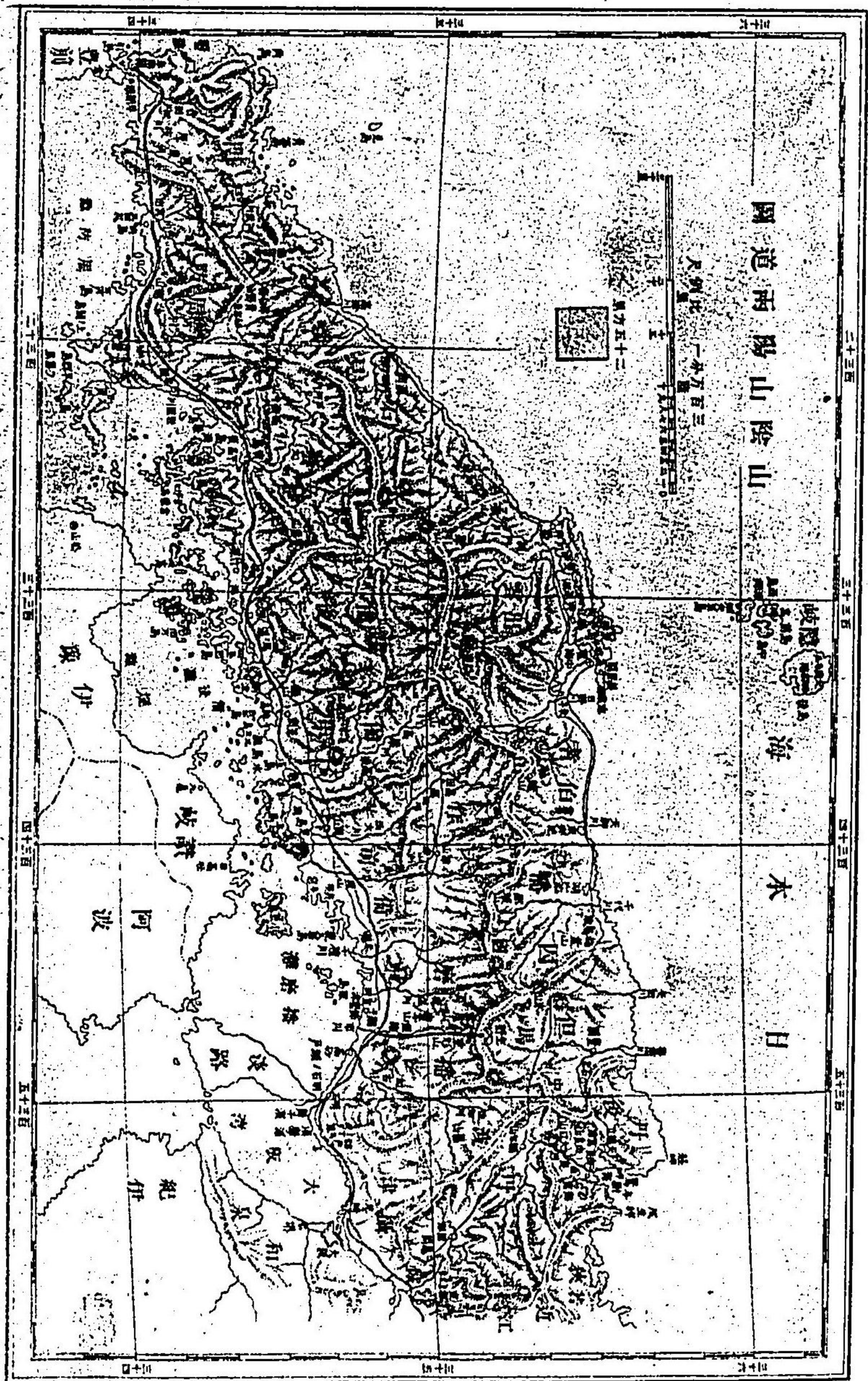
福井の北方ある日野川の河口に、阪井港ありて、貨物の出入、極めて多し。武生町は、福井の東五里にあり。敦賀は、國の西方に在りて、敦賀灣に臨み、灣内水深くして、北陸第一の要港たり。人口一万六千あり、北に金崎城あり。

小濱は、若狹の中央にありて、小濱灣に臨む。灣内常に船舶多し。

### 第五節 山陰道

#### 第一 總説

(一)位置 廣袤 人口 山陰道は、本州の西部に位して、北は、日本海に臨み、東は、北陸道及び畿内に連り、南と西とは、山陽道に接す。東西の長さ、八十里、南北廣き所、凡そ二十里、面積、一千百九方里、人口、百八十四万九千二百二十六あり。即ち、一方里につき、一千六百六十七人の割合なり。



(二)區劃 山陰道八國を分ちて、二市三十九郡とし、之を管轄するに、鳥取、島根の二縣あり。又丹後一國と丹波五郡とは、京都府に屬し、但馬、淡路の二國及び丹波の二郡は、兵庫縣に屬せり。

丹波國七郡 南桑田、北桑田、船井、天田、何鹿、  
氷上、多記、  
京都府  
兵庫縣

丹後國五郡 加佐、與謝、中、竹野、熊野、  
京都府

因幡國 一市 鳥取、  
三郡 岩美、八頭、氣高、  
鳥取縣

伯耆國 三郡 西伯、東伯、日野、  
鳥取縣

出雲國 一市 松江、  
六郡 八束、能義、仁多、大原、簸川、飯石、  
島根縣

石見國 六郡 邇摩、安濃、邑智、那賀、美濃、鹿足、

隱岐國四郡周吉穩地海夫知夫、……………

(三)地勢 本道の南部は、即ち中國山脈を以て、山陽道に境せり。此の地方は、自ら高峻にして、北方一帯は、日本海に面すれども、平野至りて少く、唯、海岸の所々に、狹少の耕地あるのみ。

(四)海岸 丹波一國を除くの外は、本道の各國、皆、日本海に濱すれども、海岸の出入、極めて少し。唯、丹後のみは、灣入深くして、與謝海の岸に、舞鶴、宮津の二灣あり。其の間に、由良港あり。天橋立は、宮津灣内に斗出せる三里餘の沙洲にして、青松白沙相映じ、日本三景の一たり。又、伯耆に、米子及び境港あり。出雲には、島根半島ありて、沿岸の風色、甚た佳なり。中海は、此の半島と伯耆の一角とを以て包まる。半島の東端を、地藏鼻と稱し、西端を、宇龍岬と稱す。其の南に、杵築港あり。此の他、石見の海岸に、濱田港あり。

(五)山岳 本道の山脈二條あり。一は、中國山脈にして、一は、白山火山

脈あり。中國山脈には、石見、周防、安藝の境に、鬼城山あり。出雲、伯耆、備後の境に、三國山あり。伯耆、因幡、美作の境に、三國山あり。因幡、美作、播磨の境に、志戸坂峠あり。其の東の國境に、三國山あり。丹波には、西に大江山、東に三國山あり。是等の山脈間を、横斷して、山陽道に出づる通路、少なからず。

白山火山脈は、中國山脈の北に方りて、相並行し。其の東方は、火山多く、西端は、稍、少し。脈の中、重なる山は、石見、出雲の境に、三瓶山(三八七〇)あり。伯耆に、大山(五、八八〇)あり。本道第一の高山なり。此の山脈は、是より東に延びて、丹後に至り、二派に分れ、一は、海に入り、一は、若狹の境に沿ひて、加賀の白山に連る。此の山脈の近傍には、温泉最も多く、丹後の鹽崎、但馬の湯島、因幡の岩井等、著名あり。隱岐は、火山脈の噴起したる島國にして、島根を去ること、殆ど、十二里の海上にあり。島後、西島、中島、知夫里島の四島と、數多の小島とよ

り成れり。後の三島は、島後に對して、又、島前と云ふ。數個の火山ありて、能登の火山脈に連れり。

(六) 河流 山陰道も、又、北陸道の如く、南方は、山脈を以て遮らるゝが故に、大河少し。唯、石見の江川(五〇)は、其の中の長流にして、源を備後に發し、山脈の間を貫流して、石見に入る。此の川は、又、石見川と稱し、上流を三次川と云ひ、安藝、備後の諸流を合し、下流は、運送の便あり。此の川に次ぐものは、出雲の簸川(二〇)にして、國の西部の諸流を合せて、宍道湖に入る。又、丹波の保津川は、東に流れて、山城に入り、佐治川は、西に流れて、播磨に入り、和知川、又、音無瀬川と稱し、北に流れて、丹後に入る。千丈瀑は、此の川の支流にあり。其の他、但馬に朝來川、石見に高津川、伯耆に日野川等あり。

出雲の宍道湖は、本道第一の大湖にして、周圍十三里餘あり。風光明媚にして、多く鱸を産す。本道も、亦、北陸道の如く、潟と稱するもの多

し。

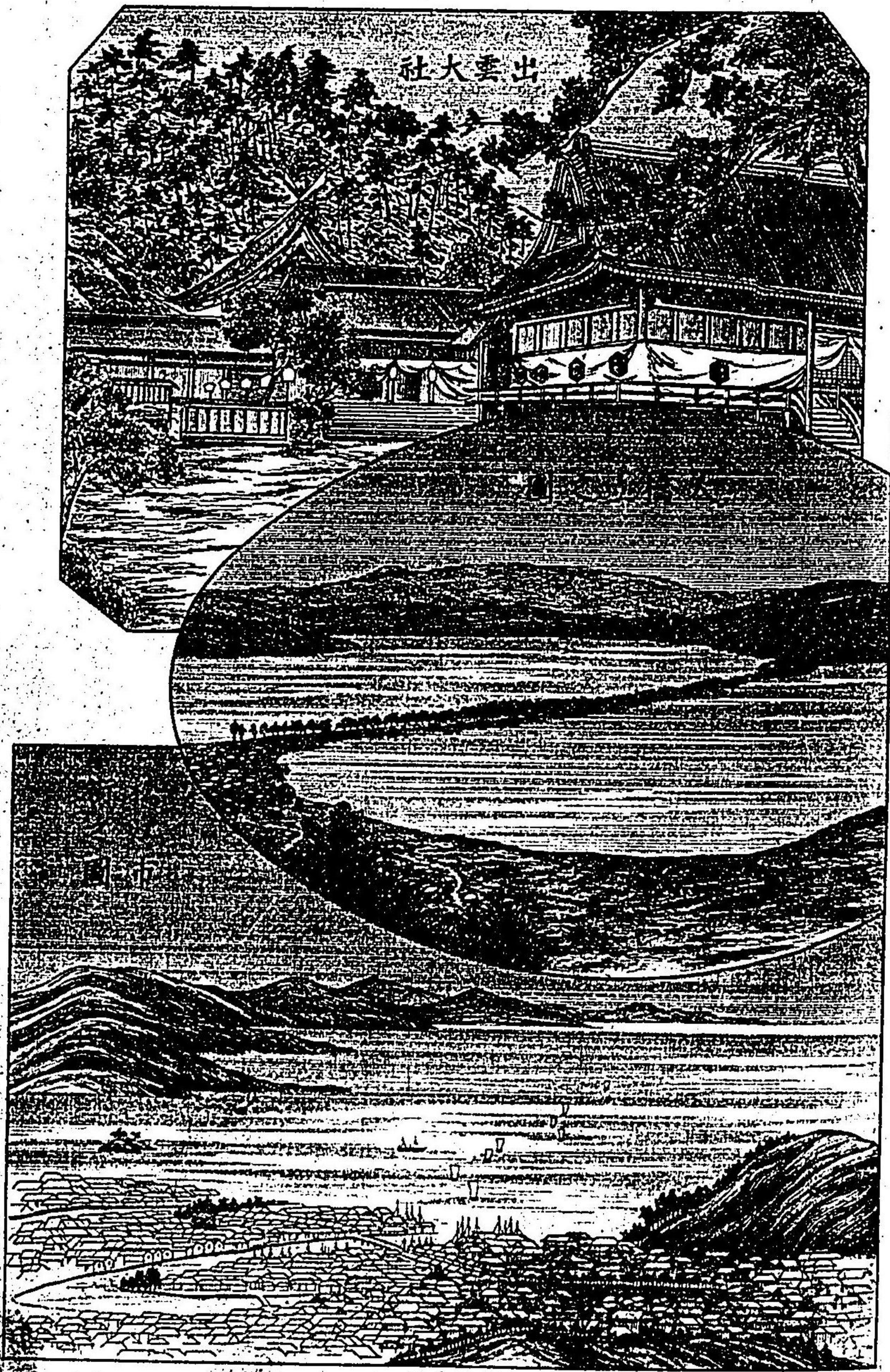
(七) 氣候 本道の氣候は、丹波最も寒く、其の他の諸國は、西方に至るに従ひて、次第に温暖なり。伯耆の境は、一年の平均温度十四度一分にして、石見の濱田は、十四度二分なり。之を他道に比ぶれば、山陽道よりは寒く、北陸道よりは温暖なり。

北西風の、日本海の水蒸氣を運ぶこと、北陸道に同じと雖、雨量は之に及ばず。降雨の多き時季は、秋と冬とあり。

(八) 物産 本道は、皆に、海陸の交通不便なるのみならず、平地少く、地味も亦不良にして、産物乏しく、富の度稍低し。出雲、伯耆、丹波等には、耕地あれども、多くは、山谷の地にして、收穫甚た少し。

米は、因幡、伯耆に産し、養蠶は、丹波、丹後、但馬に行はる。麻、藍、綿は、各地に栽培せらるれども、伯耆、出雲の綿、出雲、石見の麻、其の名高し。茶、煙草、及び、菓實は、丹波に多く、蜂蜜は、本道の特産たり。





織物は、木綿織稍盛なり。産額の最も多きは、丹後、但馬の二國にして、  
 丹後縮緬、伯耆、出雲の木綿織、石見の紙布等著名なり。製紙は、各地に  
 行はるれども、石見最も盛なり。柳行李は、但馬の特産なり。  
 金銀は、但馬の生野を第一とし、鐵は、石見、出雲最も多く、何れも砂鐵  
 なり。石見にハ、又銀銅を産し、出雲には、銅を出す。石炭と水晶は、伯耆  
 に産し、瑪瑙は、出雲に多し。  
 海産物は、風濤荒きを以て、收穫額多からず。其中、重なるものは、烏  
 賊鯛、鱈等にして、隱岐、出雲最も多し。又、隱岐には、鯖、鰻、干鰻を産し、伯  
 耆には、白珊瑚を産す。  
 牧牛は、各地に行はるれども、但馬の牛最も名あり。世に神戸牛と稱  
 するものは、大抵此の地方より出づるなり。

第二 處誌

(一)鳥取市及び其の近傍 鳥取は、因幡の東部千代川の下流にあり、鳥取縣廳此の所にありて、因幡、伯耆の二國を管轄せり。人口、二万七千餘、池田氏の舊城地たり。

米子町は、伯耆の深浦にある港にして、人口、壹万四千あり、其の北方の長く海中に斗出するものは、即ち、夜見濱にして、北端に境港あり、本道第一の良港にして、西は赤間關、東は敦賀、伏木、新潟と、漁船相通せり。

(二)松江市及び其の近傍 松江は、宍道湖の東岸にあり、松平氏の舊城地にして、人口、三万五千あり、市街繁華にして、山陰道第一の都會たり、島根縣廳ありて、出雲、石見及び、隱岐の三國を管轄す。松江の西北に杵築あり、出雲大社のある所にして、參拜の旅客常に多し。

濱田は、石見の中央なる海岸の小都會にして、船舶の碇泊場たり、其

の西南の山間に津和野あり。  
隱岐の西島には後醍醐天皇黒木御所の舊趾あり。中ノ島には後鳥羽上皇の御陵あり。又島後の南岸には西郷港あり。  
(三)宮津町及び其の近傍 宮津は與謝海に臨み、港内水深くして、大船の碇泊に宜し。人口一萬に満たざれども、市況繁華なり。日本三景の一なる天橋立は、此の近傍にあり。  
宮津の東六里許にて、舞鶴港あり。海軍鎮守府の豫定地にして、人口八九千あり。  
丹波の北西部に福知山町あり。又東南部に龜岡町あり。福知山は、由良川によりて、丹後に通ずることを得べし。  
但馬には豊岡あり。其の東南に出石あり。共に國の都會たり。北方湯島は、有名なる温泉場にして、浴客常に多し。豊岡より播磨に通ずる所に、生野あり。金銀鑛を産するを以て名あり。

## 第六節 山陽道

### 第一 總説

(一)位置廣袤人口 山陽道は、山陰道を併せて、之を中國と稱す。東は、丹波攝津に連り、北は山陰道に接し、西は早瀬海峡を隔て、九州と相對し、南は瀬戸内海を隔て、四國と相望む。東西の最も長き所、百〇七里、南北の幅、僅に十五里、面積、凡そ千五百七十七方里にして、人口四百十四万七千七百四十あり、即ち、一方里につき、二千六百四十一人の割合あり。  
(二)區劃 山陽道八ヶ國を分ちて、四市七十七郡とし、之に岡山、廣島、山口の三縣を置く。但た、播磨一國は、兵庫縣に屬せり。

一市 姫路……………  
播磨國 十三郡 明石、美嚢、加東、多可、加西、加古、印南、飾磨、兵庫縣

神崎、保赤穂、佐用、夫粟、……

美作國 十二郡

眞島、大庭、西北條、西條、東南條、東北條、勝北、吉野、英田、勝南、久米北條、久米南條

備前國 一市 岡山

御野、津高、赤阪、磐梨和氣、邑久、土道、兒島

岡山縣

備中國 十一郡

都宇、窪屋、淺口、小田、後月、下道、賀陽、上房、川上、哲多、阿賀、……

備後國 十四郡

御調、世羅、深津、沼隈、安那、蘆田、品治、神石、甲奴、三次、三谿、奴可、三上、惠蘇、……

安藝國 一市 廣島

安藝、佐伯、沼田、高宮、山縣、高田、賀茂、豊田、……

廣島縣

周防國 六郡

大島、玖珂、熊毛、都濃、佐波、吉敷、……

長門國 一市 赤間關

山口縣

五郡 厚狹、豊浦、美禰、大津、阿武、……

(三)地勢 山陽道は北に中國山脈を貫ひて、概ね山地かりと雖、山陰道に比すれば、稍平地多し。殊に播磨、安藝の間には、肥沃の平地甚だ多し。又交通は、海陸ともに頗る便利なり。

(四)海岸 本道八國中、美作一國を除くの外は、皆瀬戸内海に臨みて、海岸の小出入多しと雖、此の中、兒島灣と廣島灣とを最も大なりとす。兒島灣ハ、備前、備中の海岸にあり、兒島半島を以て、其の前面を擁す。兒島半島ハ、備前の一部にして、備中の南端より、東に向ひて横出し、備前の沖を繞れり。廣島灣ハ、安藝の南隅に在りて、灣入稍深く、嚴島、江田島等、遙に相對して、其の口を扼す。灣の東に、吳港あり。其の他、備中の左右には、玉島港、笠岡港、相並び、備後には、鞆津、尾の道の兩港あり。又、周防の海岸には、室津崎突出して、其の中に、室津、岩國、三田尻等の良港あり。長門の赤間關ハ、日本海と周防灘との間にある要港

あり。

又瀬戸内海ハ各處に於て其の名稱を異にし、播磨に播磨灘と云ひ、備中に水島灘と云ひ、備後に燧灘、周防に周防灘と云ふ。而して内海の東口を明石海峡と云ひ、西口を早瀬海峡と云ふ。即ち赤間關の在る處にして、豐前の門司と相距ること僅に十餘町なり。其の海上にハ數多の島嶼星列し、兩岸の連山と相映して、風景絶佳なり。又此の兩岸に堅牢なる砲臺ありて、防備頗る嚴重なり。

(五)山岳 中國山脈は九州より長門の赤間關に入り、龍王及び鬼城の二山となり、周防の境を東に走りて、山陰、山陽の間を亘り、播磨の北方に至りて、丹波に入る。脈中の重なる山は、既に山陰道の山岳中に述べたる所なり。尙此の山脈の餘脈に方れる山岳を擧ぐれば、備後に御神山あり、備前と播磨の境に船阪山あり、後醍醐天皇の事蹟を以て著る山麓に墜道を穿ちて蒸氣車來往せり。又本道は火山脈

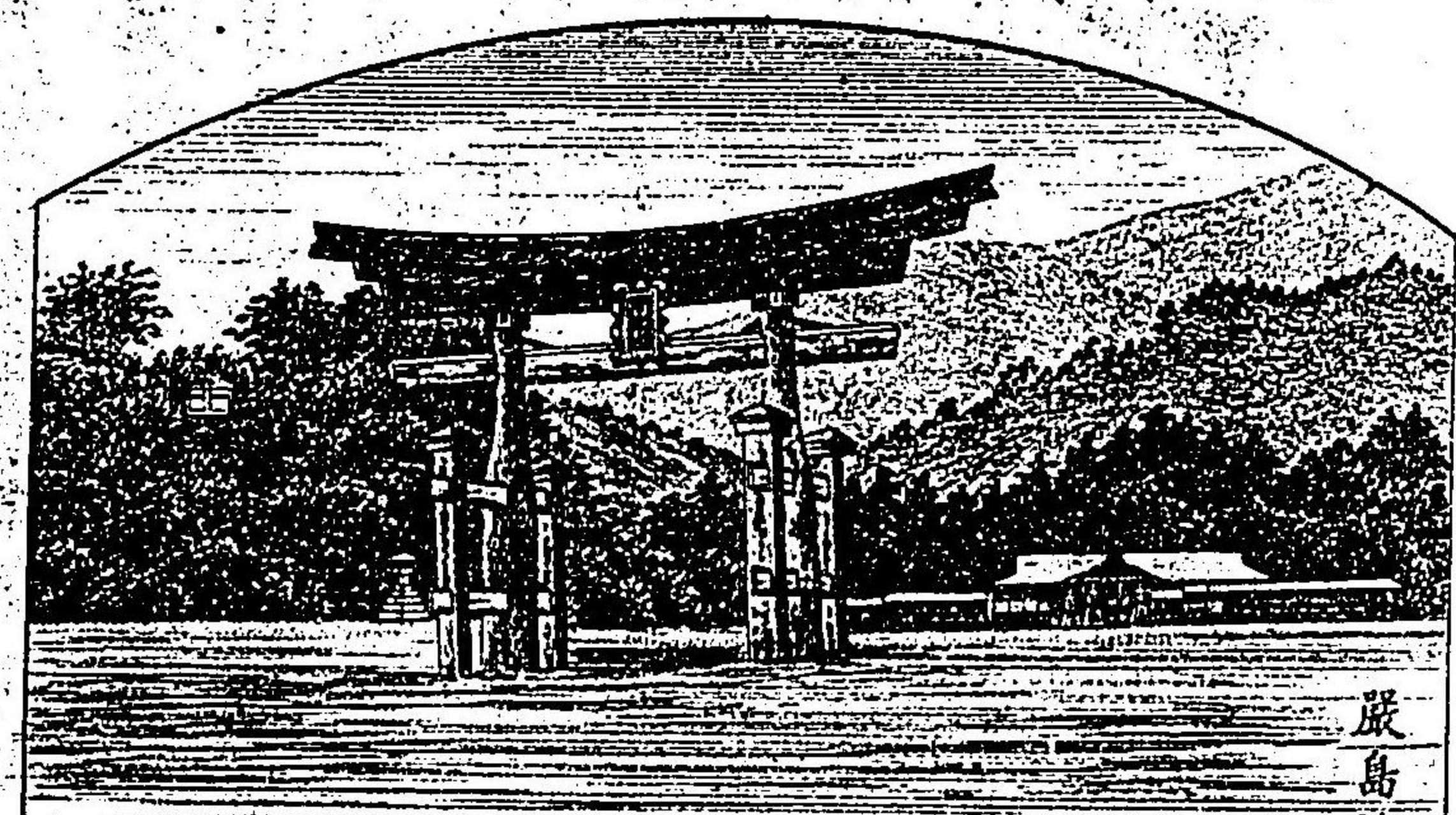
に當る所尠きを以て、温泉少く、地震も亦甚だ稀なり。

(六)河流 本道の河流は、概ね北方の山脈間より發して、瀬戸内海に注けり。今其の重なるものを擧ぐれば、播磨に加古川ありて、國の東を流る。其の西に楫保川、千種川等あり、美作にハ東に津山川(三一)西に高田川あり、共に備前に入り、一は吉井川とあり、一は岡山川となりて、皆兒島灣に注けり。備中の高梁川(二八)は、一に大河の稱ありて、國內第一の大河なり。備後に三次川、蘆田川あり、三次川は北に分れて江川とある。其の他安藝に太田川、周防に岩國川等あり。

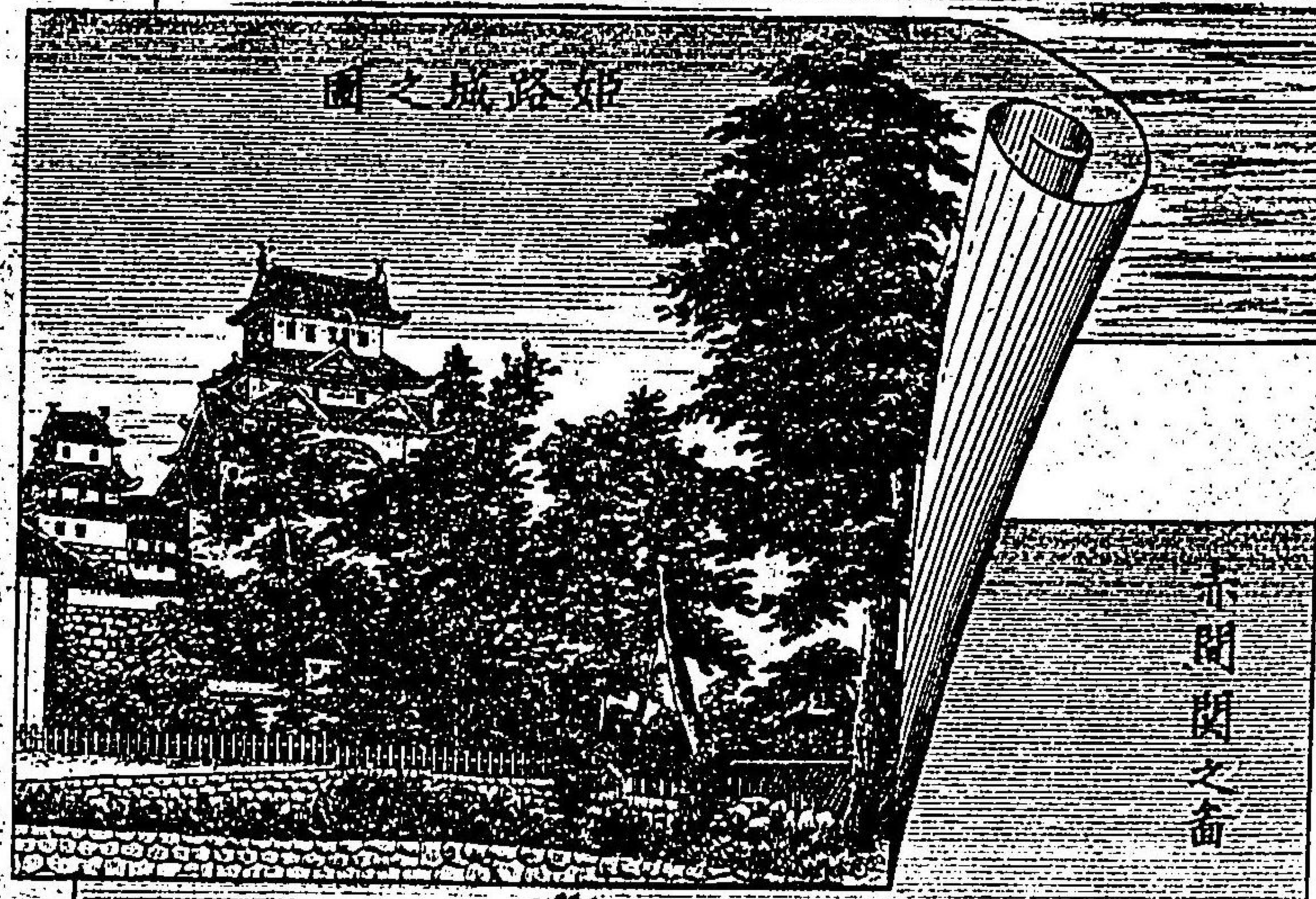
(七)氣候 本道の氣候は、山陰道に比すれば、遙に温暖にして、降雪少し、是れ其の北に山脈を貫ひて、南に面するを以てなり。即ち廣島の平均温度は、十四度六分にして、赤間關は、十五度なり。廣島は、大阪より稍寒しと雖も、北方の山間に至るに従ひて、漸次に寒冷を増せり。風は、概ね穩にして、瀬戸内海の如きは、颶風甚だ稀なるをもて、舟行

常に安し然れども日没に海風のため暑氣甚たしと云ふ。雨は周防長門には多量なれども瀬戸内海の沿岸は概して少量あり。殊に備前備後備中の如きは降雨最も少くして製鹽の業に適せり。

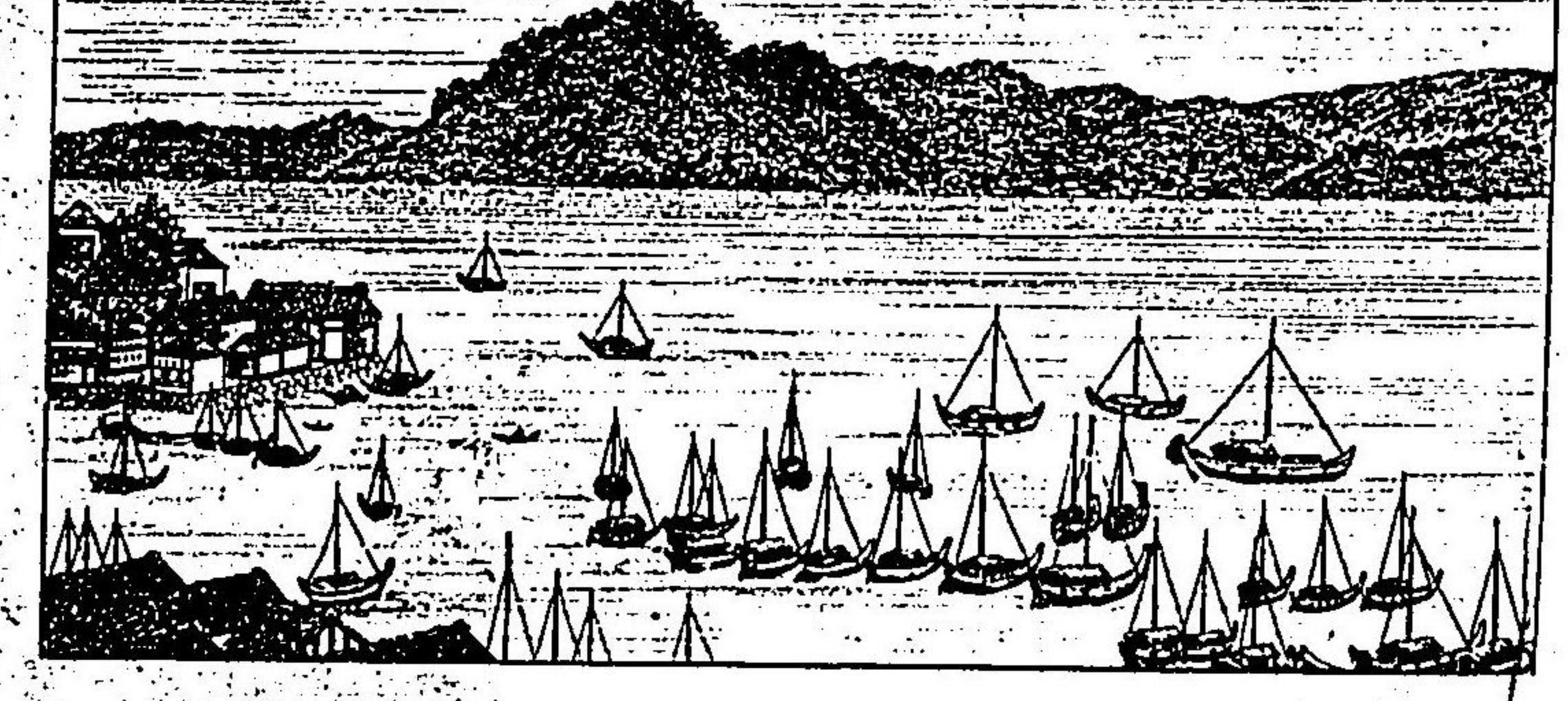
(八)物産 本道の地味は概ね肥沃にして至る所に五穀成熟す殊に播磨は農産物多し綿は播磨備前備中安藝周防等に多く煙草も各地に産すれども三備及び播磨は殊に多し茶及び果實は各地に適し夏蜜柑無花樹殊に多し唯養蠶業のみは未だ盛に行はれず。本道は綿の産出多く木綿織甚だ盛にして近年紡績業大に行はる。木綿織は播磨三備安藝周防に産すれども岩國縮明石縮最も名高し麻布蚊帳は安藝より出づ陶器は備前の伊部焼世に名あり壺表は三備に多し備後表と云ふもの是なり其の他三木の刃物姫路の製革龍野の醤油柄津の酒長船の刀劍等も亦著名なり。鑛物は播磨に銀を産し備中美作に銅を出す鐵は安藝備後に多く



嚴島神社之圖



赤間関之圖



石炭は、長門に多し。備前の蠟石、赤間關の硯石も、亦著はる。  
海産物は、甚だ多くして、長門、周防の海岸には、鱈、鯛、鰻、海參、牡蠣、章魚、  
烏賊等、頗る多し。播磨の鱧、廣島の牡蠣、長門の鯨等、亦各、名あり。製鹽  
は、到る所に行はるれども、赤穂鹽の名、最も高し。牧牛は、甚だ盛にし  
て、奥羽の牧馬に於けるが如し。

### 第二一 處誌

(一) 姫路町及び其の近傍 播磨の姫路は、神戸の西十四里にあり、兵  
庫縣の管轄に屬す。此の地は、中國の要衝に當り、市街繁華にして、人  
口三萬一千あり。酒井氏の舊城地にして、第四師團の第八旅團を置  
けり。姫路革は、此の地の名産なり。  
播磨の西南隅に、赤穂あり、昔、赤穂城の有りし處なり。又、多く鹽を産  
す、之を赤穂鹽と云ふ。明石は、播磨の東端なる海濱にあり、人口二萬

餘、山陰道に通ずる咽喉なり。縮布を産す。此の地方は、我が國有名の勝地にして、須磨、明石、舞子の濱等は、其の風光の美なること、三景に譲らず。其の他、飾磨津、龍野、高砂等の名邑あり。龍野は、醤油の名品を出す。高砂は、松の名所なり。

(二)岡山市及び其の近傍 備前の岡山は、國の西南隅に位し、岡山川の沿岸にあり。南方兒島灣を距ること遠からざるを以て、水陸運輸の便ありて、商業盛なり。人口五萬二千餘あり。往時、池田氏の城地にして、其の後樂園は、今尙存す。岡山縣廳ありて、美作、備前、備中の三國を管轄す。

岡山の北方、美作の中央に、津山あり。國中第一の都會にして、人口一萬二千あり。又、備中大川の下流には、東に倉敷あり、西に玉島港あり、共に繁華なり。玉島港は、水深くして、船舶の碇泊に便なり。今は、神戸と汽船相通す。笠岡も、亦、西部海濱にある良港なり。

(三)廣島市及び其の近傍 安藝の廣島は、廣島縣廳ありて、備後、安藝の二國を管轄す。此の地は、淺野氏の舊城地にして、市街は、太田川に跨れり。故に、水陸の交通頗る便にして、市況繁華なり。人口九萬壹千、山陽道第一の都會たり。第五師團及び控訴院あり。征清の役に、大本營を置かれし所なり。

廣島の南一里に、宇品港あり。其の東南に、吳港あり。第二海軍鎮守府の所在地なり。又、日本三景の一なる嚴島は、西南の海上にありて、市杵島神社を祀る。其の建築、頗る美麗なり。

備後には、福山の都會あり。人口壹萬五千を有す。尾道は、山陽道中著名の良港にして、人口壹萬九千あり。鞆、津、三原も、亦良港なり。其の近傍は、勝景に富めり。

(四)山口町及び其の近傍 山口は、周防の西境にありて、四面、山を繞らし、頗る要害の地たり。此の地は、毛利氏の舊城地にして、人口一萬



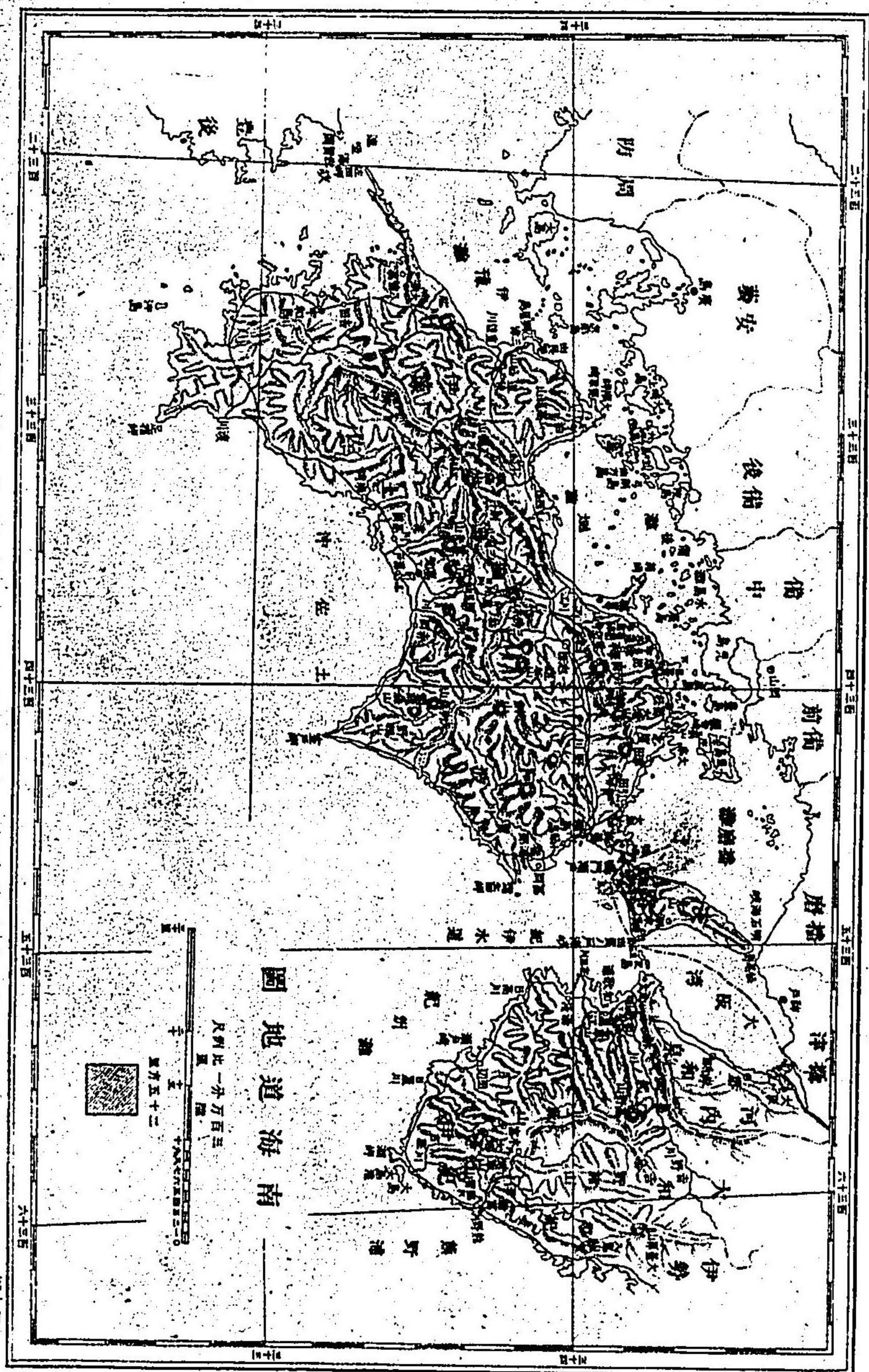
五千、山口縣廳ありて、周防、長門の二國を管轄す。  
山口の南五里に三田尻の良港あり、市街は、宮市町と相連りて、繁華あり、其の東に徳山の市街あり、又、東境に近き岩國川の口に、岩國町あり、岩國川は、錦帯橋を以て名あり。

赤間、關は、馬關、又、下の關と稱す、長門の西南岸にありて、早鞆海峽に臨む、此の地は、瀬戸内海の咽喉を扼して、國防の要所たり、市況亦殷富にして、人口、三萬五千あり、源平の古戰場たる檀浦は、其の東の海上にあり、萩町の、北部の都會にして、人口、一萬八千あり。

### 第七節 北海道

#### 第一 總説

(一)位置廣袤人口 北海道は、四國、淡路の二島、及び、紀伊の一國より成り、數百の島嶼、其の周圍に散在せり、紀伊國は、東、西、南の三面、海に



臨み、北部は、伊勢、大和、河内、和泉に接す。四國は、東は、紀伊海峽を隔て、紀伊に向ひ、北は、瀬戸内海を挟みて、山陽道と相對し、西は、速吸海峽を隔て、九州と相望み、南は、直に太平洋に面す。淡路島は、紀伊水道の北に當りて、四國と中國との間にあり、本道の面積は、千五百九十八方里にして、人口、三百八十壹萬九千八百五十五人あり、即ち、一方里につき、二千三百九十人の割合なり。

(二)區劃 本道六國を分割して、五市五十八郡となし、之を七縣に分轄せり。

- 一 市和歌山……………和歌山縣
- 紀伊國 九 郡 海部、那賀、伊都、有田、日高、西牟婁、東牟婁……………三重縣
- 南牟婁、北牟婁……………兵庫縣
- 淡路國 二 郡 津名、三原……………兵庫縣
- 一 市 德島……………兵庫縣

阿波國

十 郡

名東、勝浦、那賀、海部、名西、板野、阿波、麻植、美馬、三好、德島縣

讃岐國

一 市

高松、大内、寒川、三木、小豆、山田、香川、阿野、鷺田、那珂、多度、豊田、三野、香川縣

伊豫國

一 市

松山、風早、和氣、温泉、久米、越智、野間、新居、周布、桑原、宇摩、下浮穴、伊豫、上浮穴、喜多、西宇和、東宇和、北宇和、愛媛縣

土佐國

一 市

高知、郡土、佐幡、多高岡、吾川、長岡、香美、安藝、高知縣

(三)地勢 本道の地形は、三個に隔絶せりと雖、その地脈は同一なり。紀伊は、概ね山地にして、平野少し。四國は、山脈東西に走り、河流はそ

の間より發して、四方に分疏して、長大なるもの少し。沿岸の地は、多少平地を爲す。殊に、平野の瀬戸内海に面する北部に多く、地味も亦肥ゆたり。

(四)海岸 紀伊の海岸は、港灣の出入少し。國の南端を潮岬と云ふ。此處に燈臺を設く。此の岬より、東北の沿岸を熊野浦と云ふ。又、これを西に廻れば、田邊、和歌山の二小灣あり。加太岬の國の北端にあり。四國の沿岸の屈曲甚だ多くして、大小の岬灣少からず。即ち、東方に突出して、紀伊水道を扼するは、蒲生田岬なり。西方に長く出で、速吸海峽を爲すは、佐田岬なり。此の兩岬の南部海岸に、室戸岬及び蹠蹠岬ありて、土佐灣を抱く。其の長さ一百餘里あり。灣内に、須崎、浦戸の二港あり。蹠蹠岬と佐田岬との間は、出入極めて多し。雖、船舶の碇泊に便なるは、唯宇和島灣あるのみ。又、佐田岬の北より、三津濱に至るまでの、出入少くして、殆ど、直線をなす。其の海を、硫黃灘又は伊

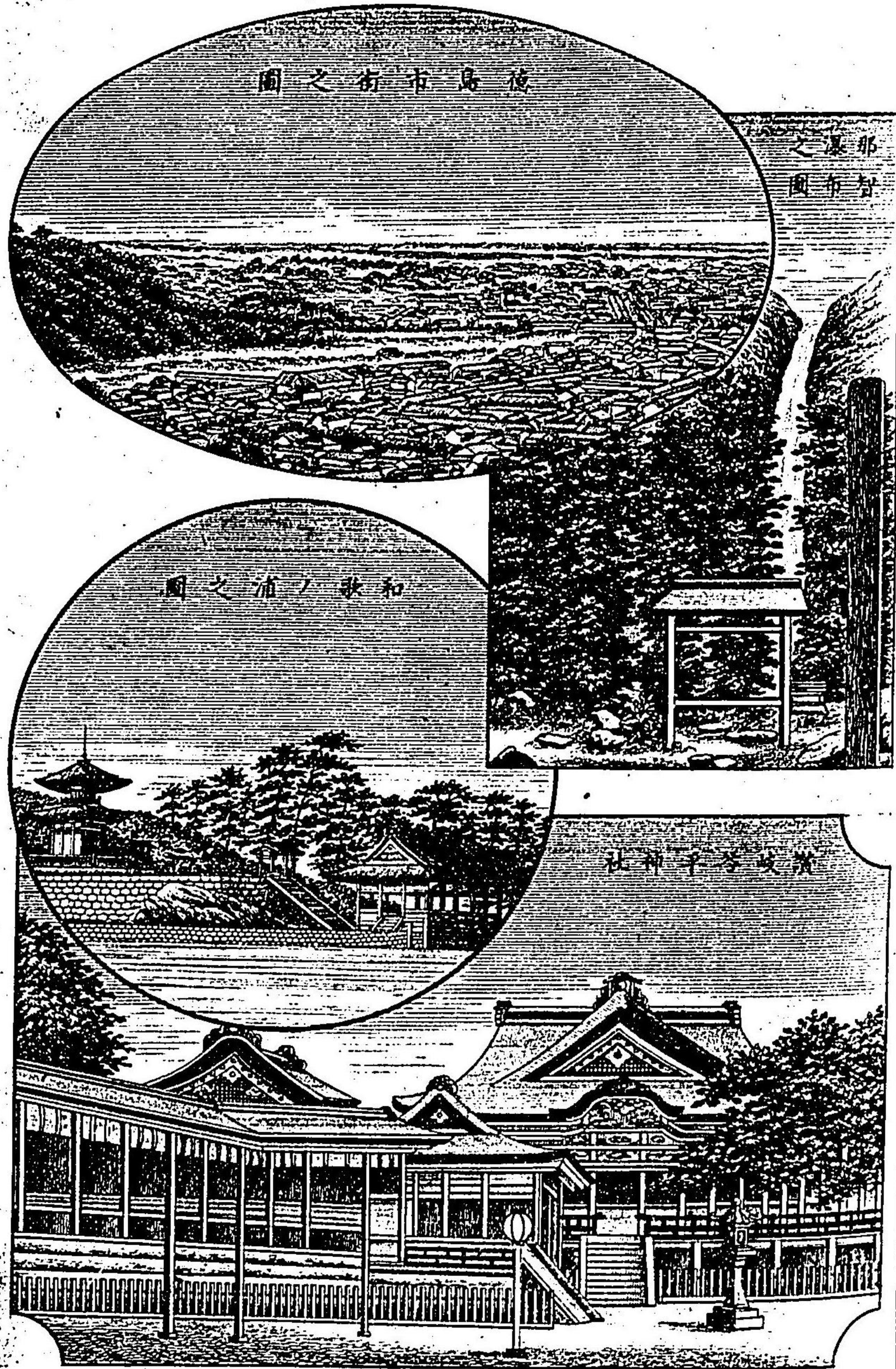
豫灘と云ふ、其の北方楫取岬は、讃岐の箱崎と相對して、一大灣をなせり、其の沿海を、燧灘、備後灘と云ふ、無數の小島、海上に散在せり、箱崎の東、讃岐の海岸も、亦、小出入多くして、多度津、高松の二港あり、其の海上に小豆島あり、淡路は、地勢狹長にして、北端に、明石海峡を隔て、播磨に對し、東に、由良岬突出して、紀伊の加太岬との間に、由良海峡を爲す、その西南阿波の間に、鳴門海峡あり。

(五)山岳 四國山脈は、伊豫の西岸より起り、伊豫、土佐の境を亘りて、阿波の中央を通り、紀伊水道を過ぎて、紀伊に入れり、此の山脈の數條の支脈あり、其の著しきものは、阿波、讃岐の界を亘りて、進みて淡路に入り、遂に、攝津の西境に至る、此の山脈中、著名の山岳を擧ぐれば、四國に、伊豫、土佐の境に、石槌山(七七九〇)瓶森山、鬼城山あり、阿波、讃岐の境に、雲邊寺山あり、阿波の中央に、燒山寺山あり、其の西に、劔山(七三九〇)旭丸山(四七五〇)あり、又、紀伊にて、南部に、那智山、大

塔峯あり、那智の山中に、那智瀧あり、懸崖より下ること八十四丈にして、その幅十八間あり、實に、本邦第一の瀑布なり。

火山脈に、豊後より來りて、伊豫の高繩山、讃岐の象頭山等を噴起す、象頭山は、琴平神社のある所なり。

(六)河流 本道中、河流の最大なるは、吉野川(四二二)にして、四國三郎の稱あり、其の源を、土佐の瓶森山に發し、東流して阿波に入り、伊豫川、其の他の諸水を集め、吉野川平原を直流して、徳島の北に至りて、海に注ぐ、渡川は、一に四万十川と云ふ、伊豫西南の山間より出で、南流して土佐に入り、西部の諸川を合して、下田の海に入る、仁淀川は、伊豫の國境より發し、物部川は、阿波の國境より出で、共に、土佐に入りて、土佐灣に注げり、那賀川は、阿波の西南隅の山間より發し、東流して、中島浦の海に注ぐ、その他、伊豫に、重信川、肱川等あり、紀伊の、河流甚た多し、熊野川(三七余)大和の十津川の下流にして、



北山川、その他の諸水を集めて熊野浦に注ぐ。紀伊川(四七)は、大和の吉野川の下流にして、國の北邊を西流し、和歌山の北に至りて、海に入る。その他、有田川、日高川、安宅川は、皆大和國境の山間より出で、共に西流して、紀州灘に注けり。

(七)氣候 本道の氣候は、概ね温暖にして、略山陽道に同じ。殊に、紀伊と土佐とは、最も温暖なり。高知は、一年平均十五度六分、和歌山は、十五度二分あり。雨量も、亦豊富なり。就中高知の如きは、全國第一に位す。但、伊豫、讃岐は、山北に位するを以て、山陽道と等しく少量なり。

(八)物産 本道は、地味概ね肥沃にして、農産物多し。と雖、米田少くして、多く麥を作り、又、伊豫、土佐は、多く玉蜀黍、甘薯を植う。今、主要の産物を擧ぐれば、紀伊の蜜柑、阿波の藍、土佐の紙、鯉節を最とし、其の他、別子の銅、紀州フナナル、土佐珊瑚及び、眞珠、阿波の齋田鹽、淡路の伊賀野燒、伊豫の松山縞、雲齋織、那智の黒石、及び、讃岐の保多縞、砂

糖等皆、其の名あり。

海産物に、至る所にありと雖、殊に紀伊、土佐の海に多し。而して、又諸種の魚類に富めり。伊豫の鱈、紀伊の鰯、石花菜等も、亦著名なり。その他熊野沖と土佐沖とに、鯨漁盛なり。

## 第二 處誌

(二)和歌山市及び其の近傍 和歌山市は、紀伊國の西北隅に位して、紀伊川の口に在り。和歌山縣廳ありて、紀伊の一市七郡を管轄す。この地は、舊と徳川氏の城地にして、人口五万五千餘あり。大阪を距ること十七里、水陸交通の便ありて、商業繁盛の地たり。木綿の織物を産す。紀州フナテル之かり。その南一里許に、和歌浦の名勝あり。湯淺、田邊、新宮、尾鷲オノは、海濱の名邑にして、皆小繁華の地あり。湯淺は、有田川の南にありて、此の近傍は、即ち有田蜜柑の産地あり。又、十津

川の下流に、本宮の温泉あり、其の他、龍神、神場、湯崎等も、亦、温泉を以て著はる。

(二) 徳島市及び其の近傍 徳島市は、阿波の東北に在り、徳島縣廳の所在地にして、阿波一國を管轄せり、舊と蜂須賀氏の城地にして、人口、六万一千餘あり、大阪、神戸との交通、甚だ便利にして、商業の繁盛あること、四國第一とす。

徳島市の北四里許に撫養あり、淡路に通ずる要港なり、その他、池田、富岡等は、國中の名邑なり。

淡路は、兵庫縣に屬し、其の海岸に、洲本、由良、福良等の諸邑あれども、その中、洲本最も繁華あり。

(三) 高松市及び其の近傍 高松市は、讃岐の北海岸に在りて、瀬戸内海の要港たり、舊と松平氏の城地なり、香川縣廳ありて、讃岐一國を管轄す、人口、三萬四千餘、商業繁華の地あり。

高松市の西に丸龜あり、人口、一萬九千餘、第五師團の第十旅團を置き、其の西の多度津に、繁華の港にして、之より琴平神社に到る鐵道あり、此の他、阪出、觀音寺等の名邑あり。

(四) 松山市及び其の近傍 松山市は、伊豫の西北岸に位し、舊と久松氏の城地あり、愛媛縣廳ありて、伊豫一國を管す、又、第五師團の分營あり、人口、三萬四千餘、繁華の地たり、其の西一里餘にして、三津濱の要港あり、又、東に道後の温泉あり、規模宏大にして、浴客常に多し、此の所と三津濱との間に鐵道あり。

松山市の南に宇和島あり、北に今治あり、共に、碇舶の地たり、その他、大洲、八幡濱、小松、西條等の名邑あり、又、松山市の東方、土佐の國境に、別子の銅山ありて、採鑛甚だ盛なり。

(五) 高知市及び其の近傍 高知市は、浦戸灣に臨みて、山内氏の舊城地たり、高知縣廳此所にありて、土佐一國を管轄す、人口、三万七千餘

商業盛なり。

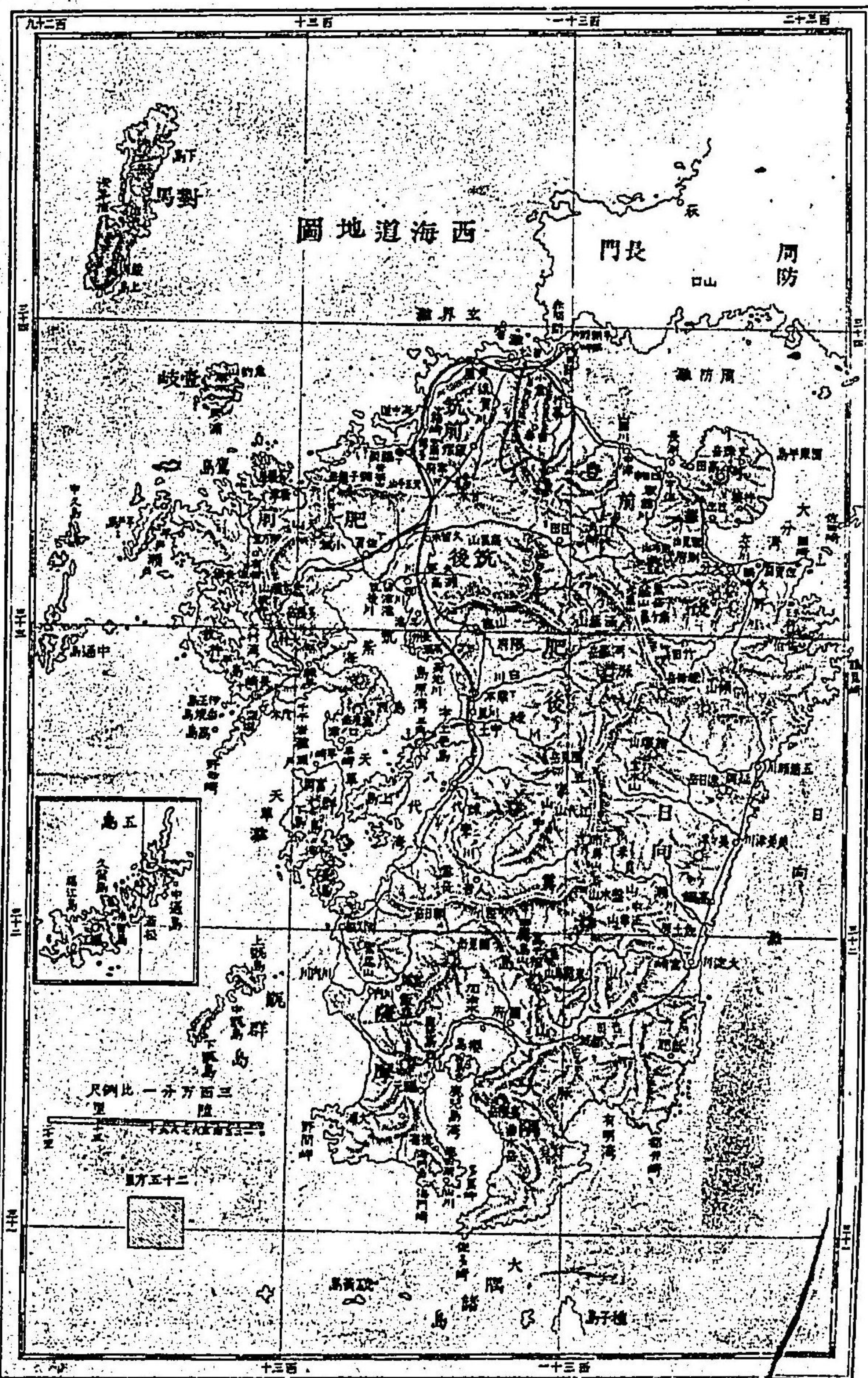
中村は、國の西部にある都會にして、須崎は、中部海岸の要港なり、其の他、伊野、高岡等は、縣内の名邑にして、紙を産すること最多し。

### 第八節 西海道

#### 第一 總説

(一)位置廣袤人口 西海道は、我が國の西南に位し、九州、壹岐、對馬、琉球諸島及び、數多の屬島より成れり、其の北東は、早瀬海峡と速吸海峡を隔て、中國、四國と相對し、東南は、太平洋に面し、琉球諸島は、遠く西南に相連りて、臺灣に近づけり、西北は、支那海、日本海に臨み、面積、二千八百二十八方里、人口、六百三十七萬九千二百六十二人なり、即ち、一方里につき、二千二百五十五人餘の割合なり。

(二)區劃 本道十二國を、六市八十郡に分ち、之を八縣に分轄せり、但





だ琉球は、四十三間切に分てり。間切は、猶郡區の如し。

筑前國 一 市 福岡  
九 郡 糟谷、宗像、鞍手、嘉穗、朝倉、筑紫、糸島、早良、遠賀

筑後國 一 市 久留米  
六 郡 三井、三潯、八女、浮羽、山門、三池

豊前國 六 郡 企救、田川、京都、築上、宇佐、下毛

豊後國 十 郡 西國東、東國東、逸見、大分、北海部、南海部、大野、直入、玖珠、日田

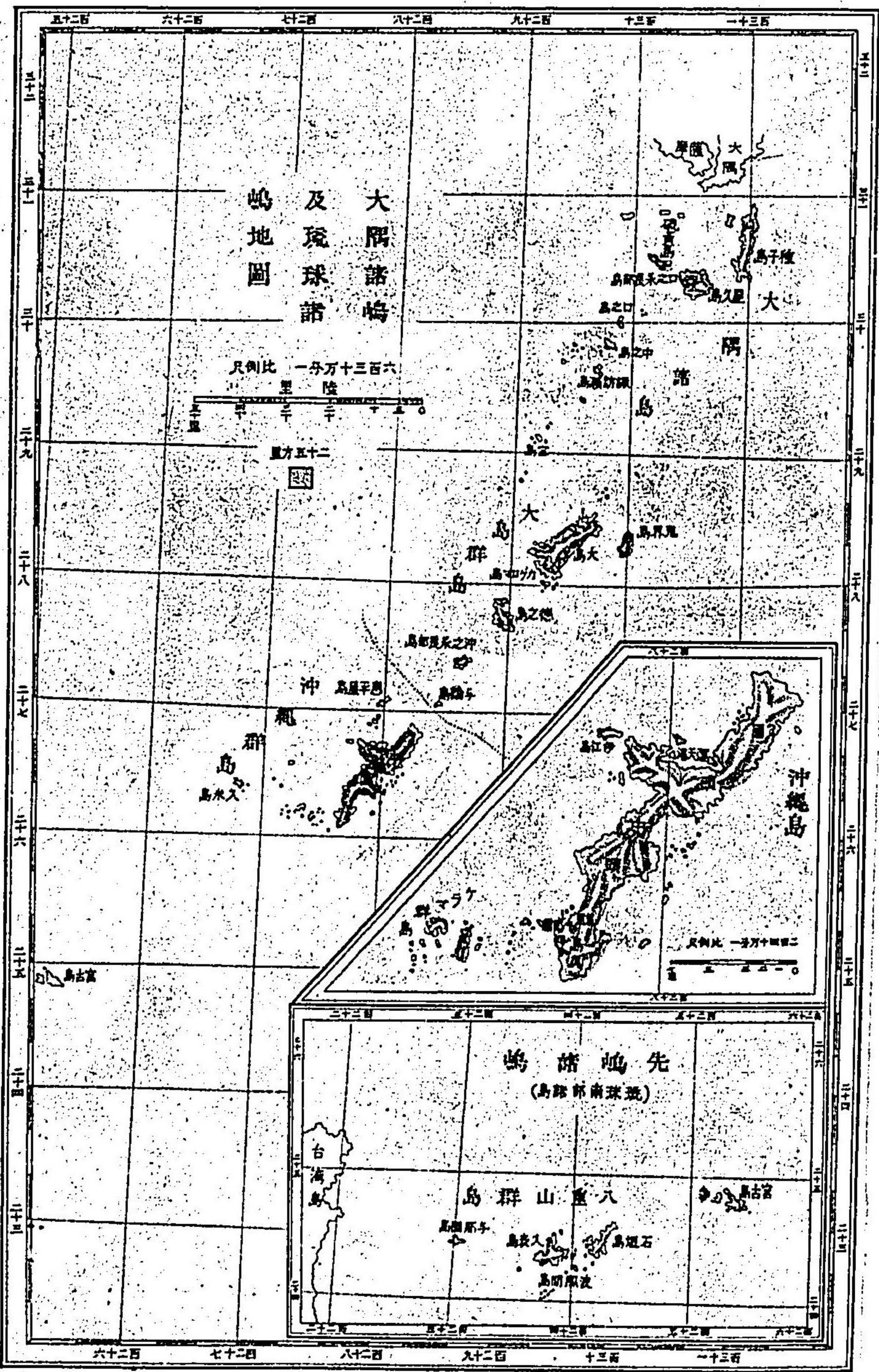
二 市 長崎  
佐賀

福岡縣

大分縣

長崎縣

佐賀縣



肥前國

十四郡

東彼杵、西彼杵、北高來、南高來、北松浦、南松浦、佐賀、神崎、三養基、小城、東松浦、西松浦、杵島、藤津

長崎縣

肥後國

一十二郡

市熊本、飽託、宇土、玉名、鹿本、菊池、阿蘇、上益城、上益城、八代、葦北、球摩、天草

熊本縣

日向國

八郡

宮崎、南那珂、兒陽、東白杵、西白杵、北諸縣、西諸縣、東諸縣

宮崎縣

大隅國

五郡

始良、贈嶽、肝屬、熊毛、大島

鹿島縣

薩摩國

七郡

郡甕島、揖宿、川邊、日置、薩摩、出水、伊佐

鹿島縣

壹岐國

一郡

壹岐

長崎縣

對馬國二郡上縣下縣……

琉球間切四十三間切……

沖繩縣

(三)地勢 本道は、山脈、その地形に従ひて曲折し、到る所に、山岳多くして、平野少なし。獨り、筑紫平原は、肥前、筑後、肥後に跨りて、稍廣大なり。其の他は、唯、福岡近傍、豊前の海岸等に、小平野あるのみ。河流は、中央の山脈より發して、四方に分疏せり。

(四)海岸 本道の海岸は、西部に於て、屈曲極めて多く、大小數多の屬島、その周圍に散在せり。先づ、肥前の西北海岸には、東松浦、北松浦の兩半島ありて、其の間に伊万里灣あり。北松浦半島の西に、平戸、瀬戸を隔て、平戸島あり。その西南に、宇久島、中通島、奈留島、久賀島、福江島あり。之を五島と稱す。鯛浦は、一に大村灣と稱し、東西彼杵郡の間に灣入せり。此の灣の入口に、佐世保軍港あり。筑紫灣は、又、有明海と云ふ。肥前、筑後、肥後の間に深く灣入し、島原半島と相對して、其の

海門を爲す。その間を早崎海峡と云ふ。世に不知火と稱するは、此の海上に在り。島原、西彼杵、兩半島の間は、又、一半島あり。其の端を野母崎と云ふ。長崎港は、此の半島の頸部にあり。島原半島の南にあるを、天草島と云ふ。上下の二島あり。其の西の海を天草洋と云ふ。天草島の南に長島あり。その西南薩摩の海上に、甑島あり。薩摩、大隅は、共に、半島を爲して、甑島灣を抱けり。灣内に櫻島あり。大隅に屬す。薩摩半島の東南端に、開聞岬あり。其の西端に野間岬あり。大隅半島の南端は、佐多岬にして、その海上に種子屋久、大島、徳島等、大小二十餘の島嶼羅列せり。之を大隅諸島と云ふ。大隅半島の東端に、火崎あり。日向の南端都井岬と相望みて、其の間に志布志灣あり。都井岬の北、日向の海上を、日向灘と稱す。其の海岸は、殆ど、一直線にして、港灣乏しく、唯、細島の小港あるのみ。

豊後の南部に、小半島、多く海上に斗出せり。佐賀の關に、其の東角を

地藏岬と云ひ、伊豫の佐田岬と相對して、内海と外海との門口を爲せり。佐賀、關の西に、別府灣あり。其の北に、國東山嘴あり。周防灘に向へり。早輦崎は、本道の北端に方り。門司港のある所にして、赤間、關と相拒ること、僅に、十餘町に過ぎず。之より以西にて、筑後の海岸の、玄界灘に面する部分に、出入鮮からず。雖、福岡灣、最も大なり。その西に唐津灣あり。

壹岐、對馬の兩島は、本道の西北海上にあり。兩島の間を、對馬海峡と云ふ。

(五)山岳 本道に、九州山脈、霧島火山脈、阿蘇火山脈の三山脈あり。九州山脈は、南北の二派に分る。南派は、天草諸島より、肥後の西南部に連り、日向、肥後の界を過ぎて、豊後の東部に入り、佐賀、關に至りて、海に入る。此山脈中には、紫尾山(四七八五)、白髮山、國見山、市房山(六一三八)、江代山(五四七八)、祖母岳(五六七六)等の高山あり。その中、市房山は、